
Angelworks

m i ㄱ a i

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angelworks

【Nコード】

N8346K

【作者名】

miyai

【あらすじ】

天使のお仕事——その一、人間を幸せにすること。その二、死神を滅すること。その三、神に従うこと。——俺はこの三つに従い、天使としてのお仕事を全うしなければいけない。これが俺に課せられた使命なんだ。——

女の子に姿に変えられ天使となった主人公は、神からの命令に従い人間を幸せにするため苦悩します。趣味で書く小説ですので更新は遅めです。

プロローグ

今日も一人の少女が、沢山の男に囲まれ、苦悶の表情を浮かべている。とは、言っても男達はあくまで紳士的にその少女に接し、危害を加えようとはしない。ただ、その男達は自分を選んで貰おうと必死だからだ。

なぜなら、自分達の子孫を残すことが出来るのはこの少女だけなのだから。いや、もっと言えば全人類の中で新しく人類を「製造」する機能を持ち合わせているのはこの少女だけということだ。

しかし、そんな真剣な男達の苦労も虚しく、いつものように彼女が彼らに投げ掛ける言葉は、

「ごめんなさい」

の一言だけであつた。

男達は落胆の表情を見せたが、すぐにそれを認め、それぞれの家へと帰っていくだけであつた。

そこには、いつも通りに一万人の男達が順番に施設から出ていく光景があるだけであつた。

これで十日目——と、嘆く少し歳のよつた男性の姿と、それに不満の色を隠しきれない少女の姿が残っていたが、それもいつも通り。

そんな毎日に嫌気の差す少女は今日も同じように叫ぶ。

「俺は男だっつうの！ー！！」

その叫びはいつものように街中に響き、いつものように人々の耳に入っていた。

少女はひとしきり叫び終わると、面会用の部屋から出ていき、自室へと戻っていった。

まだ幼い少女には酷な毎日だが、それは選ばれた人間としては仕方ないことなのだった。

神から選ばれた、天使としての役目として――

EP 1 罪（前書き）

はじめまして、m i r a iと言います。ぐだぐだな文章ですが楽しんでいただけたら幸いです。ただ本編に入るのには少し時間がかかります。あしからず。

EP 1 罪

「おい、何今さらびびってんだ、さつさとやれ」

凄味を効かせた声で、金髪の大柄な男は言う。顔には幾つもの傷があり、安穩とした生活を送っているような人間でないの是一目でわかるようだ。

「だ、だけど……殴ったりしたらこの人は……」

命令された少年は、鉄パイプを両手で覚束なく構え震えている。いかにもいままで暴力沙汰には関わっていなかったことが明らかだ。

特に運動が出来そうなほどしっかりした体格はしていないし、度胸のあるような顔をしていない。こんな少年に人を殴れと言うほうが無理があるだろう。

一方、もうすでに顔面やら身体中に痣だらけで、少年の真下にうつぷしている男はというと、殆んど意識がないのか、怯えもしない。ただ、荒い呼吸を響かせ、少年の焦燥を駆り立てているぐらいだ。

「どうせ、人間なんかもう消えていつてるんだ。こいつ一人ぐらい消えたって誰もかまいやしねえよ」

「だ、だけど、この人家族とかは悲しむんじゃ……」

「ああ？ああ……家族ね、そんな鬱陶しいもんがまだ付きまとって嫌がんのかこいつは。なら簡単だ、家族もろともやればいい。それ

なら誰も悲しまないさ。なあ、なにか問題あるか？」

非人道的な言葉を浴びさせられ、少年からは玉のような汗があふれだす。

「それとも……親友の俺の言葉が聞けないつつのか？ 真人？ なあ、どうなんだよ、聞けないのか？」

「あ……いや……」

——この人を殺さない俺は……

「無い……よ。問題ない。やるよ」

少年は金髪の男に屈してしまうだけだった。

すでに何人もの人がこの金髪の男によって殺されていくのを見てきた少年であったが、自分がとどめ……命を奪うのは初めてだった。

「ほら、早くしろ」

「うん」

その言葉を聞き、少年は鉄パイプを背中まで振りかぶり、全力で倒れている男の頭へと振り下ろした。が、

「おい、どういう真似だ？」

振り下ろした鉄パイプは男の頭のすぐ横の地面を叩いただけであった。

「はははは……」

「外しただけだよなあ？お前は運動神経がないからなあ」

「う、うん……」

「じゃあこれを使えよ」

金髪の男が少年に差し出したのは、日常では絶対に目にかけることのないもの。

「じ、銃？」

「ああ、そうだ。これなら外さないし、自分で殺す感触がないから簡単だろ？」

「え、ああ……」

そう、笑顔で返してくる男に戸惑いを隠せない少年。それに追い討ちをかけるように。

「やれよ。外せば後はない」

——もう、どうしようもないのかな……

少年に打開策はなかった。もう、この男に従うしか方法はないんだ。自分が、人間として行ってきた全てをすて、今、人を一人殺すしかないんだと。

諦めたように、銃を受け取った少年は銃口を男の頭へと突き付ける。

「ごめんなさい」

そう一言だけ声をかけ、ゆっくりと引き金を引いた。

バンツと銃声が響いたかと思うと、目の前いっぱい赤が広がった。少年の初めて浴びる還り血だ。

「はははははは！！！！これだからやめられない！！！！美しき赤！！！！一番人間を感じる瞬間だ！！！！どうだ？親友よ？初めての感触は！！！！？」

金髪の男はこの路地裏全体に響くほど大声で笑い、その喜びを溢れんばかりに、少年に問う。

「もう、無理だよ……」

その男とは真逆の感情に包まれた少年は……

「あぁん？お前、どういうつもりだ」

「俺は……もう、無理なんだ」

ぼろぼろの精神で、自らのこめかみに銃口を当てる。引き金にかけている指が震えるのは言うまでもなく、涙を両目に一杯に溜めながら、金髪の男に言う。

「俺は……昔のままがよかったよ。みんなが、愛しあって、誰も憎しみなんかもたなくて……幸せになった二人は赤ちゃんを産んで……」

…」

震える声で、もはやなにを言っているかはあやふやだったが、その言葉を男は真剣に聞いていた。

「おい、何やってんだよ……」

「こんな、世界がお前を変えた。俺は知ってたよ。人々は消えゆく仲間たちに恐怖してたんだって。行き場のない、恐怖と怒りが全部を変えていったんだって……」

「おい、やめろ……やめろって!」

ただならぬ気配を感じ、少年を必死に止めようとする金髪の男。その表情からはやはり少年を本当に親友だと思っていたことがうかがえる。

だがそれはもう遅い。今、少年と男の間にはあまりに距離がある。それは物理的な距離だけでなく、心の距離も表しているかのようだった。

「生まれ変わったら……この世界をかえられるような……そんな人間になりたいな。あ、でも、人を殺しちゃったような俺は地獄に行っちゃうのかもね。まあそんなことはどうでもいいや、今はただ、この罪悪感から逃げ出したい。ごめんね、暁」

「やめろおお!!!!!!」

必死に手を男の努力も虚しく、銃声は響きわたるのだった。

EP2 転生

闇……ひたすら覆い尽くすだけの闇だ。周りには何も見えなく、ただ、黒があるのを認識できるだけ。

少年は、自分の身体が動かないことに気付き初めて死を実感した。

少年は思う。死んだら何もないなんて嘘だ、闇があるじゃないか、闇を感じるじゃないかと。

——これなら何もない方がましじゃないか。

しかし、少年はふと気が付く。身体が動かないことを感じられると、いうよりもそこには確かに重力を感じ、ただ自分の身体の動かし方を忘れていただけだと。

それに僅かだが音が聞こえる。足音だ。コツコツと、下駄のような足音だ。それが自分に近づいていくのを把握するにはさほど時間はかからなかった。

コツ。足音が少年のすぐそばで止まる。依然として闇だけなのでそこに誰がいるのかは認識出来ない。ただ、何かあるのは間違いないと少年は確信した。

そつと、額に温もりを感じる。それは手のひらがあてられているのだと。

「おや、どうした、喋られないのか？」

疑問がなげかけられ、初めて自分が声が出せないことに気付く。いや、多分出せないだろうとは思ってはいたが、確かめるまでもないことだと思っていたからだ。

「まあ、仕方ないか。頭に銃弾をぶちこんで死んだからな、そういう機能が回復するには時間がかかるか。だがすまないがこちらとしてももう時間がないんだ。少し手っ取り早くすませていただくよ」

そう勝手に話を進める声。その声は少し老けていて、おそらく六十は越えているであろう男性の声であった。

「お前は罪を犯した。罪を犯した者は原則として天界で懲役を課せられ、百五十年働き続けなければいけない決まりとなっている」

——天界？なんだそれは？

そんな少年の気持ちなぞまったく気にも留めず、声は続ける。

「しかし、お前は自らの罪を認め自害した。本当ならば許されない罪だったが、お前のその行為免じ、少しだけチャンスをやろう」

——チャンス……

「天使のお仕事その一、人間を幸せにすること。その二、死神を滅すること。その三、神に従うこと……」

いきなり羅列される言葉に戸惑いながら少年はその言葉をさらに聞き続ける。

「お前は下界に転生し、罪滅ぼしをするのだ、天の遣いとしてな。今下界は危機に瀕している。それはお前が一番わかっているはず。それを救える能力をお前に与える。生き返ることが出来、下界の救世主になれる、一石二鳥だろう？」

——え、ちよつと……話が見えない……

少年は必死に自分の意志を伝えようとしたが、顔の筋肉一つ動かせないような状態で何を伝えられようか。

「お仕事、開始だ」

その瞬間、少年の身体はふわっと宙に浮き、下へ下へと墮ちていった。

EP3 天使（前書き）

まだまだ書き始めですが、感想を待っています。

EP3 天使

——寒い……

少年がはじめに感じたのは温度だった。そこは薄暗い、あの路地裏であつた。感じた冷たさはアスファルト。ゴツゴツした感触も久しぶりに感じられた。うつ伏せに倒れており、己の顔が地面と向き合っているのがわかつた。

それだからこそ感じた違和感。地面と接している胸部に変な感触があることに気付く。しかし、自身で身体を起こすことはままならず、ただもぞもぞと動くだけであつた。

そこへたまたまその姿を発見した一人の女性が少年へと駆け寄る。それはあまりに少年が異常に見えたからなのだが……

「だ、大丈夫ですか？……あ、えつと……言葉とか通じますか？」

少年は何を言っているんだ、と疑問の念を抱いた。自分はどう見たって外国の人には見えないだろうと。意識確認のための語りかけだったのかもしれないが、少年にとってはどうでもいいことだった。なぜなら今は声が……

「……あ……！？」

出ないはずだった。だが、ダメ元で喉を震わせると現に擦れるような声が出ているではないか。少し潤いが足りない所為か思っているよりは高い声が出てしまったが、声が出るということに、喜びを感じていた。

「わかりますか！？あ、無理して声を出さなくても結構です。取り敢えず今から身体を起こしますから……」

と、自らの羽織っていたコートを少年の背中にかぶせ、お腹あたりに手を回す女性。上着を被せられたのはなぜだろうかと少年は考えたが、腹に当たる手の感触があまりにも温かったため、自分が今、裸であることを認識した。

不良な奴らに身ぐるみを剥がれていったのかと思ったが、血塗れの服なぞ持っていたてもなんの価値もないだろうに、と不思議がっていた。

少し羞恥心を覚えたが、身体を動かせないためどうしようもなく、ただされるがままであった。だからこそ、裸を隠すという気づかいは有難いものであった。

しかし、そこでとある事実少年は気付く。身体を起こされたことにより確認できる己の身体。そこにあったのは雪のように白く華奢な手足であり、自らの記憶とは恐ろしく違っていた。

首をもう少し下に向けると、わずかながらに膨らんだ胸。それもまた見覚えのないものであり、少年の思考をオーバーフローさせていく。そして極め付けに下腹部にあったはずのものがなくなっている。

——え……なんだ？これ？なにが起こってる？

追いつかない思考の中で記憶を巡らせる。しかし、考えるだけ頭が痛くなっていっただけであった。

そこで女性はコートの前を閉めようとする。トレンチコートなので普通はそこまで手間取るようなことはあるはずないのだが、妙に時間をかけている。そして、妥協したかのように一度コートを脱がそうとする。

なぜだろう、と少年は思ったが、それはすぐに明らかなものとなる。コートを脱がされた瞬間に大きく広がった純白によって――

ばさつと大きな音をたて広がったそれが左右の視線の端から見えるのがわかった。そして理解する、自分の背中から生えているものがあり、それがいるためにコートが上手く着られなかったのだと。

あまりに現実離れな光景に少し惚けていた女であつたが、口から漏らすように呟やく。

「まるで――天使みたい――」

その言葉を聞き、ようやく自分のおかれている状況を理解する。ああ、これは全部あいつの仕業なんだろうと。

女の姿になり、さらに真つ白な羽が生えていることで、すっかり自分が真つ裸であることを忘れ、現実を受け止めきれないでいる少年であつた。

EP 4 現状（前書き）

気分を害する可能性を含む内容があります。女性に向ける偏見や差別などに嫌悪感を抱く方はご注意ください。あくまで小説としての架空の設定ということをわきまえて読んでいただければ幸いです。

EP 4 現状

そこはどこにでもありそうで、一見、見落としてしまいそうなくらい、普通に普通を重ねたような家だ。昔のこの国ならそうだったかも知れない。しかし、独り暮らし、ましてや女性が住んでいる家と聞けば、いささか贅沢なくらいなのだ。

そこには、布団に寝かされている小柄な“少女”が一人何かをするわけでもなく、ただ、静かに時を過ぎているのを感じている。

だいぶ落ち着きを取り戻したのか、少女が自ら身体を起こし、部屋の中をぐるぐると見渡していた。

——ここはどこだろう。

あまりの出来事に頭が追い付けず、気絶をしまっていて一瞬ここにどうして自分がいるのかわからずにいた。

徐々に頭が冴え、一人の女性に会ったことを思い出す。そしてたぶん、その女性が自分をここに運んで来たのだろうと適当に結論づけた。

いろんなものが揃っている。テレビ、冷蔵庫、エアコン、部屋の外からは洗濯機の回る音も聞こえる。さまざまな電化製品が稼働しているこの家はきつとあの女性以外にも誰かいるのだろうと、少女もとい、もと少年は考えた。

そしてさらに思い出す。今は、自分がどこにいるかなんてどうでもいい。なぜ、自分の姿が女になり、羽が生えていたのか……天使、ばかっている。

しかし、数刻前に感じたものが夢とも思えないし、現に少女には羽のようなものが生えている。今はあれが現実に感じたものだと考えざるしかない。

動かなかった身体はかなり自由に動くようになっていよう、ペタペタと自分の身体をさわり、確認をした。いや、確認するまでもなかったが、少年はもう少女になってしまっているのだ。

思い切って立ち上がってみた少女。背中に穴を開けた病院着を身につけている。おそらくこれもあの女性が手配したものだろう。しかし、その女性の姿が見当たらない。洗濯機が動いているようなので家のどこかにはいるはずなのだが――

ふと、少女は思う。自分は転生したのであれば、前の自分はどうかだったのであろうと。あの時は頭を銃で打ち抜き即死したはずで……

しかし、自分が目を覚ましていたのはあの路地裏であつた。そこにはただ、自分が倒れていただけであり、死体のようなものはなかったかのように思われる。

とにかく少女の記憶は曖昧で、その場の様子をよく見れていなかったため、結論としてあの女性が帰ってくるまで待つことにした。

少女はただ待っているだけではつまらないと思い、部屋の中にある新聞に目を通す。

そして一つの記事を見てふと思う。なぜ、生き返るのなら男にならなかったのだろうか。

《今日、日本全国の女性の生殖機能が消失されたのが厚生労働省により確認された。さまざまな科学者が原因を追求し、対策を謀ろうとしたが、何一つ成果が得られなかったと発表している。専門家は、女性の社会的地位にさらに大きな影響が出るとみられ――》

今からおよそ20年前、初めての症状が確認された。とある20代女性が急に生理がなくなったと病院に駆け寄る。その時医者はそういう病気もある、と言い前例にしたがった処置を行った。しかし、症状は治ることがなくその女性が愛する夫との子供を授かることはなかった。

ホルモンなどの異常とはまったく別物、そう明らかったのはそれよりも二年も後の話だった。そして、それまでに日本全国で何人も発症者が増えていった。その時既に100人もが病状を訴えており、政府は遂に研究機関を設けた。

しかし、研究は一進一退、病状を訴えるものはいるが、子供を授けることが出来ない以外に症状は何も無かったため、何が原因でそんなことが起こるようになったのかまったく解析出来なかった。

さらに、発症者が現われてから5年、大人、成人女性だけではなく、年配の行かない少女にまでそのような症状が現れ始めた。

原因不明のまま、その進行速度はとどまることなく、日本を覆い尽くしていったのだ。

それを危険視した外国の国々は、日本との外交を即刻打ち切り、日本からの入出国も禁止した。そして今の日本は逆鎖国状態になってしまったのである。

もちろん日本社会はどんどん衰退の一途を辿っていき、日本滅亡の危機に瀕するほどにまでなってしまった。さらに子孫の繁栄が絶対的に不可能と判断した国民の多くが、勤労意欲を失ってしまったのであった。

それによって始まったのが女性差別。一時の日本ではそんなものは倫理的観念に反しているとし、禁止され男女平等化が謀られていた。しかし、女性の生殖機能消滅により、日本の衰退原因は女性にあるものと考えられるものが増えてきた。それが原因により、物理的力の弱い女性は男性に逆らうことが出来ず、肩身の狭い身へと再び成り下がってしまったのだ。

そういう男尊女卑思想を持つものはまだ極一部だったのだが、女性が力仕事の出来ないという点で働き口が少なくなっていたのは事実だった。今の日本ではコンピュータを使ったIT系統の仕事よりも、農業関連つまりは食料生産業の方が必要性が格段に上がっているのだ。

女性は無用。そう世間が騒ぎたてていくことにより、女性に対する暴力、その中でも性的犯罪が増加していったのだが……治安維持団体もそこまで取り締まるようなこともしなくなり、拳げ句の果ては奴隷の様に扱う地方まで——人々が荒れ、日本の治安は過去最悪のものとなった。

逆に、生殖機能が失われなかった女性はというと、自分の子孫を残そうと必死になった男たちに一斉に憑りつかれる羽目にあうのである。どの道今の時代に女性の落ち着ける場所など存在しえないのであった。

しかし先刻ほど、どうやら日本最後の子孫を残すことの出来る女性

がいなくなってしまったらしい。それは他の人々と同じようになるの前触れもなくその機能を失ったのか、はたまた群集と呼ばれるほどの男たちに言いよられストレスにより倒れてしまったのか――

どうやら、それにより本当に女性の地位は日本での底辺まで低迷してしまつたようだ。そんな、時代にこの少年――東雲真人は少女へと姿を変え、甦つたのである。

「なんだよ……最悪だ……もう……」

今の日本がどのような状況にあるか十分に理解していた真人は、自分の置かれている立場に嫌気がさした。

真人自体は女性に偏見の目を向けることはなかったが、自分が女性になつたとなると話は別である。自身がどう思つていようと他人には関係ないのだ。

真人は力無く新聞を丸めた。もう、その記事が視線に入らないように。

布団に座り込み、自分に生えた羽を触りながら、自分はこれからどうすればいいのだろうと不安の中考えるのであった。

EP 4 現状（後書き）

まだまだ物語は動いていません。世界観の説明のような話でした。次話からは人物を動かしていきたいです。

EP5 よろしく願います

家の主人は考えていた。ベランダに出、ひんやりとした外の空気を味わいながら、頭の整理をしている最中なのだ。

——よく考えればとんでもないことだよなあ。

仕事先からの帰り、何の気もなく、いつも通りの道を歩いていたら、彼女はいつもと大通りよりも路地裏など奇妙な道を歩いて帰っている。新しい発見などを見つけるためだ。それはただ彼女にとっては心の支えのような習慣でたいした利益は望んでいなかった。そのはずだが……

——まさか、羽の生えた少女を拾うとはね……明日は雪でも降るのかしら。

もちろん彼女自身が本当に雪が降るとは思っていないし、今は冬ですらない。だからこそ、それほどまでにあり得なかったのだ。ただ、もうどうしようもない日々の中で、現実味から遠く離れた存在と遭遇したことにより、微かな希望のようなものを垣間見たからだ。このままでは人々は苦しみ、閉ざされた国の中で繰り返さていく、なんの進展もない日々を過ごし死んでゆくであろう、そう思っていた。まさか、いまになってこのつまらない日常に変化が起こるなんて思いもしなかったのだ。

——天使なのかな……そんなわけないか。羽はただの飾りだよ。でも、だったらなんで裸なんかで……

彼女の中にはさまざまな憶測が飛びかっていた。もしかしたらただの露出狂の類なのかもしれないし、本当に天使で、私たちを助けに来てくれたのかもしれない。はたまた、夢であり、もう一度部屋に入って彼女を見れば羽はなくなっているとか……

一番に常識的なのが羽のアクセサリーを付けた露出狂という考えであるのが、彼女はおかしくてたまらなかった。

——やれやれ、相当疲れてるな、私。少し、頭がおかしいのかもしれない。その方が現実的だ。

彼女はそう考え直した。それもそのはず、ここ数日彼女はまったく言ってよいほどに睡眠をとっておらず、そんな中のもやもやした思考回路でバカな幻想を見たと思ってても仕方はないだろう。

だんだんと頭が冴えてくるに連れ、馬鹿馬鹿しくなってきた彼女はもう一度その少女に会ってみることにした。その目で見たものが一番正しい。確かめてしまえば早いではないかと。

変に考えるのは自分らしくない、そう感じた。今までもなにもかも全力でやってきたのに、たかが少女一人を拾ってきただけで何を悩んでいるのだ。昔の自分なら、少女の話を聞いてやり、その少女のために全力を尽くすのではないだろうか？

それに、もし、少女が本当に天使ならば……何かが変わるかもしれない。いや、変えてみせるのだ。

気が付けば、彼女は部屋の前まで足を運んでいた。

——なんて声を掛けよう……

言葉は通じるかもしれないが、あんな珍妙な格好をした少女に普通に話したとして、まともな回答が返ってくるだろうか？そう考えてしまう。

——でも、あの子だってきつとそう、思ってるはずよね。ここは私がきちんと話を聞いてあげなくちゃ！

いつの間にか強く握っていた両手を解き、右手を部屋の扉へと掛けた。

開かれた扉の向こうには、布団の上で蹲っている、羽の生えた少女がいた。その羽は、怖いほどに透き通るような純白で、彼女を緊張させた。

——よかった、起きてたみたい。……大丈夫、大丈夫だ。私が……私が進まなくちゃ！！

彼女は布団のそばにかがみ、少女へと声を掛けた。

「ねえ、気分はどう？はじめまして、私はね、佐花美咲って言うの。よかったらあなたのお名前も教えてくれるかしら」

いきなりにしては少し無茶だっただろうか、と彼女は思った。しかし、少女は顔を上げ不思議そうな顔をして口を開く。

「……マコト……」

「え？」

「東雲真人です」

まさかの日本名が返ってくるとは思わず、佐花は少しばかり啞然としてしまった。

しかし、それよりも少女が自分に少しでも興味を持ってくれたことに喜びを感じていた。

「ありがとう、その……行き場とかないかもしれないから、しばらくは私の家に住んでもらって大丈夫だからね」

「はい……そうですか……あ、あの」

「ん？どうしたの？」

「あ、め、迷惑かも知れませんがよろしく願いします」

こうして、天使真人と、佐花は一緒に暮らすこととなった。

EP5 よろしくお願ひします（後書き）

やっと登場人物の名前を出せました！遅いですよね。タイミングがつかめず四苦八苦です。

EP 6 少女（前書き）

少しでもエッチな内容かもしれませんが。ただしこれは性転換ものには仕方ないものとして認識していただけたらよいかと思います。

EP 6 少女

小さな個室、少女は一人四苦八苦していた。

——うう……なんか罪悪感を感じるなあ。自分の身体だけど、やっぱり恥ずかしいし。でもしないと身体に悪いよなあ……

女になったばかりの真人が悩んでいること、それは端的に言えば排泄行為だ。まだうぶな真人にとっては、自分の身体と言えど、自ら下着を下ろし、用を足すということはとてつもない羞恥心を感じてしまう。

ちなみに、真人は現在佐花から借りた下着を着けており、それだけで心が締め付けられているほど。

——でも、女の子ってどうやっておしっこかするんだろう。確かに聞いた話では座ってするんだよな。それで出した後にあそこを拭くんだっけ……うっ。そろそろヤバイ！

限界に近づいた真人は意を決し、下着を下ろした……

「どっしたの？えらく遅かったけれど」

「あ、いや、なんでも……ないです」

「？」

トイレを出た後、佐花は心配そうにそう言った。しかし、羞恥心に耐えながら行為に及んだ真人にとつてはそれは追い討ちでしかなく、赤くなつた頬をさらに赤くさせられるはめになつた。

本来ならば、女の子についてわからないことは佐花に聞くべきだと真人はわかっている。しかし、そんなことは容易にできないのだ。佐花は女性である。もし、自分が実は男だったと知ってもなお、この家に置いてもらえるとは限らないからだ。

いつそ男だとばらさずに聞くことも可能ではあるが、それはいくらなんでも不自然に思われるのではと真人は躊躇している。

とにかく今は行く宛てがない真人にとつて、無償で泊めてもらえるということは何よりもありがたいことである。今、佐花との関係に亀裂を作ってしまうのは賢くない選択だろう。出会つたばかりの二人に関係もなにもありはしないが……少なくとも佐花は真人の心配はしてくれているだけ悪く思われてはいないだろう。

佐花の性格上、無理に事情を聞いてきたりすることはありえないであろうから、事情を話すとしたら真人からしかまずない。真人が変なことを言わないかぎりはこの家で居ることができるのだ。

とにもかくにもしばらくは、男の身体と女の身体との違いにどぎまぎして生活せざるを得ないのだ。それであるから、男とは違い尿意の早い女性との身体の違和感をさっそく体験してしまったわけである。

「そっぴや、さっき起きたばっかりだから寝汗掻いてるよね。それ

に裸で地面に倒れてたわけだし……お風呂とか入りたくない？一応あるし、お湯だって出るよ？」

「あつ……」

——そういえばそうだった。俺、風呂入ってないんだった。なんか身体がベタベタすると思ったら……そういや、髪もべたつくなあ。

今さらながら、身体が結構汚れていることに気が付く真人。今の真人の髪は前の姿よりもちよつと長くなって、肩甲骨ぐらいまである。しかも男の姿とは違い、髪の色はどうやら白くなっているようで、肌の白さも相まって、少しの汚れでも目立つ。佐花はそれが気になったようだ。

「本当はあなたが寝ている間に身体を拭いてあげようかと思ったんだけど……」

そういつて佐花は視線を羽へと向ける。それはそうだろう。羽なんてものをどう扱えばいいものか普通はわかるわけがない。下手に触るといけないと思った佐花は本人に任せることにしたのだ。

実際、その本人自体も自分の羽がどんなものかなどよく見てもいいし、どんなふうに扱えばいいものかなど知るよしもない。だが、このまま放っておくのもいいわけではない。

「あ、じゃあお言葉に甘えます」

「そう。じゃあお風呂に入った後、ご飯を食べましょう。お腹すいてるでしょ？それに綺麗になってから食べたほうがいいだろうしね」

「あ、はい」

ずっと自分のお腹に手をあて、腹が減っていたことを思い出す真人。自分のお腹の中に今、食べ物は入っているのか？と、少しばかり考えたが、考えるだけ無駄であろうとすぐにやめる。

「じゃあ、早速入りましょっか。結構広いから二人でも全然安心だからね」

「あ、はい。ありがとうございます……って二人！？」

「そうよ、二人一緒。水道代だって今のご時世ばかりにならないんだから節約しないと……ってあなたにはわからないかな？」

「あ、いや、ちがつ……その……」

あまりにも突然に言われてしまったのでどうしたものかと戸惑うばかりの真人。身体は女の子だが、心は男であるので、女性と一緒に入るのには罪悪感を感じてままならない。

「まさか、恥ずかしいなんて言わないでよね？もうすでにあなたの裸は何度も見てるんだから」

それもそうである。まず佐花と出会った時すでに自分は裸であったし、服を着せてもらった時にもずっと裸体を見られているであろう。自らの意識がなかった時に自分ですらよく見ていない裸を見られたことを思い出し、頬を赤らめる。

「はは、可愛いね。最近はそんな純粋な子、なかなか見てなかった

なあ。若い子はみんなすぐに体を売って……あ、ごめんなさい、あなたには関係ないわね」

「あ、はあ……」

「とにかくさ、早くしましょ。女の子同士なんだから恥ずかしいのもまだましでしょう？それにこれからはなるべく私と一緒に入ってもらうから」

「えっ！」

今日だけならと思っていた真人はその言葉に驚愕する。ただでさえ恥ずかしい気持ちを堪えようとしているのに、それを毎日続けるなんてとんでもないと。

「え、そんなに嫌？ははは、いくらなんでも傷ついちゃうなあ」

「あ、その……そういう訳じゃなくて……」

佐花を傷つけてしまったかと、少しずつ後悔の念を積み重ねる。

「じゃ、いいわよね！」

「えっ！！その、ちょっとま……！」

そんな気持ちはまるで意味がなく、佐花はちっとも気になどしてはいない。けろっとした顔で真人の手を引き、無理矢理脱衣室へと引っ張りだすのであった。

「ほら、早く脱ぎなさいよ。もう自分で動けるんでしょ？」

「あ、はい……でも、その……」

服を脱ぐことに抵抗を感じ、なかなか浴室へと入ることができない真人。佐花もまだ服を着たままで、真人がごねているのに苛立ちを隠せない表情をする。

「ああ！！もう面倒くさいなあ！！」

「え、ちょっ！ひゃあ！？」

我慢の限界に達した佐花は、真人の来ていた病院着を無理矢理ひっぺがしだした。もちろん真人は佐花の大胆な行動にあたふたするばかりである。それに抵抗なんて出来るわけもなく……あっけなく一糸纏わぬ姿へとされてしまった。

「ああ、あ……」

「やれやれ、手間のかかる子ねあなたは」

と、肩をすくめたあと自分も服を脱ぎだす佐花。真人はというと露になった身体を必死で手で隠すばかり。そして、視線を反らそうとすれば洗面台の鏡に目がゆき、女の子となってしまった自分の身体を見てしまう。そんな真人は思わず目を瞑り、顔を赤らめているだけであった。

「綺麗な肌をしてるのにこんなにどろどろでもったいないわね。綺麗

麗にしてあげるから早く入りましょ」

「うう……」

「もう、ほら諦めなさい」

やっと観念したのか、手をどけ、目を開く真人。そしてゆっくりと手を引かれ浴室へと入る……

「ね、慣れちゃえば恥ずかしくなんてないでしょ？」

ある程度身体を洗ったあと浴槽へと浸かり、身を寄せあう二人。

「はい……」

とは返事をするものの、まったく羞恥心の抜けない真人。自分は見えないものを見てしまい、触ってはいけないものを触ってしまったと湯船に顔を埋めるばかり。

もちろん、身体は佐花とは逆の方向に向け、体育座りのような体制で佐花と顔、というよりも身体を合わせないようにしていた。

「それにしても、本当すべすべだったなああなたの肌。羨ましいくらいにね髪も洗ったらさらさらになったし、羽だってお湯で流すとキラキラしてたし……ただ、胸の大きさだけは私の勝ちね！」

佐花のセクハラな発言を聞き、さらに顔を埋める真人。背中を流してもらうときに佐花は真人の身体をそこらじゅう触りまくっており、それを思い出すだけで顔は紅潮していくばかりである。

「あ、あの……あまりいやらしいことはしないでくださいよ？」

「あんなのスキンシップよ。それに仲良くするにはちょっとしたドキドキも必要不可欠なの」

「私にとってはちよつとどころじゃないです！」

「もつ……可愛いんだから」

「……」

何を言っても無駄だと感じた真人は無言を決め込んだ。そんな真人の心境を察したのか、佐花は浴槽から上がり、シャワーで身体を軽く流し出す。

「もつ、出るんですか？」

「え？なによ、あなたが一人の方がいいって言ったんじゃない。私はもういいからゆつくり浸かってなさい」

「えっと……わかりました」

その言葉を聞くと、佐花はシャワーを止め、そそくさと出ていった。一人きりになり、落ち着きを取り戻した真人は広くなった浴槽で足を伸ばす。

「ちっちゃくなつたなあ……俺」

今の身長は145cmあるかないくらいで、男の時でもそれほど大きいほうではなかった真人にとつても違いを大きく感じられた。

下を見ればあつたものが無くて無いものがある。それに少しばかり恥じらいを覚えるが、自分の身体だとなんとか割り切ろうとする。

そんなことよりも佐花の身体を見たことのほうが真人にとつては恥ずかしいことだった。女の人の裸を見たのは初めてだったため、鼓動が少しだけ早くなつたのがわかった。

ガタンと音が聞こえ、佐花が浴室から出ていったとうかがえる。真人は浴槽から出ると、鏡の前に立った。

「現実を受けとめない。俺は女の子になつたんだ……ちゃんと、見ておかないと」

真人が自分の身体をまじまじと見なかったのは、恥じらいや背徳感があつたこともあるが、それよりも自分が女の子になつたという現実から目を背けるためであつた。しかし、佐花とのこれからの生活を考える内に、そんなことではだめだと意を決した。

薄めで眺めていた鏡をしつかりと見据える。そこには、幼さを全体に残した少女が立っていた。年齢は見た目でどんなに繕つても高校生には見えない。どうやら若返つたと考えることもできる。

身体のラインはくびれが若干あり胸もあるが、いわゆる幼児体型。歳相応とも言えるが、小さな女の子の身体を見ていると考えると危

ないやつだと思ってしまう。

透き通るほどに白い肌、白い髪、そして、白い羽。見た目の印象は間違いない、天使のそれであった。そして何よりも真人が驚いたのは。

「あれ？結構可愛いんじゃないかな、俺」

鏡に映る少女の顔は、だれがどう見ても美少女に入る部類であった。丸く透き通ったスカイブルーの瞳、ちょこんと乗せたような鼻に、通った鼻腔。細すぎ丸すぎない輪郭に、出来物一つない肌、潤いをいっばいに帯びたピンク色の唇。どれをとっても彼女の存在を際立たせるものであった。

しかし、真人はまったく興奮をしなかったあたり、やはり自分の身体であるという変な実感を感じていた。それでもまだ、大事なことまではじつくりと見ようとは思わないところが、純粹な真人の人柄を表していた。

「こんなにかわいい女の子になったんだから……やっぱり女の子として可愛らしく生活するべきなのかなあ。男としてのプライドを捨ててまで……」

可愛らしくなったのには複雑な心境を生むきっかけになってしまったが、それでも悪い気はしなかった。

ただ、今まで暗がりの日々を続けていたばかりに、こんなゆつたりとした日常に入り浸るのも悪くはないかと思う自分を感じていた。

「ねえ、いつまで入ってるつもり？さすがにのぼせちゃうよ？」

と、脱衣場の外から声をかけてくる佐花。それに真人は「はい」と一言だけ答え、浴室を後にした。

EP 6 少女（後書き）

だいたい主人公のイメージがつかめて来た感じでしょうか？まだまだ謎がいっぱいですがゆっくりと進めて行きたいと思っています。

EP 7 街（前書き）

ちょっと読みづらい内容になりましたがご了承くださいませ。

EP 7 街

「どこに行くんですか？」

家を出ようと玄関で靴を履く佐花に真人は問う。

「ん？服屋さん」

「新しい服を買っんですか？」

「そ、あなたのね」

そう言われて自分の今着ている病院着に目をやる。確かにずっとこんな服を着ていては本当に病氣かなんかの患者みたいな気分になってしまう。

「わかりました。いつてらっしゃい」

「本当はあなたも連れて行きたいんだけどね。まず服が無いし、それに」

と、羽を指差す。

「そうですね。まあ、目立ちますから……仕方ないことです」

「あのさ……その……困ってることがあったらなんでも私に言ってね。ちよつとでも力になりたいからさ」

「…ありがとうございます」

「んじゃ……」

少し寂しそうな佐花の背中を真人は見送った。

時間は朝、まだ起きたばかりの真人は朝食を摂る前に佐花が出ていってしまったので、何かないかと勝手ながらに冷蔵庫をあさっていた。

だが、出てくるものは調味料ばかり。基本的に整理されていてすっきりした中身だったが、それゆえに何にも入っていないということ を明らかにさせられる。

そこで真人は昨日のことを思い出す。風呂から上がったあとに振る舞われた佐花の手料理の数々。二人で食べるにはあまりに多すぎる量のそれらは歓迎といい用意されたものだった。

半分くらいは食べることが出来たが残りにはまるで手を付けなかった。つまりまだ残りがあつたことを思い出したのだ。

佐花が行き掛かりに朝食のことについて何の指示もださなかったのは、それらがまだ余っていたからだということなのだろうが、真人はそこまで勝手にさせてもいいのだろうかと少しばかり呆れさせられていた。

しかし、冷蔵庫にはそれらの食事が入ってはいなかった。真人は昨

晩の記憶を必死にひねり出し、一つ思い出す。

——そう言えば机の上にラップをかけたままにしてたんじゃなかったっけ。

二人とも疲れていた所為か、ある程度食事を摂った後、残りのものはとりあえずラップをしたまま放置し、寝ることになっていたのだ。

そこで、布団が一つしかなかったため二人で一つの布団の中で寝ていたことを思い出し、顔を赤くした。

——なに思い出してんだ俺は。早く昨日の残りを見つけよ…

それは昨日のまま、机の上に置かれていた。まったく触ったあとがないため、おそらくは佐花自体も朝を食べていないようだ。

真人はそれを見て少し心配になると同時に、朝御飯を抜いてまでも早く服を買いに行ってくれた佐花に感謝していた。

すっかり冷めてしまった料理を、温めるものは温め、ささっと食べ終える。昨日の時点ではあまり気がつかなかったがそんなに量が食べられなくなっていることが、まだまだ余ってしまっている料理を見て真人は痛感した。

今、真人がこの家であることなどは食事ぐらいしか思いつかず、さっそくやるのがなくなってしまった。

仕方なく、テレビを点けた真人は一つのニュースに目を見張る。

《高校生連続殺害事件》

『また、新しく被害者が見つかりました。河川敷に銃で射殺された高校生の遺体が見つかったことで、全部で五人の遺体を確認されました。最近立て続けに起きている警察からの銃強奪事件との関連を追及した上で、遺体の身元の確認を急いでいます』

ふと思い、真人は部屋の壁に立て掛けられているカレンダーに目を通す。

そして自分の死ぬ前に確認した最後の日付から三年も過ぎていると、いうことを知った。

昨日新聞を見たときは、自分が死んだ次の日、もしくはその日に生き返ったつもりだったが、どうやら自分の知らない何年後かに蘇ったみたいである。

そついうわけだから、真人の死んだあの路地裏には血痕や、死体が一つも残されておらず、綺麗になっていたのだ。

——殺人……まさかね。

真人の中には一人の人物が思い浮かばれる。もっとも親しかった、あの男。親友だと思っていたあの男——

もう一度ニュースを見る。

『これまでの被害は300人にも上り、全て高校生の被害者が出ていることから、警察は殺人犯は高校生から大学生の未成年者との考えを示しています。三年前から続く犯行は依然と止む気配がなく、周辺住民も恐怖を隠せない模様です。次のニュースです。一年前か

ら――』

三年前。真人が死んだのも三年前であり、親友が変わってしまったのも三年前だ。

何もかもに心当たりあり、早くなる鼓動に気分が悪くなる。

300人。それは相当な数だ。1人で、しかもたった三年でこなすには無理な話だろう。そう心の中で結論づけ、何とか平静を保とうとした。

「零、お前じゃないよな……もし、そうだとしたら……俺の所為だよな……」

ビルに付けられている街頭ビジョンに、佐花は視線を向ける。

それは、いつも見ているニュース番組であり、興味があつたのか立ち止まって首をあげた。

『一年前から続く連続誘拐事件に新たな被害者が現れました。高校二年生の高橋ゆかりさんが下校途中で連れ去られたとのことで、これまでおよそ100人も女性のみの被害者が出たことから、先ほどの殺人事件と並び、現日本の二大事件と言われています』

そのニュースを見終えたあと、佐花は呆れたと言わんばかりの表情

で街頭ビジョンから目を逸らした。

「馬鹿みたい。情勢が悪くなったからって犯罪を犯していい理由に
なんかならないのに。二大事件？なにを担ぎ上げてるんだか。余計
犯罪者が調子に乗るじゃない」

ふと、周りを見渡す。普段と変わらない景色。街行く数人の人々が
ただ、忙しそうに歩いているだけ。

こんな街で犯罪が起きているなんて到底佐花は思えなかった。しか
し、実際にそれは起きているのだから、否定する要素が無いのも現
実である。

「私が子供のころは平和だったよね、まだ」

——変わったんだ、この街も、この国も。

誰が変えたのかはわからない。ただ、確実に変化が著しいのは明ら
かだ。これからもどんどん変わっていく。あの原因不明の症状が発
端で。不幸のどん底へと進んでいく。

「——まあ、もう関係ないか私には。出来ることなんてもうないし。
さあてと、真琴ちゃんも待ってるから早く帰らなくちゃ」

踵を返し、佐花は本来の目的である洋服店へと足を進める。

街を包む異常に気付かないまま、彼女は歩いていった。

EP 8 家族

「どうかな？」

「……」

不満そうな顔をする真人に恐る恐る問い掛ける佐花。もともと家に帰ったときにはすでに元気な顔ではなかったが…さらに悪化したような感じである。

「何か言つてよ、怖いなあ」

「……似合わないと思う」

鏡の前で呟く真人。スカートのフリル部分を何度も何度も引っ張っている。

「そんなことないよ！私から見たら本当に天使みたいな可愛らしさで包まれてるよ！」

「まあ、多分天使なんだけどね…」

「ん？なに言った？」

「別に」

そう言いながら一回転をする。全体を見渡すとさらに不機嫌な表情になる。

「スカート…丈短くない？」

「えっ？最近はこのぐらいが普通なんじゃないかしら？」

真人の中では膝下が基本的なものと思っている為、膝上であると若干違和感を感じているようである。

佐花の購入してきた洋服は全て最近の流行のものである。対象は中学生向けであるため、その点でも差異を感じているようだ。

男であっただけに女性——というよりも女の子の服を着るのに抵抗を感じずにはいられないのである。

そもそも、帰ってくるなり真つ裸にされ、無理矢理着せられたことによりむくれているのではあるが。そこに佐花は気付いてはいないようだ。

「ごめんね…真琴ちゃんにはちょっと気に入らなかったかな？…ああ、私センスないのかなあ」

「あ、いや、その…」

本気で悔しがっている佐花を見て少し動揺する真人。やはり、善意での行為にケチをつけることは彼には無理なのだろう。

「だ、大丈夫ですよ。私、気に入りましたから」

「…本当に？無理はしなくてもいいのよ？」

「いえ、本当にありがとうございました」

「そ、よかった。じゃ、今日からは買ってきたヤツを着てね。でも、まだそんなに数がないから近いうちにその羽をなんとかして買いに行きましょう」

「はい！そうしましょう！」

「って、やっぱり気に入ってないじゃん！」

「あ、いや、違って…その…」

またまた凹んだように蹲る佐花。本当はそんなに気にはしておらず、ただの冗談なのだが、真人には本気で落ち込んでるように見えていた。

真人は変な気づかいを払い、佐花にあれこれ言うが、佐花はその様子をおもしろがり、しばらくは落ち込んだふりを続けていた。

「なんかね、家族が出来たみたい」

佐花がついでに買ってきた昼食のカップ麺を食べながらそう言いだす。

「え？」

「え？も何もそのままの意味よ。しばらく独り暮らしだったからね」

「あ…」

そういえば、と今更になつて思う。佐花は独り暮らしなのだ。それに割に合わない家だったので他にも誰か同居者がいるのかと真人は思っていたが、まだ誰も見ていないことからそうではないとわかる。

「やっぱりね、この歳で独り暮らしは結構キツいのよ。最近じゃ普通だけど寂しいって言うのはどうしようもないからね」

「…失礼かも知れませんが、佐花さんって何歳ですか？」

「ん？21だけど」

「えっ！」

あまりにも大人びていたため真人はそれ以上に思っていたのか、予想外に驚いてしまっている。

「…本当に失礼ね」

「すみません」

「いいわよ別に。そっちこそ何歳よ」

「あ、えつと…一応18です」

「一応？」

真人の記憶に残っているのは18年間のものだ。しかし、今は3年後のため、実際は21歳なのだろうかと悩んでしまったため曖昧な返答になってしまう。

——あれ？じゃあ佐花さんと産まれた年は一緒なんじゃ…

「あなた、一応とか言ってもそれはごまかせないわ。その見た目で成人誌を読んだりしたら間違いなく私なら注意してるわよ」

「いや、でも本当ですよ？」

「嫌だ！認めないわ、絶対！」

あまりに若々しく見える真人に若干の嫉妬を感じているようだ。自分が老けて見られただけに、それが羨ましく思えるのだろう。

「…じゃあ何歳に見えるんですか？」

「よくて14歳」

「ひどくないですか！」

「悪くて10歳」

「もう聞きたくないです」

と、耳をふさぐ真人。

「ま、あなたは歳をとるのかなんてのは私にはわからないからなんとも言えないんだけどね」

「あ、そうでした…」

「あつ、デリケートなこと言っちゃったかも、ごめんなさい」

「いや、大丈夫です」

実際のところ真人自体もよくわかっていないことが多くあるため、気にするほどではない。

「ま、でもとにかくさ、私たちもう家族だよ。だからね、その堅苦しいしゃべり方止めよっか」

「え？でも…年上だから…」

「あなた、家族にまで敬語使うようなタイプ？」

言い終わってから家族とかいるのだろうか、と考えてしまったが取り返しはつかないためそのまままで会話を続ける佐花。

「違いますけど…」

「じゃ、タメ口でいいじゃない！私はむしろ友達感覚でしゃべりたいのよ！ね、だから？」

「あ、えつと…」

佐花の押しの強さにどきまぎしてしまふ真人であったが、仕方ないと言わんばかりにしゃべりだす。

「わかったよ、佐花さん」

「違うわ、それも直してよ。さん付けなんて鳥肌が立つわ」

「じゃあ…佐花？」

「うーん…名前で呼んで欲しかったんだけど…最初ぐらいはそれでもいいわ」

その言葉を聞き、ほっと胸を撫で下ろす真人であった。

「…佐花」

「ん？なに？」

さっそく呼び捨てをしてもらえたのがうれしかったのか、ニコニコとした笑顔で答える佐花。

「その…仕事ってなにをしてるの？もしかして大学生？」

「…」

さっきまでの笑顔が急に暗くなる。それを見た真人は聞いてはいけないことだったと胸の中で後悔した。たまらず顔を下に向ける。

うつむく真人に佐花はいつもの笑顔で返す。

「いや、別に気にするようなことは言っていないわよ？ただ、ちょっといろいろと言にくいことがあるって話だから…ほら、あなたの

ことだってよく知らないしね？お互いに知らないことはあっても良いと思うのよ。だから…」

「うん、そうだね」

もしかしたら…売春など、表向きには言えないことなのかもしれない、と真人は考えた。それぐらいしないとこんな家に住むなんてことは到底女性には出来ないと知っていたからだ。

自分は少なくとも居候の身、主人の嫌がるようなことに口出しするのは言語道断であろう。

「うーん…なんか暗くなっちゃったね。ごめんなさいね」

「ううん、私が悪かったよ」

「とにかくしばらくはお互いを詮索するのはやめておこうか」

「うん」

不思議だ、とお互いと思った。家族みたいだ、と言いながらも隠し事だらけだとお互いにわかっている。それでも家族と言えるのか。

しかし、二人にはお互いに言いたくないことがあるのも事実。距離をとっておかなければならないこともあるのだ。

「ラーメン、のびちゃったわね」

「うん」

「まだ食べる？」

「うん」

本当は胃袋が小さくなったため、半分でも十分な真人だったが、今は少しでも時間を持たせたかった。なにか食べていないとこの重い空気の中、しゃべらないといけないからだ。

佐花もそれをわかっているため、食べることに専念し始めた。

二人は伸びた麺を食べながら思う。本当の家族になるのは、他人同士には難しいものだ。いつまでも少し距離をおいた関係のままであるのではないかと。

ましてや二人は天使と人間。存在すら違うもの達なのだから。

EP 8 家族（後書き）

暗いですね内容が。

だいたいこんな小説なので全体を通してギャグやコメディは少ない
と思ってください。

EP 9 黒のスーツの

「…そこであなたたちは何をしようとしているんですか？」

全身を黒のスーツに纏った、怪しげな雰囲気の方は言う。

「見てわからない？ 援交よ、援交。ね、おじさん？」

まだ幼さを顔に残した少女は、付き添い歩いている中年男性に言う。
中年男性はというと、あまりにもストレートに言われてしまったため正直困り顔であった。

だが、開きなあったのかスーツの男に向けて強気な発言をする。

「ああ、そうだ。よく言う援交だ。だが、なんだ？ 貴様に関係あるのか？ ワシは金を払ったんだ、彼女も文句はないはずだ」

「そうかもしれませんね」

依然として落ち着いた態度の男。中年男性はその真意が見いだせず、気味悪く思った。

「ですが、待ってください。彼女は金を払えば付き合ってくれるわけなんですよね。それってお金欲しい理由があるとは思いませんか？」

何を当たり前な、と不機嫌な顔をする少女。

「そうよ、お金が欲しいからしてるのよ。悪い？どうせ私たち女の子の稼ぎ口なんてこんぐらいしかないんだし」

「私はそれを最善とは思わないのです。いささか余計なお世話かもしれません」

「わかってるなら別にいいじゃない。私はね、お金払ってもらった分はこのおじさんにご奉仕しなきゃいけないの。だからもういいでしょ？さつさとどっか行つてよ」

中年男性の手を引きスーツの男から逃げようとする少女。しかし、男は逃さない。

「あなた…初めてなんじゃないですか？」

その言葉を聞いて身体をびくつかせる少女。

「強気には見えますが、弱さを隠しているようにも私には見えますね。まるで慣れていないような…」

「…だからなによ。私だって必死なのよ。あんたにとにかく言われる筋合いなんてないわ。私には、こうするしかないんだから…」

「度胸は認めます。しかしですね、もう一度言いますがそれは最善の方法ではありません」

「じゃあ、どうしろって言うのよ！今から就職でもするために勉強しろっての？」

少女は怒気を利かせる。最後の手段として思い切ったのにも関わらず、歯止めを利かそうとしてくるからだ。これ以上心を揺るがせて

欲しくないと。

しかし、男はそんな少女に一步も退かず、むしろ近づく。

蚊帳の外だった中年男性に男は言う。

「あなたは何円で援交を申し出ましたか？」

「え？」

いきなり何を…と言いつ返そうとしたが、質問の意味にそれ以上深い意味はなさそうなのでそのまま返事をする。

「五万だ…」

「ずいぶんと持ってらっしゃるんですね。管理職が何かでしょうか」

「…まさかワシを脅そうってわけじゃないだろうな。それだったら無駄だぞ！そんなことで一々気にして堪るか！」

「脅そうなんてことはございません。ただ…」

スーツの男はスーツと全く同じ真つ黒のスーツケースから封筒を取り出す。

「この少女を私が買い取りたいと思ひましてね」

「なに？」

男は封筒を中年男性に渡す。中を覗けば、十万円が入っていた。

「二倍です」

「だからなんだ」

「これであなたには手を退いてもらいたい」

「なんだと!」

中年男性は目を丸くする。しかし、この男性も実は今まで援交などをしたことがなく、女性との付き合いなどもない。せっかく巡ってきたチャンスをそうそう手放そうとはしたくないのだ。

「…ふん、十万だと?笑わせるな。この子にはそれ以上の価値がある。こんだけでワシは…」

「よくわかってらっしゃる。いやはや少しだけ見下していました。申し訳ありません。あなたはなかなかモノの価値というものがわかってるようだ」

その会話を聞いていた少女は自分をモノ扱いされたことに心の底で腹を立てる。

「女性には、お金なんかでは量れない価値があります。そうですね?…しかし、あなたはどっと思っっているのでしょうか」

そういつてスーツの男はスーツケースを全開にする。

「なに!??」

中年男性の見たものは、スーッケース一杯の札束であつた。一億はくだらないであろう。

「さて、どうなんですかね？あなたの中では一億と、女の子一人ではどちらが価値のあるものなんでしょうか」

中年男性は生唾を飲む。人生の中で初めてみる金額だからだ。これを五万を払った女と交換するというだけで…

「いいだろう…」

「では、交渉成立ですね」

そう一言だけ言ってスーッケースを中年男性に渡すと、少女の手を引き颯爽と歩いていく。

「ちょっと！なに勝手に話つけてんのよ！私の意志は？」

もちろんそんな勝手に進められた話に納得が行くわけがなく、少女はスーッの男の手を振り払う。

だが、男はそんなことには動じず、ただ、自分の意見を淡々と述べる。

「あんな汚らしい男に犯されても構わなかった…とでも言うのかい？」

あまりにもストレートな表現だったため、少女の威勢も弱まってしまふ。

「そ、そりやそうだけどさ…」

ちら、と中年男性の方を見る。先ほどの金を両手に握りしめ、喜びをありのままに感じているようだ。汚らしい、それは心にも言えたことだと、少女は思った。

今度はスーツの男を見る。体型は太過ぎず、細すぎず、身長も180はあるだろう。スーツは清潔さを存分に醸し出しており、先ほどの中年男性と比べれば差は誰が見ても歴然だった。

ただ、目はサングラスを付けているためまったく表情はうかがえない。だが、少女は思う、きつと整った顔をしているのだろうと。

「…買い取る、とか言ってたわよね。一体どういつつもり？まさか、あんたが私を犯そうって言うのかしら」

だとしたら先程の男となんら変わらない。むしろ、見栄えのよさに自信があるのだろうか、それならあの汚らしい男よりもましだろう、といった具合に女を引き付ける、より最低なヤツだ。と、少女はスーツの男を軽蔑の眼差しで見る。

「…あなたが望むのであれば、譲歩してあげますが…残念ながら私の目的はそんなものではありません。私はただ…」

遠くを見つめるような視線をしてつぶやく。

「この街には、可哀想な女性が沢山いるようでしたから…少し幸せになっていただきたかったです」

「…結局これから私をどうするのよ。」

「…別にご自宅に帰っていただいても構いません。しかし、私は出来ればついてきていただきたいのです。女性が安心して暮らせる街、女性だけの街を私は創ろうとしています。よかつたらあなたにも来ていただければ…」

まあ、あくまで私はあなたの意志を尊重しますが。男は付け足してそう言ったが、その言葉には何の意味もなかった。少女は一つの答えをもう決めたのだ。

「…そんなの簡単じゃないわよ？それでも保証してくれるなら行ってあげなくもないけど」

男はその言葉を聞いて軽く微笑むと、なるべく譲歩いたします、と言った。

「…あんた一体何者なの？」

「私は…」

男はなんのためらいもなく言う。

「私はただの誘拐犯ですよ」

EP 9 黒のスーツの（後書き）

主人公とはまだ関わりのないところでの話です。
しかし、今後なんらか関わっていくはずですので
ちなみに次は主人公周辺でのお話になる予定です。

次話もお楽しみにしていってください。

EP10 お出かけ日和（前書き）

少しほのぼのといきましょっか

EP10 お出かけ日和

幾日かが経った。佐花とはあれから何も変わらず、姉妹のような生活を続けている真人であった。少し気まづくなるかと思っていたお互いだったが、そこには触れないことを暗黙の了解として平凡な日常を過ごしている。

真人は未だにトイレやお風呂に行くときは躊躇してしまうが、身体自体を動かすのにはだいぶ慣れたようだ。別段病気だったわけではないので、ただ身体の動かし方を身につけたということだろう。

そして朝食を食べ終わった今、軽く身体を動かしていると思っていた以上に身体が柔らかいことを発見し、前屈をして感動を味わっていた。元の身体では床に手をつくことすらままならなかったが、今では手のひらをピタリと付けることが出来るほど。

そんな様子を見ていた佐花は、まるで愛する妹を見ているかのように微笑ましそうな目をしていた。

「どうしたの？さっきから何度も手を床について」

「うっん、なんでもないよ」

あっさりとした答えに少し不満だった佐花だが満面の笑みで返されたため、自分まで笑顔が零れていた。

なんともない風景ではあったが、言いようのない温かさがそこには存在していた。二人ともに、前までの日々が嘘かのように思えてきたのだ。

いつそ、互いの暗い過去は捨てよう。そう思いはじめていた二人だった。

「真琴元気になったわよね」

「うん、おかげさまで」

「私の買ってきた服にも慣れたかしら？」

そう言われて視線を落とす真人。今身につけているのは背中が広めに開いているピンクのキャミソールだ。これなら羽も服の外に出るため窮屈さを感じさせない。下は大腿を露出したショートジーンズパンツ。それに付けた大きなベルト。全体的に見れば若干パンク気味の格好だ。背中が羽がそれを引き立たせている。

いささか露出の多い格好ではあるが、スカートよりはましという少しずれた観点を持っているため、真人はすんなり身をそれに包んだのだ。

「…うん、まあまあかな」

「よかったあ、また嫌だとか言われたら私どうしようって思ってたのよ」

「うっ、なんかごめんなさい」

「いいわよ全然！むしろあなたの気にいった格好の方が絶対にあなたにとっていいんだから」

その言葉を聞いて安心したのか表情に綻びを見せる真人。無理強いをさせないのは当たり前といえは当たり前なのだが、真人にとって文句を言えない立場だったのでそれが嬉しかったようだ。

「だからね、今日こそはあなたのために服を買いに行こうと思うの」

「え？この前に行ってくれたよ？」

「違うわよ、あなたも一緒に行くの！」

思わず身体をびくつかせる。この間に言っていたことなのでいきなりのことではないのだが、いざとなると少し不安を隠せない。

なぜなら真人には人とは違うものがあり、それを隠すすべがないからだ。

「で、でも……」

困ったように首を後ろに回す。それを見ていた佐花は諭すように真人に言う。

「大丈夫よ、安心しなさい。その格好ならアクセサリーが何かだと思ってくれるわ。もし心配ならその羽が目立たなくなるくらい派手な格好にしてあげなくもないけど？」

それだけは勘弁して欲しい、と両手を顔の前でぶんぶん振る真人。

しかし、心配な点は羽だけではない。髪の色もまた珍しいものだ。見た目日本人には見えないゆえに日本語をしゃべっていると一般人から見ればかなりのギャップを感じざるをえないものだろう。

他人の視線というものに慣れていない真人は、それらの点で注目を浴びるのが嫌であった。自意識過剰なところもあるが、ただ臆病なだけなのだろう。

「髪……」

「そんなのいまさらじゃない。私はまったく気にしないわ」

「それは佐花だからだよ！」

「結構文句言うタイプなのね。弱気な方かと思ってたけどわりと頑固じゃない」

「それ、バカにしてる？」

「バカになんかしてないわ、むしろ感心してるの。前まで元気なかつたから安心したわ」

「そう……」

話の骨を折られてしまったが、そう言われると嬉しく思えて仕方がない。心配してもらえると素直に喜んでしまう性格であるようだ。
「とにかく、そんなんじゃないつまでたつても家から一歩も出ることもなんか出来ないわよ！別に身体の調子が悪いわけじゃないし、誰かがあなたを監禁してるわけでもないんだから外に出ないなんて損なだけよ？」

これだけ言われると真人もそう思えてきたのか、自然と頭を縦に振っていた。

それを見て納得したのか、佐花は隣の部屋から数々のアクセサリーを持ってき、それを真人に飾りつけた。

「ほら、これだけ派手ならファッションの一種だって思ってくれるわよ!」

「うう…これならスカートの方がましだった…」

「…スカートが苦手ってあなた少し変わってるわよね」

「…黙っててよ」

結局タンクトップにジーンズの佐花とは対照的に派手なパンクファッションで外に出ることになってしまった真人であった。佐花の用意していた靴も、それに合わせていたかのような踵の高いサンダルであった。

アクセサリーもどこかパンク気味で、どう考えても最初から羽の対策をしているとは思えなかった。

「うん、これなら羽なんか気にならないよ」

「ふふん、そうでしょ」

「他のところが恥ずかし過ぎる…」

「あれっ!?!」

きよんとする佐花を尻目に真人はゆっくりと玄関の戸を開いた。

目に飛び込んでくる風景は——今まで知っていたものであったが、変わっているものの方が多かった。

どうやら都心部から少し離れた場所のようで、真人が住んでいた場所とも結構近いように思えた。

「……どうしたの？立ち止まっちゃって」

「あ、いや、久しぶりの外だったから。ちょっと見渡してた」

とつさに答える。感慨に耽っていたなんて言ったらまた話がややこしくなりそうだからあえて言わなかった。あくまで自分はよくわからない少女、それで通しておこうと思ったのだ。

「とにかくさ、早く行こ？」

「うん」

慣れないサンダルで真人は歩き始めた。歩けば歩いていくほど見たことのある景色、懐かしい風景、街並み。真人は楽しみながら大股で歩いていた。

「そんなに外がうれしい？やっぱ出てよかったわね」

「うんっ！」

あまりに子供っぽい返答をしてしまったため、後になって恥ずかしくなってきた真人。しかし、顔が赤くなっているのは興奮しているからなんだと、勝手に解釈をする佐花。

佐花は調子に乗り、提案を出す。

「ねえ、真琴？」

「なに？」

「手、繋がらない？」

「それはさすがに…私一応18だよ？そんな子供っぽいこと出来ないよ」

さっきの反省を生かし、大人振ろうとする。 実際は服装の時点で大人と言えたものではないのだが。

「むっ、生意気な！それに子供じゃなくたって仲がいい友達の手を繋ぐでしょ？」

それを真に受けた佐花は子供っぽく言い返した。

「男は繋がらないよ！」

「なんで今男が関係すんのよ」

「あ、いや、言葉のあやだよ！」

思わず口が滑ってしまった。今の発言だけで何も気付くとは思えないが、焦りを隠せない真人。

「ふーん、なるほど。それって女の子なら手を繋ぐって意味でいいわよね！」

「えっ！」

と、言い返そうと思うや否や、真人の手は油断した瞬時に佐花に奪われてしまった。

「は、離して！」

必死に抵抗を見せ、片方の手で引き剥がそうとするが、真人よりも二周りは身長の違い佐花にとってはまったく無意味である。

「ははははは、観念しなさい！ほらほら、行くわよ。さっさと歩かなきゃ日が暮れちゃうわ」

「うう…離せ…」

ほとんど引きずられるかのように真人は手を引かれていった。

EP11 Make up

歩いて数十分の場所にそれはあった。大型衣料品店。ここらでは一番の大きさと品物の豊富さを誇っている。でかでかと掲げられた看板はそれを主張するかのように高い位置にたたずんでいる。

駐車場も半端ではないスペースを所持しており、何100台でも車が止まれそうなほどだ。

その駐車場付近に人影が二つ、真人と佐花だ。

「着いたよ！ここ、すっごいんだから」

「そ、そう…」

「あれ？やけに疲れてない？」

「だ、だって佐花が速いから」

繋いでいた手は今も尚握られており、真人は片方の手を膝に付いて肩で呼吸をしていた。

「大げさね、私普通に歩いてたわよ？」

「歩幅が違っんだよ！」

「ゆっくり歩きたかったのならばよかったじゃない」

「うっ…」

反論できなくなり、言葉をつまらせる。

「それにゆっくり歩いていたらそれだけ見られる時間も長くなるのよ？」

「そ、それだけは嫌だ」

ここに来るまでの途中、真人の物珍しい格好にかなりの人々の視線が飛びかっていた。多くの人はコスプレかなにかと思っただけで見ていたが、厭らしい男はさらされている肢体に目をやっていた。どちらにしても真人にとっては気分がいいものではなかったため、早く歩いていたのはそれでありがたかったのかもしれない。

「ま、真琴は可愛いからみんな見ちゃうのは仕方ないとも思えるけどね」

「…変な冗談言わないでよ。可愛いくないし、仕方なくもないから視線を集めるのだけは嫌だ」

「だったら文句を言われる筋合いはなかったんじゃない？」

「…ごめんなさい」

「よろしい」と言って佐花は満足気に歩きだす。引かれた腕に真人もついて行く。

店内に入ると真人は目を見張った。想像していたよりもずっと広く、いろんな服が置いてあったからだ。天井も高く見通しがよいため、店内の雰囲気もかなりよく窮屈に感じなくなっている。

「ふあ……」

「ね、すごいでしょ。最近じゃここほど大きい場所なんてそうそうないわよ?」

「う…うん」

店の広さにも驚いていた真人だが、それよりも客の多さに唖然としていた。外で見た人々は点々としたものだったが、ここには確かに群集とも呼べるほどの人がいる。

——まだまだ人っていっぱいいるんだなあ。

異状の所為で人などどんどん消えていつているものだと思っていたが、群をなすほどに人はまだまだいるのを真人は実感していた。今まで感じていた危機感など嘘のように思えた。

「なにぼーつとしてるのよ? ささ、早く服を選んじやいましょ!」

「あ、うん」

これだけ人がいれば自分なんてちっぽけなものだと安心していた。思っていたよりも注目を集めるようなことにはならない、そう思えた真人だった。

結局はほとんど佐花が選んでいくことになった。真人には女の子が着る服なんてものがわかるはずもなかったので、佐花の持ってきた服を試着し、自分に似合うか確かめていった。

真人自身が服を選ぶこともあったが、それを佐花に見せると「似合う！可愛いよ！」の一言ばかりでなんの参考にもならない。というよりも佐花にとっては真人が何を着ても可愛く見えてしまうのである。

かれこれ着替えて32着目。未だに買うかどうか分からないまま試着の数だけが増えていく。それもこれも真人が決めかねているからだ。

「ねえ、まだ決まらないの？」

見かねた佐花が試着室の外から真人を呼ぶ。

「ううん。なにが似合うかわからないから…」

はつきりしない返事を返す真人。鏡を見ながら何度も自分の姿を確認する。しかし、首をかしげるだけだ。今は黒色のゴシックなワンピースを着ており真っ白な羽と対照的な色になっている。

「はあ…じゃあ質問を変えるわ。今まで着た服の中で嫌なものはあった？」

そう言われしばし思考を廻らす。スカートを履くのは未だに慣れてはいないが嫌というほどでもなく、可愛い感じのひらひらの付いたような服でも着れないことはない。そう思い、「うん、たぶん」と

返事する。

「なら、全部買っわ」

「え？」

さすがに驚いたのか試着室から思わず顔を出す真人。佐花はなんともないような涼しい顔をして腰に手をあてている。「それってどういうこと？」

「そのままの意味だけど？カードがあるから大丈夫だし」

「いや、カードがあつたとしても金額の問題が…」

「大丈夫よ。だって決められないのでしょ？だったら好きなだけ買っておけばいいじゃない」

あまりの太っ腹な発言に真人は開いた口が塞がらない。今まで試着した分の服は32着だったが、どれも有名なブランドで安いはずはなかった。そんなものをこれだけ買ってなんともないわけがない。真人は佐花が心配になっていた。

「…なんでそこまでしてくれるの？私、居候してるんだよ？」

「それは私の勝手よ。私は真琴が好きだし、それにずっといたいし為になつてあげたいの。それじゃだめかしら？」

「…意味わかんない」

「別にわからなくてもいいわよ。ほら、さっさとレジまで行くわよ」

「？」

「あ、でも今着てる服は……」

「それも買うのよ！」

そう言つて無理矢理試着室から真人を出すと、今まで着た全ての服を店員に託し、レジまで歩く。

「合計500万3250円です」

淡々と値段が告げられる。真人は思っていたよりも服というものがずつと高いことにびっくりしていた。さすがにこれは不味いだらうと佐花の顔を覗くが、依然として涼しい表情のままだ。

「意外と安かったわね」

佐花が口にした言葉にさらに驚かされる。

佐花は財布からカードを取出し店員に渡す。店員はそのカードを見て目を丸くするとすぐさま読み込み作業に移る。

なにを驚いているのだろうと真人はそのカードに目を凝らすとカードが黒いことに気が付く。上限なしのブラックカードだ。

真人でもどれだけ凄いものかはわかっていたため、なぜ佐花がこんなものを持っているのか謎で仕方がなかった。しかし、お互いに深いことは聞かないことにしてあるため詮索しようとは思わなかった。ただ、それを差し出した時の佐花の顔はやけに暗かった。

「会員証はお持ちでしょうか。お持ちで無ければお作りいたしますが」

店員がそう言うのと佐花は顎に手をあてなにやら考えだす。

「そっ、いや、前に来たときは断つてたのよね…」

佐花にはおおざっぱなところがある。こういうカードをいっぱい持つことは苦手なのだ。断るのは面倒だが、持つこと自体のほうが面倒だと考える。だから、大抵の場合は断るようにしているのだ。

しかし、今回の場合は違う。なぜなら金額が金額だからだ。500万もの買い物をすれば、それなりのポイントも入る。これを逃すのは少しもつたいない。

考えだした答えは…

「じゃあ、この子の名義で作っていただけますか？」

真人に任せるということだった。真人は「えっ」と小さく声を漏らしたが佐花はそんなことも気にせず話を続ける。

「それではここにお名前とご住所、連絡先を…保護者の方になられますならお客様が書いていただいてもかまいません」

「そっ。じゃあ真琴、私が書いておくわね。東雲真琴っ」と

「えっ、ちよつと！」

制止する間などなく、さらさらと書いてゆく。それをただ呆然と見守るしかない。

そこで真人は佐花の書いた自分の名前をみて、佐花が漢字を間違っ
て覚えていることに気が付く。口でしか名前を伝えていないため”
真琴”のほぅが女の名前としては自然だと佐花は考えたのだらう。

真人は間違いを指示しようとしたが、生まれ変わったのだからいつ
そ名前ぐらい変わってしまったても問題はないのではないかと躊躇
ってしまった。

「はい、書けました」

「それではお作りいたしますね。少々お待ちください」

そう言つてなにやら機械を操作するとすぐにカードが出来上がった。
全体が赤色で、シリアルナンバーも入っている。

「今回購入された分のポイントは差し上げていますので、またのご
来店の時にご利用ください。服はこちらでご自宅まで送らせてもら
いますので」

そう言つたあと、真人の試着している服のタグを外す。

「こちらはお召しのまま帰宅なされて結構です。それでは、またの
ご来店をお待ちしております」

深い礼を受けると、佐花は「じゃ、帰りましょ」と、真人の手を引
いて店を後にしていった。それはやけにスムーズで、さつさこの
場から立ち去ろうという気持ちにじみ出ていたようだった。

真人は帰り道ですつと佐花を見ていたが、どこかおかしいような気
がした。いつもとは違う、そんな感じを受けた。佐花に黒いものが

まわりついている様で嫌になった。

気が付けば佐花から目をそらし、ただ前を見て歩いている真人であった。

家に着くまでの間、二人の手は離れたままであった。

「東雲マコト？」

時を同じくしてそこには一人の男がいた。オールバックの肉付きのいい男。カーキ色のコートを羽織り、店内の柱に身体を預け腕組みをしていた。異様な威圧を放ち、そこだけ空間を切り取ったかのような温度差があった。

明らかに服を買いに来たような雰囲気ではなく、なにか別のようがあるらしかった。真人の名前を佐花が口にしたのを耳にいれると目の色を変え、その名前を反芻しだした。

レジカウンター前の佐花を見るが、人の波があり、なかなか近付けない。男はある程度人が捌けるのを待っていた。通れるようになるとすぐさまレジに近づくが、先程の客がもういなくなっていたことに気が付き肩をがくりと落とす。

「あの…どうかしましたか？」

ただ事ではない雰囲気の男に店員は心配をして声をかける。

「いや、はは、大丈夫です…」

そうは言ったものの考えを変え、店員に質問をする。

「…東雲マコト、という人物をご存知ですか？」

「東雲…ああ、先程レジにいられたお客様ですか。ええ、顔は覚えてますよ。かわいいお嬢さんでした」

その返答に納得がいかなかったのか眉間にしわを寄せる男。だが、情報が聞けてよかったと続けて質問をする。

「住所…とかわかりますか？」

「お客様の個人情報をこちらから教えるわけには…」

そうだ忘れていた、と言わんばかりに手を大げさにぽんと叩く。その後コートの中に手を入れ、内ポケットから手帳を取り出した。それを店員に見せる。

「…警察の方ですか」

「はい…ご協力いただけますよね」

店員は先程書かれた紙を男に見せる。男はそこに書いてあった情報をメモすると「ご協力ありがとうございます」と短く礼をし、店を去った。

「東雲真琴…うーん、人違いか？まあいい、どの道手がかりなんてないようなもんだ、行くだけ後で行ってみるか。ふふふふふ…」

男はずっと不気味に笑っていた。

EP 11 Make up (後書き)

内容を詰め込み過ぎてしっちゃかめっちゃかになってしまいました。
どうすればうまく書けるんでしょうかね？よければアドバイスなど
もお待ちしております。

EP12 すれ違う心

「風が気持ちいいなあ……」

やはり一度外に出たのがよかったのか、外出をする機会が格段に増えた真人であった。羽などはうまくカモフラージュし、外の新鮮な空気を堪能していた。

しかし、実は今回は勝手が違う。なぜなら真人一人だからだ。いつもなら佐花に付き添ってもらい外へと出歩くようにしていたのだが

「佐花のバカ……」

「ねえ、次はこの服を着てよ」

「えっ？またそんな歩きづらそうな服を着るの？スカートの裾絶対に踏んじやうよ」

いつもと変わりなく、佐花は真人の着替えを楽しんでいた。少しは嫌な顔をする真人だったが、突き返すほどには嫌がってはいなかった。

た。

「大丈夫よ、いざとなったら私が支えてあげるから！なんならお姫様抱っこでもいいわよ」

「お、お姫様抱っこ！？」

確かに今佐花の手に握られている服は、さながらどこかの国のお姫様が着るふんわりとレースがあしらわれたような真っ白なワンピースだった。お姫様抱っこも似合わないだろう。

しかし、真人も元は男だ。そんなこっ恥ずかしいことを平気で許すはずが無い。

「いいよ、そんなのは！それよりももっと動きやすいのにしようよ」

「…仕方がないわね。じゃあ真琴が選びなさいよ、今日外に出かけるための服をね」

佐花は一応真人の意見を優先させることにした。可愛い服を着てほしいのは本心だが、嫌がらせてまで着させようとは思わない。

「うん、そうさせてもらうよ」

と床一杯に広げられた服を見ながら真人は言った。

先日注文した服が届いたため、部屋の中は所狭しと服で覆い尽されているのであった。一度試着した服たちだったが、佐花が真人の着ている姿を見たのはほんの数着だけ。ほとんどの服は真人自身しか確認していないのだ。なので、佐花がさまざまな服を着てみたい

という気持ちもわからないではない。

真人は一つ服を手を取った。それはうすいピンク色のワンピース。全体的に落ち着いた装飾のものだ。

「あれ？それ真人の選んだやつじゃない？」

実はそうである。ワンピースというのはいささか少女的ではあるが、あまりにも男っぽいものばかりを選んでいると何か怪しまれるかもしれないとあえて選んだものだ。基準としては、自分に彼女がいたとしたらどんな服を着ているだろうという安直なものらしい。つまり単純に真人の好みでもある。本当は自分が着るとなれば気持ちは別なのだが、それは考えないようにしていた。

「どうせなら私の選んだのにしてよ！」

「だ、だめかなあ？」

「そりや…真人は何を着ても似合うから私としては別に構わないけど…どうせ着てもらうなら自分で選んだ服を着てほしいもん」

「そうなの？」

「そりやそうよ！」

真人は持ち上げた服をまた床におろし、思考に更けることにした。そこまで言うなら佐花の意見もちゃんと考えようと思ったのだ。そういう優しさは真人のいいところではあるが優柔不断と言い換えれば微妙なものである。

いい加減下着姿でたたずむのも限界が来たので、適当に佐花の選んだであろう服をすぐに手に取る。

「え？それ着るの？」

「え、でも佐花の選んだ服でしょ？」

「そうだけど…なんか違うなあ。散歩向きじゃないわ」

「もう…」

先ほどの床に戻し、違うのをまた手に取った。

「これは？」

「あ、うーん…もっと可愛いのあるわよね？キュートな真琴ちゃんが見たいなあ」

「…」

物も言わずまた違うものに取り変える。今度は真人が思う中でかわいと感じるものだ。

「これならどう？」

「…うん、よさそうな感じね。じゃ、さっそくお着替えしちゃうしよっか！」

「ふう…」

ほっと一息ついた真人。やっと服が着られると安心感に包まれていた。下着姿でいるのに慣れてしまうのが嫌であったというのもちろんあるが、そんなことは今は気にせず、ただ服を着ることに専念する。

ささっと着替え終え、佐花の方に向き直る。よくよく考えれば着替えている姿を見られることも十分恥ずかしいことではあるのだが、今は達成感で忘れられていた。

「うっーん…」

顎に手を当て、いかにも審査をしているかのように真人を見つめる。全身を隈無く見終えるとより一層険しい表情に変わる。

「…うんかわいい。だけど…何か惜しいわ。もう少し、あとちょっと何かが足りないような…可愛いけどインパクトに欠けていて…」

本格的にオーディションの審査をするような乗りを演じる佐花。もちろん佐花としてはただの遊びだ。真人と少しオーディションごっこをするような、ファクションショーの審査をするような、そんなただの乗りであった。

佐花はそれを楽しんでいた。真人の着替える姿を見て微笑ましく思っていたのだ。しかし、真人は違った。散々振り回されるように着替えさせられてストレスが蓄まってしまったのだ。佐花はそんな真人の表情に気が付かず続けて評価を真人に伝える。

「…で、総合的に見れば75ポイントね。十分なポイントだけど、あなたならもう少し上を目指せるでしょう！…ってな感じで次の服に行ってみましょうか！」

「…次で最後にしてよ」

真人は今度こそと思いながら次の服を手にとった。ピンクのフレアスカートと黒ドットが入った青色のキャミソールだ。先ほどのものたちよりは元気な印象を与えるものである。これならば合格と言わせられるのではと淡い期待を抱きながら着替え始める。

恥じらいなどはもはやなく、作業となりつつあった着替えを済ませ、佐花に全身を見せる。

「ほうほう…本当になんでも似合うわね。さすが真琴！」

その言葉聞いて安堵する。これで終わる、そう思った。

「でも真琴のイメージとはちょっと違うのよね。真琴はやっぱおとなしめの服のほうが似合うわよ。だからこっちのワンピースとか…」

「…ふざけてるの」

「え？」

真人はすでに限界を越えていた。佐花の身勝手な発言に我慢が出来なくなってしまうのだ。

「佐花はふざけてるの？」

「どうしたの？何を言ってるの？」

真人の雰囲気は酷く暗かったため、伺うように佐花は聞き返す。

「わざわざ佐花が言うように着替えてるのに…なんで終わらないの

「外に行くんでしょ？さつさと着替え終えないの？」

「何を今さら言ってるのよ。せつかくこれだけ服があるんだから慎重に選ぶのが普通でしょ？まあ、時間はあるんだし、ちよつとぐらい楽しみなさいよ。ただ、着替えるだけじゃつまらないでしょ？」

「…佐花だっていつまでパジャマでいるのさ。早く自分も着替えなよ」

「私はいいのよ。今は真琴の着替えをするだけで。ほら、次はこの服なんか…」

「俺はあんたの着せ替え人形なんかじゃない！！」

部屋いっぱい真人の声が響いた。あまりの音量に思わずびくつく佐花。真人自身も自分がこれだけの大声を出してしまったことに驚いていた。

「え？本当にどうしたのよ！いきなり怒鳴ったりして！」

「うるさいのはそっちじゃないか！言われた通りに着替えてんのに次から次へと注文ばっかで…ふざけるなよ！それに俺は子供なんかじゃないんだ！1人で着替えくらいできるんだよ！」

「なっ！？俺なんて言葉使っちゃだめじゃない！」

「子供じゃないんだからそんなのどうだっていいだろ！」

「よくないわよ。女の子が俺だなんて…ちよつと変でしょ？」

「うるさいっ！…！」

会話を途絶えさせるように先ほどよりもさらに大きな声をあげた。
真人の顔は興奮により若干紅潮していた。

「…真琴、体調でも悪いの？何かいつもと違うわよ？こんなイライラしてる真琴…真琴なんかじゃないわ」

「…違う」

——違う、いつもの俺は…佐花と一緒にいた俺は、本当の俺なんかじゃない。女の子の皮を被ったただの男だ。

「だからね、落ち着いて。いつものように可愛い真琴でいて。どこが悪いならお医者さんに…あ、それはまずいか。でも、いざとなったら私がなんとかして…」

「余計なお世話なんだよ！それにまた子供扱いして…本当ならあんたと同じ歳なのに…なんでここまで下に見られなきゃならねえんだよ！むかつくんだよ！」

勢いは止まらず、言いたいことを言いたいだけ吐き出してしまふ真人。佐花は怯えながらその言葉を聞くだけだ。

「…え？同じ歳？18じゃ…」

「あっ！」

しまったと思わず口を塞ぐがもう遅い。

「そりゃ18にもなれば大人よね、子供扱いし過ぎるのも嫌なのは

わかるわ。でも…なんでそんなキツく言うのよ。今までおとなしかったじゃない」

「くっ…あなたに…」

もうやめたかったのだが、押さえられず言葉は溢れだしてしまう。

「あなたに俺のなにがわかるんだ!!」

最後にそう叫ぶと真人は玄関を飛び出した。気まづくなってしまう思わず逃げ出してしまったのだ。

部屋には呆然と立ち尽くす佐花だけが残されていた。

「…なによ、いきなり。本当にどうしちゃったのよ…」

佐花の家から徒歩10分ほどに位置するこの公園。真人はそこに行き着いていた。自分のしでかした過ちを悔い、ベンチに座り込んでいた。

この公園は真人の知っている場所であり、思い出深いところでもある。何もかもから逃げ出したくなった気持ちが真人をここに引き寄

せたのдарうつ。

「…なんであんなに怒鳴っちゃったんだろ。さすがにやり過ぎかなあ…いや、佐花が悪いんだ。俺を子供扱いなんかしてるから…それでストレスが蓄まったんだ。そうだ、俺は悪くない。俺は悪くないんだ。悪いのは佐花だ。佐花が…」

そこでつぶやくのをやめた。ここにはいない人物の名前をつぶやいても虚しくなるだけだ。佐花から逃げ出してきたのは自分自信なのに…

本当は真人もわかっていた。子供扱いされたり遊ばされているのは確かにストレスではあったが、あそこまで怒鳴ってしまう要因にはなりえないということ。

真人はなぜ、自分があんなにイライラしてしまったのかまったくわからないでいた。

「…これからどうしよう。家に帰りづらいし…きつと佐花怒ってるよな…それに余計なこと言っちゃったし、何か感付かれちゃったかなあ…」

ふと空を見上げる。雲一つない真つ青な空だ。しばらくは雨など降りそうもないと少し安心する。

「本当なら今日は佐花と一緒にこの空の下を歩いてたんだよな…どうしてこんなことになったんだろ…」

ぼーっと眺める。何をするわけでもなく、ただ、空を見上げた。何もない、本当に青だけが広がっていた。

「あの空を飛んだら、きつと気持ちいいんだろうな…」

自らの羽を見ながらつぶやく。

「…あれ？なんかちっちゃくなってない？」

真人は首をぐいっと後ろに向ける。そこには以前よりも心なしか少しだけ小さくなった白い羽が見えた。背中いっぱいを覆っていたはずのそれは、いつのまにか手のひらサイズまでになっていたのだ。

「えっ？なんで？なにがどうなって…なんだよ、わけわかんない。どうせ結局飾り物なんじゃないか。ちよつとは空を飛べたりして、なんて期待してたのに。別に小さくなったって関係ないよな」

——俺がバカだったよ。

真人は羽を見るのをやめ、再び大空を眺めていた。

背中の羽は元気のない花のように萎れ、ただ風になびくだけであった。

EP13 男（前書き）

PV16000、ユニーク27000ありがとうございます。これ
からも頑張りたいと思います。

EP13 男

「…なによ、真琴一人で出かけちゃって。全然一人で外に出られるじゃない。私なんかまだ一人は怖いっていうのに…私だけ置いてけぼりにしちゃってさ…」

佐花は床にばらまかれた服を片付けながら一人部屋のなかにいた。

「せっかく私が買ってあげた服なのにわがままなんて言っちゃって…なによ」

強がりを言ってみるものの寂しさは消えず、むしろ虚しくなっていくだけであった。頬から一筋の涙が流れ落ちたことに気付き、慌てて右腕で拭う。

「…真琴のバカ、私がどれだけ頑張ってると思ってるのよ」

そこで玄関からチャイムの音が鳴る。佐花は身体を一瞬びくつかせ、畳んだ服を脇に置いてから立ち上がった。

——誰だろう…いや、あいつに…あいつらに決まってるわ。

玄関へと向かう佐花の顔はどこか不安気であった。

「はい、今からですから」

玄関の戸を開ける。

——なんだ、あいつじゃないじゃない。

ほっと胸を撫で下ろす佐花。しかし、それも一瞬のことであつた。

玄関にいた男は胸の内ポケットから手帳を取出し佐花へとかざす。

「警察の者です。こちらにシノノメマコトという人物はいらっしゃいますか？」

「…神様っているのかな？」

「なんだよ突然」

「別に突然過ぎるような話でもないだろ？ いいじゃん、ちょっとぐらい聞いてよ」

「はいはい。ああ…俺はいないと思うぜ？ 神様なんてのはよ」

「なんでそんなこというのさ」

「だってよ、考えてもみる。神様がいたなら皆幸せだろ普通はよ。だけど本当に幸せなやつなんてそんなにいないじゃないか」

「そうかな…」

「そうさ」

「でも俺は自分が幸せだとは思うよ？」

「なんでそんなアホみたいなことが言えんだよ」

「だって零と一緒にいられてるし。毎日楽しいし」

「…それもそうか」

「あれ？やけに素直だね。零らしくないよ」

「バカ野郎、そこは素直にありがとって言っとくもんなんだよ」

「零はたまに難しいことを言うね」

「ああ、難しいことを知らなきゃ大人になれないからな。…そういや、お前知ってるか？最近怖い病気が流行ってるらしいぞ」

「…知らない。難しいことわかんないから」

「…俺はさ、その病気が一体なんなのかは聞いちゃいけないけどよ、もし、それで死ぬとしたら…嫌だろ？」

「うん？よくわかんないけど病気は嫌だよ」

「…死ぬってのは何も感じなくなることらしい。本に書いてあった。それがどういふことなのか俺にだってよくわからないけど…そのことを知ってから怖いのが消えないんだ」

「…怖い夢見るの？」

「ああ。だからな、調べた。死なない方法。でも見つからなかった。俺たちってさ、いつかは絶対死ぬらしい」

「…それって怖いこと？」

「かなりな。一番怖いことだ」

「へえー。さすが物知り！びつくりしたよ！」

「…お前には難しかったか。まあいいや。…なあ、真人」

「ん？」

「もしさ、もし神様がいたとしたら…病気も無くしてくれるのか？死ぬのも無くしてくれるのか？」

「そりゃそうだよ！神様はなんでも出来るからね」

「そうか…そうだよな。よし、俺ちよつと神様信じてみることにするわ」

「えっ？さっきまでいないって言ってたのに？」

「いないかは知らないから調べるんだよ！もしかしたら神様ってた
だでは幸せにしてくれないのかもしれないし」

「そうなの？」

「いや、俺は知らないさ。でも調べみるだけ調べるよ。俺、一生死
にたくないし」

「そっか、頑張るんだね」

「ああ、頑張るよ」

「お兄ちゃん！お母さんがもうご飯だつて！」

「…あ、妹ちゃんのお出ましじゃねえか」

「うん、みたいだね。じゃあ俺は帰るよ。またね、零」

「ああ、また明日な…」

また明日——

「ん？」

ふと肌寒い風で目が覚める真人。公園のベンチに座ったまま寝てしまったらしい。いわゆるふて寝、というやつだ。

「ふて寝なんかしてたら本当に子供みたいだよな。佐花にからかわれても仕方ないのかな……あれ、なんだこれ？」

真人の身体には黒色のスーツが丁寧に掛けられていた。誰のものだろうと辺りを見回すと、真人の隣には、一人の男が腕を組んで座っていた。サングラスを掛けていて目は見えないが、軽く寝息をたてているようだ。

真人が起きたことに気付いたのか、男は身体をぴくりと震わせると軽く欠伸をし、真人の方へと向いた。

「おや、起きられましたか。いやはや、見守っているつもりですが、思わず私まで眠ってしまっていました。申し訳ございません。あ、このスーツですか？ いや、少し風も吹いていましたので、そのお召し物では少し寒いのではないかと思いますので勝手ながら掛けさせていただきました」

「…え、あ…そうですか」

あまりにも淡々と話されたため、真人はあっけにとられてしまう。そもそもまだ自分は何も聞いていないのだが…と軽く不満になりつ

つも、男の丁寧な態度から嫌味は感じなかった。

「…あの、なんでこんな？」

「なにかおかしいことでもいたしましたか？」

「いや、まったく知らない人ですよね？」

「そうですが？それが関係あるのでしょうか？」

あまりにも会話が噛み合わないため、なるべく言葉を選ぼうとする。

「えっと…わざわざこんなことをしてくださなくても結構でしたのに…と言いたいですけど」

「ああ、そういうことですか。失礼しました。簡単なことです。あなたがこんなところで一人ベンチで寝ていたのをたまたま目撃しまして、このままにしてはいられなくなりました…ほら、最近なにかと物騒なので、あなたが起きるまで見守らせていただきました」

真人ははっとした。そうなのだ、もともと真人が佐花の家から出なかった理由にはそういうことも含まれていた。小さな少女となってしまった真人には自身を防衛する力などほとんどないため、一人では出歩かないよう気をつけていた。それなのにそんなことも感情的になることで忘れてしまい、勝手に飛び出してきてしまったのだ。真人は少しだけ反省する。

「えっと…あ、ありがとうございます」

「いえ、礼には及びません。あなたのような美しい女性が汚らわし

い輩に犯されてしまうと考えると……いてもたってもいられなくなってしまうただけなので」

笑顔でそんな物騒なことを言うので、真人は軽く青ざめた。本当にこの男がいなかったら危ない目にあっていたかもしれない。

「しかしながら、どうしてこんなところで寝ていたのですか？こういうのもなんですがあまりにも隙だらけでしたよ？ただの散歩であったとしても、もう少し身の回りに気をつけていらした方がよろしいかと」

「あ……」

嫌なことを思い出す。喧嘩をしたこと。家を飛び出したこと。帰りづらいこと。

この先どうすればいいのかまた悩みをぶり返してしまった。

「……あまり聞かないほうがよろしかったようですね。ですが、まあだいたいのおことはお察します。大方喧嘩による家出みたいなものでしょう？」

「……なんで！」

「おや、ご名答でしたか。いえ、そんな大したことではありません。ただ一番ありがちな可能性を言っただけですよ」

そうは言われたものの、自分の心中を当てられ驚きを隠せない真人。それと共にこの男に底知れぬものを感じずにはいられなかった。

「なるほど…ならば今はすぐには家に帰りづらい、といったところなのでしょうか。時間をひたすら潰して時が経つのを待つ。時が解決してくれるのを待つ、それでも考えていたのではないですか？」

「わ、私は…」

何一つと狂いもなく言い当てられたため、何も言い返せなかった。

「…失礼。少し言いすぎましたか。他人の事情に口出しをするのは私の悪い癖です。毎度の様に気をつけてはいるのですが…」

「いえ、あなたは悪くないです。悪いのは…自分だったから」

「…」

佐花に勝手に怒ってしまい、自分を押さえられなかった。そんな自分を真人は責めるしかなかった。

「事情は知りませんが、あまり自分を責めないでください。仕方なかった、という場合も必ずありますから。いざこざがあつたのなら、自分と相手、どちらにも絶対に悪いところはあるものですよ。ファイティーファイティー。そう考えると心が楽になりますか？」

「…はい、ありがとうございます」

真人は男にそう言われ、少しでも心が軽くなっていた。この男は人を安心させるような何かを持っているのかもしれない、そう感じた。

「どういたしまして。…それよりも…」

男は真人の目に向けていた視線をの背中の方に移す。そこには、小さくはなったものの、確かに白い綺麗な羽がある。

「それは飾り…ですか？キュートな羽が生えているようですが」

「あ、これは…」

誤魔化すために飾りだと肯定しようとしたが、ためらってしまう。もしかしたらこの男にならば本当のことを言っても大丈夫なのではないかと。

さつきから話す限りかなり頭のいい人間みたいだし、人の気持ちを察する点にも長けている。もし、不思議がられるとはしても優しくしてくれるのではないかと？

そもそも真人は相談相手が欲しかったのだ。この非日常的な変化を遂げてしまったことによる不安の捌け口を。自分はなぜ生き返ったのか、誰のために生きているのか。責めてわからないにしても誰かに聞いて欲しいとずっと思っていた。

しかし、佐花には言えなかった。佐花は真人に何かしらの事情があるとかわかっていても関わらず、あえて聞きはしないという優しさを持っていてくれた。それを打ち壊すなどと言うことは真人には出来なかった。

だが…やはり止めた。いくら佐花には言えないとはいえ、見ず知らずの男に言う必要はない。

「…これは飾りで…」

「本物、みたいですね」

「えっ！」

「直接背中から生えてますし、そのように見えますよ？」

本物かといきなりばれたかと思いきや、ただの男の冗談であった。
なんだ、と一安心する真人。

「そうですね、特殊なアクセサリーですから」

と飾りであることで話を進めた。

「その羽も大変似合ってらっしゃいますよ。まるで…そう、天使のようだ」

「…」

その言葉は二度目だ。佐花も言っていた、初めて出会った時のことである。羽の広がった真人を見て天使みたいだと呟いた。やはり、見た目からすれば真人は天使にしか見えないのだろう。

しかし、そんな非現実的な存在を信じるような人間はそうそういない。アクセサリーか何かだと判断し、軽くスルーをするのが普通だ。この男も一瞬は疑いの目を向けたがすぐに現実的な見方に変えていた。

「…やはり、あなたのような美しい女性を放っておくのは惜しい」

「え？」

「とは言ってもそこまで気になさらないでください。あくまで気に掛かる、と言ったニュアンスですから」

「…えつと…だからどうだと言っんですか？」

「いや…単刀直入に申しますと…もしよかったら私のところに一緒に来ませんか」

「…えつ!？」

真人は初めて受ける言葉に開いた口がふさがらなかった。

そんな驚く真人を見てもなお、男は笑顔一つ絶やさず、ニコニコした表情を真人へと向け続けているのであった。

EP13 男（後書き）

長くなったのでここで切りです。この話はまだまだ続きますよ。

EP14 誘拐と誘惑（前書き）

読み辛いかもしれません。

EP14 誘拐と誘惑

——この男は何を言っているんだろう。第一俺は…

「どうかさなれましたか？」

「いや、どうにもならないほうがおかしいですよね？」

「おや、これは失敬」

演技でもしているかのような口調は真人の驚愕を和らげてしまう。
一瞬でも焦った自分が馬鹿らしい、そう思っていた。

この男の発言は絶対冗談だ。この口調なら真剣に言っているように
は聞こえない。そう心で決め付けた真人は軽く否定しようと考えた。
「…私、家に帰りたんです本当は。だから別にどこかに行きたい
ってわけじゃないです」

「ほう、帰りづらいただけだと。つまり勇気さえ出せば帰ることも可
能だとおっしゃるわけですか？」

「え？」

「あなたは少し勘違いをなさっています。認識が甘いのではないか
と。なぜならそれはあなたの気持ちしか考えていないから。はたし
て、家の人はあなたに帰ってきて欲しいなんて思っているでしょう
かね」

——おかしい。さっきまでとは違う。なぜか冷たいものしか感じな

い。直感でわかる。怖い。怒ってる？わからない。

男は笑顔だ。しかし、その笑顔から発せられるにはあまりにきつい言葉であった。真人はその言葉に心を抉られるような気味の悪さを感じていた。

「あ、不安にさせてしまいましたでしょうか？いや、最悪のケースというのは常に考えておきたい性分なので。もしものがあれば」と

「あははは…そうですね」

「大丈夫だとは思います。あなたの両親、もしくは単に保護者である方はあなたを大層大事にしてらっしゃるでしょう。なぜならあなたは家に帰りたいと言っていますからね」

「はい…」

「しかしながら…ひとつ言わせていただきますが、私の勘から申し上げますとあなたが原因で家出になったのではないのでしょうか？」

「なぜわかって…！」

「単純です、あなたが反省しているようだからですよ。つまりはあなたの方が啖呵をきった、そうですね？それにより保護者の方は愛想を尽かしてしまった可能性もありえなくはないとは思いませんか？なんせこんな世の中ですからね。これを期に一人分の生活負担が減ればさぞかし幸いなことでしょう」

「そ、そんなわけ…」

佐花がそんなことを考えるわけがない、真人はそう信じていた。しかしどうであろう。あれだけ言われても尚、少しも嫌われてないなどと断言できるだろうか。

真人にはそこまでの自身はなかった。少しぐらいは嫌われてしまっているだろうと頭の中で肯定してしまった。

そんなうなだれる真人を見て男は不敵な笑みを漏らした。それに真人は気付いていない。

男は真人の心情を見透かすかのように話を続ける。

「気まずいですよね。多分家に帰ることは可能でしょう。しかし、刺々しいムードの中で生活していくことは否めないでしょうね」

「でも…きっと仲直りだって…」

「ケンカによる仲直りが出来るのは子供同士ぐらいですよ。大人になれば仲直りと言ったって表面上のものでしかなくなります。それもお互いの利害を考えたものだけで。だから心の中ではどう思われているなんかわかったものではありません」

「…」

「あなたは…表面上だけの仲直りなんかで満足なのですか？」

返す言葉もなかった。男の一言一言が絶対性を持っているようにしか聞こえなくなってしまうのだ。

「楽しそうに暮らしているように見えて実は裏ではあなたの愚痴を

言っている。そんなこともありえる中で暮らしていけるのですか？」

「そんなのは…確かに嫌だ」

「でしょう？」

「でも！」

真人はそれでも男の言葉を信じたくなく、それに対しわずかながらの抵抗をみせる。

「そんなことを言ったら…誰とも一緒にいることなんて出来ないと思います。それだったら普段一緒にいる人にも嫌われている可能性だつてありえると言ってるようなものじゃないですか。そこまで言ったらキリがないですよね？」

「…ええ、その通りですよ。人間というのは本当に信頼しあえる仲間などと言つものは初めからありえないのですよ」

「何を言ってるんですか。むちゃくちゃですよ、そんなの…」

「仮に、あなたのような美しい女性がいたとします」

男は論文を読むかのように説明口調で続ける。

「その女性をある男が好きになりました。さて、ここに愛はありますか？」

なぜいきなりこのようなたとえになるのか理解し難かった真人であったが、一応男の質問に答えようとする。

「…そりゃ好きになったのだったら、男の人には愛があると思います」

「では、女の人の気持ちも考えてみましょう。彼女はその男に好かれていたとわかっていました。それでその男を悪く思っていないかったため、いっそと思い告白し付き合うことにしました。もちろん男としては願ってもないことですから晴れてカップル同士というわけです」

「…それがどうしたんですか？」

「そこに愛はありますか？」

先ほどと同じ質問に少しだけ戸惑うが、なるべく冷静に答える。

「両思いみたいなものですから…あると思います」

「本当にそうですか？」

「…そうじゃないんですか？」

「女性のほうには好きと言う気持ちはありません。あくまで嫌いじゃないからです。最近の恋愛はみなそうです。軽い流れでの付き合い。謂わば遊びの恋愛…そんなものに愛なんてものがあるのでしょうか？そんな恋愛の中でもキチンとしたルールを守っているなんてものが一番滑稽です。それで愛を知った気になってるのでしょうかね？」

「話がずれてるんじゃないですか？」

「確かにそうですね、じゃあ結論から申し上げましょう。恋愛なんてものも互いの利害関係から成り立っているものなんですよ。信頼の上に成り立つ？それすらも自分たちの愚かな解釈ですよ。相手が好きだから自分も好き。相手が子供が欲しいと言ったから生む。素直な愛のように見えますが、ただ単調な作業をしているだけでしかないんですよ。一番信頼としての理想の形である互いのことを思う恋愛こそが一番味気ないのです」

イマイチぴんとこなかったが、確かに男の言う言葉には力があつた。人を悲しくさせる力が。

「理想は一つしかない。そのままの意味です。しかしこれが一番悲しいということを理解していない人が多すぎる。理想の一つ下を目標せば手に入るものは多いでしょうに」

「……」

「わかりますか？理想を求めるものが一番愚かなのですよ。理想を語るものが一番哀れ。その場その場に落ちているものを理想だと思つて拾うことが一番楽なんですよ」

聞けば聞くほどに真人の心は蝕まれる。佐花と完全な仲直り果たすという理想の意味を見失いそうだからだ。

そんな理想を求めるよりも……この男についていくことを理想だと思ふことが楽なのではないか？男はそう言っているのだろうと理解した。

口がもう開かない。完全に負けてしまった。こんなムチャクチャな理論に真人は一言も言い返せなかった。

手をぐっと握りしめ、唇を噛むことしか出来なかった。

「さあ、どうしますか？悪いことはいけません。無理にとは思いません。あなたが決めることですから。ただ、私としては一緒に来ることが最善と思います。私はあなたに来て欲しいのです」

男は柔らかい笑顔で手を差し出す。

「わ、私は…」

真人はその手を掴んでしまった。

EP15 歪み（前書き）

展開はやいです。すみません。

EP15 歪み

真人の手を引きほくそ笑む男。その顔にはさきほどのような作った暖かさはなかった。そこにあるのは冷徹な視線だった。

——あと、一歩だ…

男がそう思っているのと急に真人の手の力が弱まった。男の大きくすりりとした手に対し、華奢でひ弱な指先が流れ落ちたのだ。

「どうかしましたか…!?!」

男が目を見張るとそこには顔を赤くし、惚けた顔の真人がいた。目も口もだらしく半開きになっている。

「大丈夫ですか？」

すかさず男は真人の肩に背中から手を回し、支えるように抱く。真人は素直にその腕に身を寄せる。その顔にはどこか生気が感じられなかった。

「まさか…寒さで風邪でも引いたのだろうか？あり得る、私が着たよりずっと前から寝ていたのだとしたら…」

「はあ、はあ…さ、佐花…」

虚ろになりながらも大事な人の名前を呼ぶ。ほとんど意識が消えかかっているなかでも一番に出てくるのは佐花の名前だったのだ。それだけ佐花に頼りきりになっていたなんてことに真人は全然気付い

ていなかった。

「さ…はな？それは誰の名前でしょうか…」

「ハアハア……」

「駄目だ、意識がなくなりかけてる。なぜ、いきなりこんな…」

そつと手を真人のおでこに当てる男。そこから感じられたのは普通の人肌よりも少しだけ熱いものだった。

真人の身体からは汗も滲み出ており、とても健康な状態とはいいたいものになっていた。顔色の悪さから男は本当にやばいと悟った。

「とりあえず病院か…ん？」

携帯を取出し連絡を取ろうとする男の手を頼りない力で引き止める真人。ほとんど反射的な行為であったのだろう。視線は男には向いていなかった。

「び、病院は…だめ…です」

「どうしてだい？とても顔色が悪そうだし、このままにしていたらいいことは絶対はない。身体のことを考えるなら…」

「は、羽…」

「羽？」

「…本物……なん……です」

止む終えず真人は男に本当のことを言う。このまま病院に引き渡されれば…本物の羽だと気付かれれば、何をされるかわかったものではない。

男は背中から回している腕に挟まれた真人の羽を見る。よくよく見ればそれが生えているところには肌との境みたいなものは見当たらない。肩甲骨あたりからなだらかに続いているのだ。

その感触も、作り物とは思えないくらい繊細なものであった。さらさらと流れるような白い羽にはとても現実身を感じられないが、それ以上に存在感があった。

「なっ！？冗談でしょう？私も確かに本物みたいと言いましたが…もちろん冗談のつもりでした。そんな…ありえない」

「ハアハア…お願いですから…病院だけは…」

「…確かにこれでは不味い…ですよね。…くっ、あそこに帰れば少しは対処できるでしょうに…」

「うっ！」

「今度はどうなされたんですか！」

「お、おな、お腹が…」

強く腹を押さえ苦痛に顔を歪める真人。その余裕のない表情にさすがの男も焦りを感じずにはいられなかった。

「くっ…仕方ありません。少し我慢してください」

男は背に回した手ね力を少し強め、左手を真人の膝裏に持つてくる。そのままゆっくりと持ち上げ、所謂お姫様だっこの状態になる。

真人は少しだけ抵抗したが、そんな気力もないためあっさりと体重を預けた。

「近場に車を止めていますので、そこまで我慢してください」

痛みを我慢する真人に気を遣い、揺らさないようにゆっくりと歩きます男。車は公園からさほど離れた位置に停車していないので、一先ず車に乗せてからどうするかを考えることにしていた。

しかし、公園の出口付近、一人の影が男の視界に入った。男は無視してそのまま突っ切ろうとしたが、その人物は男が通ろうとするところに両手を広げ行く手を阻んだ。

「すみませんが…今私はとても急いでいます。あなたが誰かは存じませんが、ここを通してくれませんか？」

男の柔和な口調にその人物は少しだけ動揺を見せたが、毅然とした態度で口を開く。

「それはこっちの台詞よ。あなたは一体だれ？その子を返して」

その声を聞いて真人は首を傾げる。聞き覚えのある声。安心する声。しかし今は会いたくはなかった。

「さ、佐花…なんで…ここに？」

「佐花？彼女が…」

男は真人の顔をうかがってから目の前の人物の顔を再確認する。

必死さを隠さない強い目。意地が意地でも真人を渡さないという感情がひしひしと男に伝わってきた。しかし、男はこんな状況でもなお、美しい女性だと感じていた。

「あなたは…この人の保護者ですか？」

「…ええ。でもその言い方は気に食わないわ。家族よ。私の大切なたった一人の家族」

「そう…ですか…しかしあなたは…」

男は佐花を今度は鋭い視線で見つめる。問い詰めるような視線を佐花は感じた。

「あなたは、この人とは血は繋がっていませんよね？」

「…さすがにそれはわかるわよね…けどなに？なにか関係あるって言うの？」

「あなたは…この人の価値がわかっていますか？」

「そんなことあなたに言われなくたって大事な…」

「違います。そういうことではございません。この人がどれだけ珍しい存在であるかを理解しているのか、と聞いているんです」

語意を強めて男は言った。佐花もその言葉の意味は理解していた。しかし、彼女にとってはそんなことはどうでもいいことなのだ。

佐花は一步男に歩み寄り、口を開く。

「珍しいからなによ。真人は真人。私の大切な家族。それだけで十分なの。もういいでしょ？誘拐は犯罪よ。今から警察を呼ぶことだってできるんだから」

佐花は携帯をとりだし、男に見せ付けた。男はそれを見て目を丸くしたかと思えば鼻で笑いだす。

「くくく…誘拐ですか。そうですね。そうです。そうかもしれません。しかし、今は…真人さんと言いましたね。真人さんの状態を確認するのが先決です」

「なっ、真人になにかしたの！」

いまさらになって真人の異常に気付いた佐花は男に敵意をむき出しにする。

「違います。真人さんがいきなり調子を悪くしたようですから対処しようと思ひまして私が車に連れて行こうとしていたんです」

「そんな心配は結構だわ！真人は私が看病する。だからあなたに用はないわ！」

「あなたになにが出来ると言うのですか？私には仲間に医者がいます。彼女に見せることが出来ればひとまず安心なんです。何か悪い

ことになる前に連れていかなければ危ないかもしれないですよ？」

「私が病院に連れていくわ！」

「先程も言っただけですよ？ 真人さんは珍しいと。病院なんか連れて行って大丈夫とおっしゃるのですか？」

思わずたじろぐ佐花。確かに佐花にはそういう医療関係の知識は皆無だ。だがこのまま男に真人を連れていかれて平気なわけがない。真人のことは心配だ。しかし、心配だからこそ男に手渡すことが出来ない。

「な、なら……真人に決めてもらえばいいじゃない」

「今真人さんは冷静に判断する能力を失っています。そんな中で判断を促すのは間違っていますよ」

「いや、嫌よ！ 真人は渡さないわ！ あなたみたいな見ず知らずの男に！」

「く、わからない人ですね……仕方ない。では診察だけさせてもらうというのはどうでしょう。あなたの家に真人さんを連れて帰る。そして少し時間はかかることになりますが、医師を私が連れてくる。それではダメですか？」

本当は男としては真人を連れて帰りたいが、無茶なことはしたくないと、真人のために妥協した。

そんな男の言葉を聞いてもなお佐花はまだ納得し難かったが、それがまだ良いほうだと、さすがに妥協する。広げていた両手を下げ表

情を幾分か緩めた。

「…わかったわよ。だけど真人は私が連れて帰る。あなたの車なんかには乗せたくないわ。住所は渡すから後で来て」

「…わかりました」

男はしぶしぶ佐花の腕へと真人を預けた。車で運んだほうが断然に早いのだが、変に刺激はしないほうがいいだろうと考えたのだ。

「真人…」

佐花は真人を抱き締める。もうすでに意識はないのだが、それでも真人の温度を腕に抱き確かめていた。熱い、本当に危ないのかもしれないと改めて認識する。

男はメモ帳とボールペンを取出し、佐花から住所を聞く。確認し終えるとメモ帳を折り畳み内ポケットへと収めた。

「では、私は急いで連れて来ますので、あなたも早く帰られたほうがよろしいですよ」

「言われなくてもわかってるわよ」

「そうですね、では…」

男は早歩きで去っていった。佐花は十秒ほど見ていたがすぐに目を放し真人を見る。

「ごめんね真人。早く帰ろっか…」

佐花は真人を軽く浮かせ抱き直し、公園から去っていった。

EP16 信じたくないコト（前書き）

またまた遅れてしまいました。 閲覧どうもありがとうございます。

内容があまりよろしくない感じになってしまいました。 予測は出来ていたことなのですが… ちょっと刺激が強いかもしれません。

EP16 信じたくないコト

「ここは…」

目が覚めた真人。さっきまで気を失っていたため、いまいち状況が把握仕切れていなかったが、見覚えのある家具を確認するとどうやらここが佐花の家であることがわかる。

「あれ？佐花は？」

身体を起こし、周囲を見回すがその佐花の姿はどこにもなかった。耳を傾けてみても物音一つしない。どうやらここには真人しかないようだ。

それがわかると真人は怪訝に思う。なぜなら、真人は自分が最後に見た景色は公園だったからだ。それなら、ここまで誰かが運んで来てくれたはずである。しかし、そのような人物はまわりにいないのだ。

「…うーん。どこかに出かけてるのかな」

とくに思考する理由もなかったため適当に結論付けると、一先ず誰かいないか確認するため立ち上がろうとする。

「よいつしょ…ん？」

違和感。身体に感じる違和感というよりも何かが触れているような感触。それは下の方から感じた。

「なんだろう…」

立ち上がりきると、それが何なのかに真人は気付く。

真人は気付いた、大腿にたらりと流れる赤い線に。

「少し遅れてしまいました」

「何してるのよ。真琴になにかあったらただじゃすまないわよ？」

「はははは…失礼いたしました。でももう大丈夫ですから」

佐花宅玄関口。今しがた来たばかりの黒スーツの男に佐花は罵声を浴びせていた。それもそのはず、男が来たのは佐花が家に着いてから一時間以上も経ってからだったからだ。

「…で、そっちのが医者？」

「あつと、そうでした。彼女の紹介がまだでしたね。アリサ、自己紹介を頼めますか？」

そう男が言うと、その後ろに立っていたアリサと呼ばれた女性は佐

花の前に一步出る。

医者と呼ぶに値する白衣をまとった、小柄の女性だ。髪は後ろでお下げにして垂らしている。少し陰があるものの、清廉な顔立ちをしていた。

「はい…はじめまして。私が医者笠原アリサです。もっとも、医師免許などは剥奪された身なのでそれも呼べないのかも知れませんが」

「ふん、なるほどね…モグリだから訳ありな仕事でも受けてくれるってわけね」

「そう言う言われ方は好きではありませんが…事実上はそうですね。そういうわけで安心してください、個人情報を守りますから」

無表情のままアリサは言う。その態度に佐花は気味悪さを感じたが、悪い人には見えなかったため真人を任せようと決心した。

「ふんっ…守ってくれないとあなたに頼んだ意味がないじゃない。それくらい当然よ」

「すみませんが…」

そこで男が口を挟む。

「アリサをあまり酷く言わないでいただけませんか？」

「何ですよ？所詮モグリの医者でしょ？仕事をもらえただけ有り難いと思っただけ欲しいくらいだわ」

「ですが彼女は…」

「ボス」

アリサは男に言う。

「いいんです。彼女は事情を知らないですから。どう思っても仕方ありません。それに全うな仕事が出来ないのも事実ですから。ボスが庇ってくれなくても大丈夫です」

「いや、しかし…」

「ボス…今は患者の方が大切です。私だって医者 endpoint くれです。患者に異常が現れる前に診察しなければ意味がありません」

「そうですね。すみませんアリサ。少し熱くなってしまいました」

「いえ、大丈夫です」

そんな二人の会話を呆然と眺めていた佐花。

——ボス？何でそんな呼ばれ方をしてるのよ…っていうかさっきの言い方だと私が悪役みたいじゃない！

勝手に話を終わらせられてイライラを隠せない佐花。しかし、真人のために思いこはぐつと堪える。

「…もうなんでもいいわよ。それより早く入って。今も真琴が危険かもしれないんだから」

「そうです。急ぎましょう、アリサ」

「はい、ボス…」

三人は家のなかへと入っていった。

「真琴？」

真人を寝かせていた部屋を見ると、確かにそこには真人がいた。しかし、いつのまにか真人は起きていて、布団の上で身体を抱くように丸まっていた。

「よかった、目が覚めたのね！」

佐花は真人に近づき、そのまま抱きついた。しかし、あまりの喜びに真人の異変にすぐには気が付かなかった。

「…」

「よかった、本当によかった！もう本当に死んじゃうかと思ってた！何よ、医者なんていらなかったじゃない」

「…」

「ん？どうしたの真琴？」

佐花は一度離れて真人の様子を見る。顔はずっとうつむいたままだ。よく顔を見るために佐花は布団に手をつき、下からのぞこうとする。

そのとき、佐花の手には何かが触れた。

ネチャ。奇妙な音を立て、それは佐花の手に絡み付く。なんだろう
と思い一旦手のひらを見ると、手には大量の血が付いていた。

「ひっ！」

思わずすくんでしまう佐花。しかし、これが誰の血であるかと考えるとそんな恐怖も吹っ飛ぶ。

「真琴！血っ！血が！」

真人の肩を揺らし反応を確かめる。しかし、真人は全く顔をあげようとしない。

「ねえ！どうしたの！この血は！大丈夫！？痛くない？ねえ、どうなのよ！」

「佐花さん！」

動転している佐花を制止するため、肩に手をおく男。

「落ち着いてください！」

「落ち着いていられるわけがないでしょ！」

「ちゃんと状況を把握してくださいって言ってるんです！」

「状況もなにも……」

佐花はその言葉を聞き、一旦冷静になる。よく見るとぱっと見、傷らしきものは見当たらないではないか。

「……」

「ボス……」

アリスがそつと指を指す。それは真人の股のあたりだ。

体育座りで丸くなった真人のスカートは軽くめくれてしまい。中が見えてしまっている。そこには、真っ赤に染まった布団と、下着があった。

その赤は下着だけではなく、その周りまでも赤く染めてしまっている。

「……そ、そんな馬鹿な……！」

男は驚きの声をあげる。しかし、女性のスカートの中を見るなど紳士的ではないことに気付き、顔をすぐに逸らす。

「……え？これってまさか……」

「はい、きっとそのまさか、かもしれない。調べてみないかぎり

はわかりませんが」

アリサは淡々と言う。

「車の中で今までの症状はある程度聞いていました。なのでそれを踏まえると十分にありえると思います。ただ、現在の日本では“あり得ない”ことはありませんが…」

アリサは真人の羽を見ながら言う。

「彼女みたいな存在ならわからないですけど」

「ねえ、これって…」

「ええ、そうです。月経、もしくは生理、メンスと呼ばれている女性にだけ起こりうる生理的現象です」

その言葉を聞いた真人がぴくりと動いた。

「な、なんで…なんで俺が…」

震える真人を尻目に佐花はアリサに掴みかかる。

「ねえ！そんなことありえるわけないでしょ！うそ言わないでよ！いい？“最後の一人”はもういないの！」

「そんなことを言われても困ります。私は状況判断をしたままでですから。それに、最後の一人は関係ないでしょう。だって彼女は明らかに異形の存在ですから。人間と同じように考える必要はないと思います」

それは真人にとって無情の言葉だった。自分が人間ではない。それを思い知らされるはめになった。

——天の遣い、下界を救える能力。

真人はあの時の声を思い出した。

——これが…これが、チャンスというやつなのか？俺になにをしろって言うんだよ…

真人は溢れる涙を誰にも見られないようにさらに蹲る。

部屋の中には佐花とアリサの言い合う声だけが響いていた。

EP17 疑いたくないコト（前書き）

また遅れましたm(_____)m
それでも見ていただけると幸いです。

いろいろとミスがありました。

タイトルの変更がございますので確認ください。

EP17 疑いたくないコト

シャワーから流れ出る水の音が止む。するとすかさず佐花はバスタオルを準備し、浴室から出てきた真人を優しくそれで包む。

「どう？ すつきりした？」

佐花がそう質問すると、真人は何も言わずただ小さく首を縦に振っただけであった。そしてそのタオルで身体を隠すようにしてそこから一人去っていく。

「…あつ、先に服着ないと風邪引くわよ」

しかし、そんな佐花の言葉に聞く耳を持たず、真人は逃げ去ってしまう。

「…やっぱり気まずいのかな…」

佐花は脱衣場に用意していた真人の服を広いあげると、真人のあとを追う。

真人は寝室用の部屋にバスタオルで丸まっていた。佐花はその脇に着替えを置いてやると真人に一言言う。

「ちゃんと服、着てよね。あと、一応…これ、付けておいて」

と、小さな箱のようなものも一緒に置いた。中には、紙のようなものが一杯入っている。

「付け方がわからなかったら、私にでも聞いて。あ、それにまだお医者さんもいるし」

お医者さんという言い方は佐花にとって皮肉でしかない。結局彼らはなにもしてはいなかった。ただ、出来たのは現状の分析だけ。これぐらいなら別に連れてこなければよかったと後になって後悔していた。

「…着替えたら…リビングに着てよね」

それだけを最後に言い残し、佐花は部屋から出ていく。

残された真人は、佐花の足音が離れていったことを確認すると着替えに手をつける。やはりさすがに裸のままずっといるのは辛いと思っただろう。

「…頭痛い」

先程の“出血”による一時的な貧血に悩まされながらも着々と服を着ていく。佐花が気をつかってくれたのかは知らないが用意されていたのはジャージであった。

しかし、上半身だけ着終えるとそこで手を止めてしまう。

「着けたほうがいいのか…やっぱり…」

箱に手を伸ばす。そこから中身を一つ取り出して目の前で広げてみる。

「こんなのを付けてたんだよな…女の人たちは。なんか不思議だ…」

しかし、実際真人は疑問に思っていた。今の日本にこれを付けている人などはほとんどいないのだから、使い方がわかる人物などはほんの一握りなのではないかと。確かに医者なら最低限そういう知識を植え付けるのかもしれないが、どうみても三十代にも満たない若い医者には見えなかったため、経験したことなどは少なくともありえないだろう。

「なら聞いてもしかたないや」

幸い箱の方には簡単な付け方が記載されていたため、それにそうことが出来た。

さまざまな違和感を感じながらも、付けること自体はすんなり終わることが出来た。

「…感触が嫌だなあ…よくこんなのを付けて歩き回れるもんだよ…」

と、文句をたれながらも真人は佐花に言われた通りにリビングに向かった。

そこにいたのは三人。佐花とスーツを着た男、そして白衣を纏った女性の医者だ。

なんとも奇妙な光景だが、この状況を生み出したのが他にもない自分自身だと思つて居たたまれない気持ちになる真人であつた。

「あ、真人。待ってたわよ。どう、落ち着いた？」

「あ、うん…」

本人はすっかり忘れていたことなのだが、真人はかなりの興奮状態に陥っていた。それも一部は生理によるものだったのだろう。

そうとでも考えていないと罪悪感で押しつぶされてしまうからだ。

「その…ごめん」

真人は小さく呟く。

「その…自分でもよくわからなくて…いろいろ迷惑かけて…」

「いいのよ、家族って言ったじゃない。少しぐらいは大目に見てあげるわよ」

「…ありがとう」

佐花が優しくしてくれたおかげで少し気を晴らすことが出来ていた。

しかし、それを見ていたスーツの男は言う。

「よかったですね、仲直りをする事が出来て…ただ、いろいろと話し合わなければいけないことがあるんじゃないですかね？」

「話し合わなければいけない？」

真人はぽかんと口を開いてしまったが、佐花はその言葉を聞いて唾を飲んだ。

「…ええ、そうね。本当なら聞きたくないことだったけど…悪いこ

とが重なっちゃったから、これ以上このままはよくないわよね……」

「え？なんのこと……」

「真人」

佐花は真剣な顔で真人に向き合った。真人の肩を押さえ目を見つめる。

「…あなた、ナニモノなの？」

「シノノメマコト？」

約三時間前。佐花は目の前の男が発した単語を頭の中で反芻していた。

その言葉もそうだったが、一番気になったのはその男が自分を警察と名乗ったことであった。

——警察が真琴に用があるの？

警察の男が一体なにをしたいのかがわからず困惑するばかりの佐花。

だが、まったく身に覚えがないわけではない。そもそも真人について知っていることなどはほとんどないのだから。

一番最初に考えたのは搜索。なんらかの原因で失踪してしまった真人を警察が探しているということだ。家族が親類の人間が搜索願いを出したのであったならば十分にあり得る話だ。

それならば仕方ない。自分が真人と一緒に歩いていたところを見られたのなら通報を受けたのかもしれないと。自分がある種の誘拐犯のように思われているのかもしれないと…

だが、今の佐花は真人に暴言を浴びせられ、少なくとも傷心していた。だからどうでもいいとしか思えなかったのだ。それゆえに返した返事は、

「知りません」

の一言であつた。

「そうですか…」

男はもちろん顔をしかめた。それはそうだろう。男は確かな情報を元にこの家へと来たのだから。人違いはあってもシノノメマコトを知らないというのはあまりにもおかしい。

だから真っ先に考えたのは、この女は嘘をついているということだ。だが、女の反応があまりにも薄いため本当に演技なのかいまいち計りかねていた。

「…一応確認ですが、これを見てください」

男は違う視点から嘘を暴こうと考えた。写真を見せることによって表情の変化を見るのだ。まったく知らない人物なら反応は見せないだろうし、顔のわかる人物なら間違いなくなんらかの反応は見せるはずだ。それは眉がぴくりと動く程度の些細なものでも黒と判定出来るほどだ。

「…いや、本当に知らないですね」

佐花から出された答えはそうだった。いや、実際に知らないのだ。それは佐花の知っている真琴ではなかったからだ。

ここで佐花は完全に警察の人違いかと確定しはじめていた。

安心仕切った顔になった佐花を見て男は少しだけ焦りを見せる。切り札の一つである写真が逆効果だったからだ。

「…本当に知らないんですか？あなたがシノノメマコトと一緒にいたという情報を掴んだのですか」

「…」

やはりそうか、と佐花は思う。しかし知らないものは知らないのだ。写真に写った人物は佐花の思うシノノメマコトではない。

ただ、その写真のシノノメマコトなぜかその顔を見て安心のようなものを感じていた。

——この写真の少年は…似ているのかな。真琴に。でも、性別が違
うから…やっぱり違う。ただ、雰囲気は似ているかも。

知らないはずなのに、どこか他人とは思えない雰囲気纏った少年の写真を今一度見つめる。

——違うなら…真琴のことは言っても大丈夫かな。

少しだけこの少年のことを知りたいと佐花は思ってしまった。なら、少しぐらいこの男に情報を与えて置けばこの少年について教えてくれるかもしれない。

「…この少年は知りませんが…まったく別の、シノノメマコトなら内にいます」

「！」

遂に吐いたかと男は視線を鋭くする。小さな穴からすべてを覗いてやる、そういう信念が溢れていた。

「違うシノノメマコト？やはりシノノメマコトという名の人物はいるんですね」

「はい、私の…知り合いから預かった女の子で。東雲真琴って言います」

男の手帳に漢字まで丁寧に書く。もともと佐花が勝手に漢字は当てているため間違いではあるのだが、そんなことに佐花は気が付かない。

「…本当に別人？性別が違うから…しかし、この年齢で性別を偽るのには限度があるだろうしな…」

「あの」

佐花はほんの好奇心で男に問う。

「その…シノノメマコトって男がどうかしたんですか？」

「…捜査に少なくとも関わったからなあ…まあ、至少くらは教えなければいけませんか…」

佐花の思惑通り男は話そうとする。

「…最近連続殺人事件が起こってるのは知ってますよね？」

「殺人事件？あ、はい」

その事件についてはよくニュースでもよく報道されているため、あまりテレビを見ない佐花でも少しは知っていた。

「確か…300人の高校生を殺したとか…」

「ええ、そうです。その事件のことです。その事件の重要参考人が…」

「シノノメマコト…」

「そういうことです」

殺人事件。なんとも物騒な話だ。真琴が関係なくてよかったとほっと胸を撫で下ろす佐花。

「じゃあそのシノノメマコトって言う少年が犯人…」

「いえ、違います。いや、関わっているかも知れないので犯人ではない、とは言えませんが…確定した犯人がいるんですよ」

「…？だったらなんで捕まえられないんですか？」

「早い話が、返り打ちをくらいましてね。銃を奪われてしまっているんですよ。それで調子に乗ったのか何度も何度も…本当にふざけたヤツですよ」

「…怖いですね」

「ええ、私たちも怖いんです。それでもこんな時代だからこそやらずなくちゃいけませんからねえ。実際テレビで報道してるのなんて一部ですよ、高校生が300人ってだけで被害はもっとある。確かに三年前は高校生だけが対象だったんでしょけど…なんせ相手は成長してますからね。どんな相手でもぎったんばったん、無差別殺人ですよ」

「無差別…」

背筋に冷たいものが走る。こんな危ない世の中に真琴一人を外に出してしまつて本当に大丈夫なのだろうか。

「あ、だからですね、この写真だつてあくまで参考程度にしかありませんからねえ。そりゃいい歳の男の子なんだからこの子も顔なり体格なり変わっちゃつてるだろうから」

「あ、これも三年前とかの写真なんですか？」

「ええ、ま、言ってしまえば三年前からシノノメマコト、は見当たらなくなっちゃいましてね。最後に撮った写真なんですよ。ま、取り調べていうんですかね。そのときの写真でね。ま、逃げられたというか連れ去られたんですけど…」

「…誰に？」

「そりゃ殺人犯のやつにですよ。ま、その時はまだ殺人犯ではありませんでしたが…まあ、変わりませんか。で、その二人はつるんでたんです。だからシノノメマコトを重要参考人として呼びだしてね。移動のときのちょっとした隙にねえ。あれは本当に困った。ただ、シノノメマコトの方は素直なやつだったからいろいろ聞き出せましてね」

「…それで？」

「あつと！」

男は慌てたようにわざとらしく口を押さえる。

「喋り過ぎました。いけないいけない。一般人には関係ないことまで喋っちゃうところでした。誰にだってプライバシーはありますからねえ、気を付けないと」

なんだかんだで気になって聞いていた佐花は残念がる。しかしここまで聞いてしまえば骨の髄までだ。

「…もうちょっとぐらい教えてくださってもいいじゃないですか。私だって事件について最低限知ってないと安心できません」

「ううん…そう言われてもねえ…ま、犯人についてぐらいならいいか」

よし、と心の中でこぶしを握る。

「犯人はですね、金髪の高身長 of 男です。顔や身体にいくつも傷があつてですねえ…そりゃただ者じゃないですよ。名前は曉零といいましてね。シノノメマコトの幼なじみだとか」

「幼なじみ…」

「ま、私が言えるのはこれだけですな。上がうるさいもんで。ただ、金髪 of 男を見たら気をつけてくださいよ？」

「…はい…」

「いや、それにしても…当たりだと思つてたんですけどねえ…かわいらしい女の子じゃ当てはまりませんよね」

「あ、あの…なんで内 of シノノメマコトを尋ねたんですか？」

佐花は最後にそれだけと思ひ訊ねる。確かに自分は真琴と一緒に歩いてしたが、もしそれを目撃したのなら別人だとすぐにわかるはずだからだ。

「えっ？ いやあ、ここらの町でシノノメマコトって登録されてる人間は一人しかいないからですよ」

「えっ…」

「あ、こう書くんですけどね」

と、さつき書いた東雲真琴の横に東雲真人と書き、佐花に見せる男。

「ま、顔は変えられるかも知れませんが、性別と体格は変えられませんかねえ。まったくあなたとは関係ないでしょうよ。私自身があなたのシノノメマコトを見たわけじゃないですからね。とりあえず確認したいなので来ただけですから。どうやらあなたは嘘をついていないみたいですからねえ。まあ、とにかく安心してください。お時間取らせて申し訳ありませんでした」

では、と言い帰っていく男。

が、男は帰り際に「まあ」と捨て去るように言う。

「もし、体型や性別まで変えられてちゃ話は別でしたけどね。まあ、そんなやつがいたら化け物としか考えられませんかねえ」

EP18 東雲真人（前書き）

またよくわかりにくくなってしまいました…
フリーリングで読んでいただけるとありがたいです。

EP18 東雲真人

「…あなた、ナニモノなの？」

その言葉は真人の心に深く突き刺さった。佐花だけは絶対に聞いてこないであろうと思っていたこと。それがいきなり自分に浴びせられているのだ。

「…な、なんのこと？」

とぼけるつもりではない。ただ真人は言葉の意味を確かめたかっただけだ。

佐花はゆっくりと返事する。

「真人…あなたは、どこから来た誰なの？」

「な、なんで今聞くの？今までそんなこと聞かなかったよね？なんで今になって…」

「私だって聞きたくなかないわ。聞こうとも思ってた。でも状況がいろいろと変わっちゃったの。だから今は真実が欲しい。あなたが誰なのかという真実が」

「わ、私は東雲真琴だよ…それ以外の他でもない…」

「真実に人で真人、よね。あなた、私が前に間違って名前を書いた時に指摘しなかったのはなぜ？」

「な、なんでそれを…！」

「やっぱり…真人なんだ」

「あっ！」

今さら鎌をかけられたことに気が付く真人。しかしもう遅い、ばれてしまったのだ。

「あなた、あの時間違いなく私が書く名前を見てたわよね？でもそれをそのまま見ていただけだった。どういうこと？言い訳は出来ないわ。あなた自身が今認めたからね」

「さ、佐花が名前を間違っ覚えてたなんて知らなかったんだよ。その時初めて気付いて…でも、もういいかなって」

「なんでそう思ったの？間違った名前を使われるなんて普通嫌でしょ？」

佐花からの的確な指摘を受け、真人は何も言い返せなくなる。

「もしかして、別に名前を偽っても都合がいいようなことがあるんじゃないの？」

「そんなこと…」

「あるのね」

「…」

目線を佐花からそらす真人。これ以上何も聞かれたくはないのだろ
う。

「…ねえ、睨零って誰？」

「!？」

そらしていた目を思わず向けてしまう。それは決して佐花から出る
ような名前ではなかったからだ。しかし、反応してしまったことが
何より自分が知っているという証拠だと見せ付けてしまった。

「あ、いや……な、なんでその名前を……」

「…警察が来たの。あなたが家を出たすぐ後にね」

「……」

「いろいろ聞かれたわ。そして、いろいろ聞いた。連続殺人犯につ
いての捜査だったみたいね」

「……」

「もし、もし、私の考えが間違っていたら謝るわ。だから…私は教
えて欲しいの」

「…何を？」

「真人自身を、よ」

真人は暫し考えてからこくりとうなづく。もう逃げ場はないのだ。

「あなたの本名は東雲真人。本来は男の子だったけど、なんらかの理由で身体を作り替えた。たぶんその理由が…自分が大量殺人犯の幼なじみとして取り上げられてしまったから…それで逃げ回って途中で力尽きた所で私に拾われた…とか？」

「…それは違うよ」

「どこが違うの？」

「半分くらい…」

「どこからどこまで？」

「ちょっと待ってください」

激しく追及する佐花を見兼ねたスーツの男が抑えに入った。男は至って冷静に言う。

「佐花さんの予想は先程に私も聞かせていただきました。あまりにも信じがたい話ではありますが、確かにその可能性は否定しませんが、本当にそうだったとしたら確かに驚愕せざるを得ません。ですが、彼女だって事情はあります。もう少し落ち着いて聞いてあげませんか」

佐花が手の力を和らげ、少しだけ安心する真人。確かに真人にだって佐花の気持ちはわかっていた。殺人犯に関係のあるような人物がそばにいれば気が気ではないだろう。

だが佐花はそんな理由で興奮していたのではない。だいたい自分の

予想なんぞはどうでもよかったのだ。真人から話を聞くための振りに過ぎない。それにさっきの予想ではなぜ真人が服も着ないで倒れていたのかつじつまが合わない。

佐花はただ、真剣に聞いているという意思を真人に伝えたかったのだ。佐花はこれ以上真人に嘘を突かたくはなかったのだ。

「…ごめんなさい真人。少し熱くなりすぎていたわ」

「うん…別にいいよ。その…殺人犯だからどうのつてところからは違うんだ」

「…つてことは身体を作り替えたつていうのは本当なのね？」

「…ちょっと違うけど、まあ、だいたい…確かに私はもともと男だった」

部屋の空気が凍る。真人は軽く言ったものの、それは十分に驚愕の一言だ。現実ではあり得ない事象がそこには起こっている、それを改めて痛感させられる。

「…」

真人は考えていた。いい機会だからすべてを話してしまい、相談なり何なりしてしまおうかと。しかし、それは出来ない。それをするにはあの存在についてまで語らなくてはいけないからだ。

神、そして天使という自分自身。両方とも何もわかっていないのに話してしまつて大丈夫だろうか？証拠を見せろと言われても自身にあるのは羽だけだ。こんなものを見せただけなら頭がおかしいと思

われても仕方がない。

「あの…」

真人が口を開くと全員が視線を向ける。興味からなのか、疑心からなのか、真人にはわからない。

「いいわよ、なんでも話さない」

「うん…じ、実は私、自殺したんだ」

またもや軽い口調で言ったものの、それは真人にとってはかなり勇気のいる発言ではあった。自身の命を捨て去るという重苦しい過去を他人に明かす、こんなことは普通出来はしないし死んだ人間ならなおさらだ。

しかし、ここでつまづいては真人にとって話にならないのだ。ここはすばやく流す必要がある。話の本質ではないからだ。

そこにいた全員は真剣に真人の話聞いていた。真人もそれに気が付き顔をあげ話を続ける。

「それで…なぜか運良く生き返った。理由はわからないけど…誰かに助けられたのかも知れない。気が付いたのは佐花に拾われたところなんだ」

真人の選択は嘘をつくことだ。やはり全部は話せない。話が拗れないくらいに現実味を帯びた表現をする外なかったのだ。それでも、多少は無理矢理だ。そうでもないと神がいるなどという話をリアルに熱弁しなくてはならなくなる。その方が明らかに無理だ。

「自分でも身体が変わったことに気が付いたのはその時に目を覚ましてからなんだ。だから上手く動くことが出来なかったんだよ。なんで生き返らせてわざわざ捨てられていたのかはわからないけど、こういう経緯なんだ」

「…納得いかない点多すぎるわ。自分の意志で身体を作り替えたわけではないっていうのはわかったけど…それ以降の話がちょっとね。このぐらいなら私でもつける嘘だわ」

厳しい指摘を佐花は容赦なく真人に浴びせる。

「さすがに私もそう思います。真人さんがここ数日どう過ごしてきたのかはご存知ありませんが、ずっと一緒にいた佐花さんなら、真人さんが本来の姿ではないと知った時点で十分に予測出来るレベルの話だと思います」

男も続けて言った。男は思ったままのことを口にしただけではあるが、正論である。真人にもそれぐらいはわかっていた。だが、これ以上話を変えてしまつては本末転倒なのだ。

「だけど事実は事実なんだよ。あと一応誤解だけは解かせてもらうけど…殺人犯がどうこうは知らなかった。ニュースを見て初めてその事件を知ったんだよ。だから犯人が私の幼なじみなのかはわからない」

「でも反応をしたってことは心当たりはあるってことでしょ？」

「…うん。もともと気性の荒いやつだったから…もしかして思つて」

「気性が荒かったぐらいで自分の幼なじみを殺人犯として疑うってのはおかしくないかしら？何か他に知ってて、心当たりがあったんじゃない？」

「…警察からなにか聞いたの？だったらそれが関係あると思うよ」

「ならいいわ。これ以上そのことについては聞かない。ただ、ひとつ言っておくわ。警察は間違いなく犯人は暁零だって言ってたわよ」

「そ、そう…なんだ…」

真人は信じていなかった。信じたくなかったが、本当のことを聞いてしまい幾分か悲しみを感じていた。

佐花はというと警察から聞いた情報と真人の意見を照合させていた。まだ全部は話してはいないが、概ね警察が言っていた部分は正しいのだろう。

しかし佐花にとっては殺人犯についてはそこまで追及するほどのことではなかった。あくまで知りたいのは真人自身のことであり、それに少しでも掠めている殺人犯の情報は一応知っておこうという程度なのだ。

だから、それらの話で一番重要なのは、殺人犯の動機なんかよりも真人が殺人犯となんらかの関係があったか、ということだ。それが少しでもわかれば殺人犯自体はどうでもいい。次に佐花が知りたいのはそこから繋がるもう一つの確認事項だ。

「警察の人が言っていたわ。三年前に行方不明になったんだってね。

もしかしたら、その時に自殺したの？」

「うん、うん……」

「あ……思い出したくないことを聞いてごめんなさい。でももう一つだけ聞かせて」

「な、なに？」

「それから三年私と会うまでの記憶はなにも覚えていないってことでいいかしら？」

「うん……自分だって月日が経っててびつくりしたぐらいだから……」

「わかったわ。私が聞きたいことはこれだけ。ありがとう真人」

佐花は真人の肩を掴んでいた手を離す。

「なら……関係ないのよね……」

「なにが？」

「あ、いや、なんでもないわ。……その……真人、よく聞いて」

「うん、うん」

真人は姿勢を改める。そして佐花はゆっくりと口を開く。

「……今すぐここから逃げるわよ」

「えっ？」

真人はあまりにも突拍子な佐花の言葉に情けない声とともに開いた口が塞がらなかった。

EP19 脅威（前書き）

やっとの更新です。少しずつ話が動いていきます。

今さらですが、誤字を見つけた場合は活動報告にてお知らせください。

EP19 脅威

「に、逃げる？」

いきなりのことですら返せばいいのかわからない真人。なんとか佐花の言葉の意味を汲み取るうとしていた。

「確かに、警察につけられてるんだったら危ないかも。でも、警察だってさすがに人間が性別から体格まで変わるなんてわからないはずだよ。それに捕まったとしても別に私は悪いことはしてないから……」

真人はそこまで言うてから思い出す、自分も前科持ちだということ。自身も他人の命を奪った記憶がある。それも間違いなく罪ではあるだろう。

ならば、やはり警察に咎められても仕方ないのではと思ったのだ。佐花はそこまでは知らないが、十分に警察に追われる理由があった。しかし佐花は首をふる。

「違うわ。そのことは関係ないの。むしろ今は警察の近くにいたほうが安全……いや、警察が仲間かもしれないけどね」

「な、なんのこと？」

「真人。あなたは今、自分の立たされている状況が理解出来ていないと思う。でもね、考えてみて。この日本で新しく人間を産むことが出来るのはあなただけってことを」

「え？」

「もし、それが誰かに知られたらどうする？ いや、違うわね。知った相手はどうすると思う」

「そりゃ…」

真人は考えた。しかし、考えだされる答えはいいものではない。真人にとって最悪のものばかりだ。

考えればわかる。子供を産むことができる人間がそこにいたのならば…

「独占する。誰にもわたさない。わかるかしら」

「…」

「言い換えればあなたは全日本人から狙われる存在となっているのよ。羽が生えているってことも格段に珍しいことではあるわ。でもそんなことはお構い無し。ただ、子供を産めるというだけで絶対的存在価値があるの」

「そんなの…うれしくない」

「ええ。そうでしょうね。勝手に身体を作りかえられて誰も彼もから狙われることになるんだから。わかったでしょ？ 逃げなきゃいけない理由が」

「理由はわかったよ。でも、ここから逃げなきゃいけない理由はわ

からないよ。だってばれなければ誰からも狙われないでしょ？普通はわからないんだからそんなに必死にならなくても…」

「必死にならないといけない理由はあるのよ」

佐花は語意を強める。そして怯えるように続ける。

「…この家に定期的にある奴らがくるの。そいつらには絶対に見つかっちゃだめなの」

「奴ら？一体なにを言ってるの？それに来たとしても隠れてれば…」

「真人は奴らを知らないからそう思うかもしれない。でも、家のなかに隠れただけじゃ絶対に見つかるのよ。だからここに居ては危険なの。わかって」

「…」

なぜ佐花が怯えるのか、真人にはわからなかったが、普段は見せない恐怖に満ちた表情を見ていると納得せざるをえなかった。

真人はわけもわからぬままこくりと頷いた。

「ごめんね、落ち着いたら説明するから…だから今は…」

「佐花さん」

スーツの男が呼び掛けた。

「外のおかしいです」

「えっ？」

「複数の人の気配がします」

それを聞いて佐花は窓から外を覗いた。そして見るなりくずれるように腰を下ろしてしまった。

「な、なんで…話が違っ…なんで今日に…？」

「佐花？」

真人はなにが起こったか聞こうとしたが、少し考えればわかったことだった。

佐花の言う奴らが来たのだろう。それはきっと予想だにしていなかったタイミングだ。佐花の顔からは余裕の表情が感じられなかった。

絶望に打ち拉がれる佐花に考える暇も与えずチャイムが鳴った。

「…で、出ちゃダメ。そうよ、今は居留守を使えば…」

そう思ったのもつかの間、玄関から声が向けられる。

「佐花美咲、いるんだろ？」

佐花はピクリと動いた。身体を震わせ、最早冷静さと呼べるものは失っていた。

「まずい、非常にまずいですね。佐花さんがこの調子ですと逃げら

れるものも逃げられなくなる」

スーツの男は依然として冷静なままだ。しかし、その額には薄らと汗を浮かべている。

「に、逃げられるんですか？」

真人は状況を把握仕切れてはいなかったが、自分に出来ることをしようと、男に問い掛ける。

「そうです。人がいるのはどうやら玄関側だけのようですから。こちらが逃げようなんて思っているのは知らないでしょうから、普通はそちらに固まっているでしょう」

「えつと…私にはわからないけど、そうなんですか？」

「おそらくは。詳しいことは後回しにするしかないですからね。今はなるべく気配を消して裏口から逃げるのが得策かと」

「でも…佐花が言ったように居留守とかでも大丈夫のようない…今逃げる必要はないんです？」

「そうかもしれませんが…私たちは彼らのことをあまり知りませんから。乗り込んでこないとも限らないので。それに居留守はもうばれていると思いますよ」

「えっ？」

「私たちの所為です。ほら、車を停めてありますから。彼らには客人がいると一目瞭然です」

なんとも呆れてしまった真人であつたが、今は気を抜いている場合ではなかった。

「だから今は速やかに裏口から逃げるしかないんです。ですから…佐花さんが動いてくだらないことには…」

「…佐花！」

真人は佐花の肩を揺すり声をかける。

「真人…もうごめんなさい、ごめんなさい…」

「なに言ってるの？佐花！まだ諦めちゃだめだよ」

「真人…あなた男の子だったのよね？そうよ、もう女の子を繕わなくていいわ。いっそ好きにしなさい」

「今はそんなことどうでもいいよ！」

「男らしくしてれば、女の子とはばれないかもね。そうよ、女の子だってばれなきゃ大丈夫よ！ね、だから、ほら、男の子らしくね！」

「佐花…」

もう戦意を消失した佐花の目を見て真人は肩を掴んでいた手を話した。

それと同時に扉があげられた。荒々しく無理矢理ではなく静かに、丁寧に開けられた。

「鍵を閉めるなんてひどいじゃないか、佐花美咲くん。こちらのス
ペアで勝手に開けさせていただきましたよっ…」

部屋に上がり込んできたのは、白衣で身を包んだ男だった。

「おやおや、パーティーでも催してたのかい？これはこれは友達な
んでどこで作ったんだか…」

男は部屋にいた全員を一瞥する。その中でも真人をしつこく目に留
めた。

「ふーん…変わったアクセサリーを付けた女の子がいるもんだ」

「お、俺は…男だ」

ばかばかしいとは思いながらも佐花の言われた通り男を演じた。

「お嬢ちゃん？馬鹿言っちゃいけないよ。こちとら何人もの女の子
を毎日検査してんだから、君が女の子かどうかくらい一目でわかっ
ちやうからね？」

「検査？」

確かに男の格好は医者や研究員が纏うような白衣だ。それゆえに検
査などという発言は至って自然ではあるのだが…引っ掛かるものが
あつて仕方がなかった。

胡散臭い雰囲気醸し出しながら男は真人に近づく。

「例えば、だね…」

男は真人の髪に触れる。

「細く綺麗なこの髪。白いつてことは珍しいけど北欧の方じゃまあ見かけるぐらいだからね」

続いて男は繊細な手つきで腕を掴む。

「この細い腕。男の子でもこのぐらいの子はそりゃいるよ？でもね、筋肉の付き具合なんかは全然違うんだよそれに…」

真人の顎を軽く持ち上げる。

「この顔で男なんて言われても説得力はないなあ」

「ま、真人に触らないで！！」

佐花は必死で声を荒げる。さっきまであれだけ動揺していたにも関わらず、真人を守るの一心を貫こうとしたのだ。

「その子は…関係ないでしょ？ほら、私を検査しに来たんでしょ？だったら早く連れていきなさいよ」

「そうだね、そうだったね。でも、君はもうほとんど用済みだからなあ…それともなに？まだやるの？」

「…うつ」

「無理はしなくていいよ。君には散々無理をさせて来たんだからね。この家だってその代償のつもりだよ。まあ、こんなのじゃ満足して

くれないだろうけどね」

「……」

「まあ、君の場合は特別だから戻りたいっていうなら戻ってくれてかまわないよ。こっちとしては十二分に受け入れるしね。だいたい今は体調の検査に来てるだけだからいずれはこれもあと二、三回でやめるよ?」

二人だけにしかわからない会話が展開され残された真人たちはただ呆然と眺める。

入り込む余地がないのだ。この男は飄々とはしているが隙がない。

「だからさ、戻りたいっていうなら早めに言ってよね……っで、君はとてもおもしろいなあ」

男は佐花に向けていた顔をいい終わるとすぐに真人に向きなおした。

「男だ……なんてね? ひょっとして女の子ってばれたくなかったのかな? もしかしてもしかするのかい? ……ねえ……」

男は真人の顔を下から覗き込むように見る。

「君も検査しちゃおうか?」

EP20 別れ

「やめて、お願いだから……」

泣いて懇願をする佐花。しかし真人にはその涙の理由はわからない。ただ、検査と言われるものに何かがあることはわかった。

「な、何をするの？」

真人は恐れながらも男に聞いた。

「だから、検査だつて。簡単な検査だけだよ。そうだね、どういう検査かって言うなら……適性の検査かな？」

「適性？」

「そう。んで、適性があればお国のために働けるってわけ。いや、今はそれどころじゃないな、世界に貢献できると言っていていいかも」

「えっ？」

そこまでの偉業を達成できる可能性を見いだせるならば、適性の検査とやらになぜそこまで怯えるのか？真人は疑問を膨らましていた。少なくとも、真人自身は適性があつたとしたならば、人々に貢献ができる——つまり、神から言われていたことを守るのではないかと、前向きに考えだしていた。

そもそも神なのかすらはよくわからない存在ではあつたし、言われ

たとりにしなければなにをされるかなんて想像することもできないが…罪滅ばしはしたいと思っていた。

「う、受けるだけなら…」

「真人…！」

佐花は叫ぶ。

「何も知らないのに勝手に乗せられちゃだめよ！あなただって検査とか曖昧な言い方で真人を惑わさないで！」

「やれやれ参ったなあ…そうだね。惑わすって言い方は気に入らないけれど、まあ、君にとっちゃ似たようなことか」

真人から距離を置いた男。佐花はそれを見て少しながら安心する。

「うん…じゃあ具体的なことを言っちゃえばいいんだよね」

男は胸から名刺を取り出す。

「僕はこういうところで働いているよ。名前は神原相模。よかったら見てよ」

と、真人にそれを渡す。真人は丁寧にそれを受け取り見つめる。

「絶対生存機構？」

「そう。仮ではあるけどね。名前は無いよりはある方がましだ」

「これだけじゃわからないんですが…」

「うん、説明しとくよ。納得してくれない人がいるんでね」

と、一瞬だけ佐花に目をやる。

「人類が生き残るための研究をしている施設さ」

「生き残る？」

「ほら、わかるだろ？今のままじゃ人間なんてこの代を最後に途絶えてしまうんだよ。そう、君たちぐらいの子が最後に、ね」

男の言っていることは現在日本に蔓延している奇病のことだ。そのことぐらいは真人にも理解できたし、そういう施設が出来るのは当たり前だと思っていた。

「だからさあ、若い君たちの力が特に必要になっってくるんだよ。なんで？って思うでしょ？そこからが適性の話だ」

男はまくしたてるように話し始める。

「まあ、僕達のお仕事を結果的に言うとな、人工的に子供を生み出す力を植え付けることなんだよ。つまりその力を失った、もしくはもともと持っていなかった女性に協力してもらわなければいけない。それにはどうしても若い女性の方がやっぱりいいんだよ。体力面とか、耐久面とかがね。まあ、やってることはそれだけってわけじゃないんだけど、これが今一番急いでいることかな？他にも一般人向けの医療品を作ったりもするよ？ようするに開発局ってことだよ。丸めて言えばバイオ技術かな？」

「んーえつと…」

「無駄なことを話しすぎちゃったかな？でもこれぐらい言わないとうるさいでしょ？なんならもう少し詳しく言っても…そうだ！佐花美咲について教え——」

「やめて！……！」

男が陽気に話し掛けるのに対し、佐花はそれを消し去るような金切り声で叫んだ。

「あらら、マジで怒こらないでよ。ジョーク、ジョーク。あんまり堅くなっても仕方ないよ？今は現実を目を向けなきゃいけないんだら。そんで、今一番直面してるのはこの子。君の意見なんて聞かないから」

「私はその子の保護者よ！その子を守る権利があるわ」

「じゃあ、いわば僕達も君の保護者じゃないか」

「あんたなんかには保護者ヅラされたくないわ！あくまで他人よ！」

「ひどいなあ、10年もの付き合いだったのに。それにそれを言ったらこの子だって他人でしょ？しかも期間で言ったら出会って一ヶ月ぐらいじゃないの？なんでそこまで執着するんだか…」

男はやれやれと首を振った。その表情はどこか柔らかいものがあったが、温かみと言えるものは一切感じられない。

「まあいいよ…友達を作ることは善いことだからね。あ、違った。保護者気取ってるってことは家族かな？娘？妹？設定は考えてた方がいいよ？その方がおもしろいからさ」

「あの…」

「あああごめん。佐花美咲はちょっとばかり性格に難があるよね。話が拗れやすくて困っちゃうよ。今は君と話したいんだよ、僕だって」

話を長くしたのはこの男だろうと思いつながらも真人はそれをぐつと飲み込んだ。

「ま、とにかく。適性判断だけでも検査を受けてくれないかな？最悪僕達としてはサンプルが採れるだけでいいし」

「サンプル？」

「ああ、血とか、毛髪とかね。本人に害がないレベルのものだよ」

「採ってどうするんですか？」

「ん？…ん…あ…」

男は口を潜もらせる。真人も流石に警戒心を持つ。

「言えないんですか？」

「んーそうだね。やっぱり全部は言えないよ。協力してもらわない限りはね」

「…」

真人はそこで考える。何に協力しようとしてるのかを。

男は言った。人類に貢献する、子供を生み出す力を植え付けると。それは誰かにそういう力を植え付けることだと解釈したが、それと同時に適性は若い女性がいいと言っていた。

つまりそれは…

「もしかして、ですが聞いていいですか？」

「ん？なんでもどうぞ。答えられる範囲なら全部回答するから」

「その協力するのって…私自身にその力を植え付けるってことなんですか？」

「もちろん」

「もし、成功した場合は…」

真人は恐る恐る男に聞いた。いや、もうわかっているのだ。佐花があれほど慌てていたではないか。

「そりゃ子供を…いや、子孫を残してもらうよ。人類のためにね」

「だ、だったら嫌です…！」

「あれ？わかってて最後まで聞いたんじゃないの？」

「違います！とにかく、そんな話なら検査もしません」

「えっ！？なんでさ！！最悪そこまでは求めないし、サンプルだけでいいって…」

「嫌です！」

もし、検査をしてしまったら…わかってしまうであろう。自分には植え付ける必要がないことが。そうすればその行程を飛ばした挙げ句、物珍しさにより別の実験までされかねないだろう。サンプルどころの話ではなくなってしまう。

真人はそれに気づき、必死で拒否反応を示す。

「なるほどね…どうしても嫌？」

「はい」

「却下」

「えっ？」

途端、男の目付きが変わった。鋭く、冷たいものに。

「葛城、真島、車に連れて行って」

男がそういつといきなり研究員らしき男が二人、玄関から入ってきた。

「えっ、なに？」

「悪いけど、丁重に招待させていただくよ」

「な、無理矢理ですか！！」

「君がただイエスって言うてくれたらそりゃ早かったさ。でもね、土壇場で拒否するんだもん」

葛城と真島と呼ばれた男たちは真人の両腕を掴む。

「ちよっ…そりゃそうですよ！子供を産むなんてそんな…」

「なにを言ってるんだい？子供を産むことは女性としての一番の喜びだよ？それに…否応なしにでもしなくちゃ、もう後がないんだよ」

「でも、もし適性がなかったらどうするんですか！！とんだ無駄足ですよ？私みたいな一市民に構ってるぐらいならもつと…」

「ああ…」

男は真人を見つめ、次第に口角を歪めだす。

「君、適性とか関係ないでしょ？だって…もう備わってるじゃないか」

「え…なんでそれを…」

「なんでって…ふふふっ…はははははは…！！」

男はもう堪えられず大きく背を曲げながら笑いだした。

「君、結構間抜けだね！僕がここに何をしに来たと思ってるんだい？」

「な、なにつて…さ、佐花の検査とかを…」

「そう。佐花美咲の検査が目的さ。さて、ではその検査とは一体なんでしょうか？」

「…わかりません」

「正解は生活環境の検査、でした」

「へ？それはどういう…」

「言ったでしょ？ここは僕達が彼女に与えた場所だって」

「う、うん」

「もちろん中の備品もさ」

「…そうかも知れないですけど。それがなんなんですか？」

「僕たちはね、佐花美咲が何一つ不自由のない生活を送るために様々なものを提供しているんだよ。つまりだね、定期的に体調管理と備品の検査をするんだよ。つまりわかるかな？」

「…だから？」

「生理用ナプキンが一つ消費されているね」

「あつ…」

それは間違いなく真人が使った分のものであるう。しかし、なぜそんなことまでこの男にわかるのが気掛かりで仕方がなかった。

「いつ調べたと思う？残念だけど教えてあげない」

「だけどそれが生理のために使ったとは…それに私が使ったともわからないじゃないですか」

「確かにそうだね。使い道はあれこれあるかもしれないね。でもさ、こんなこと言われたら引くかもしれないけど…」

「なんですか？」

「経血に塗れた下着が見つかったしね。それに誰が使ったかなんて今君にジャージを脱いでもらえば一目了然なんじゃない？」

「な！！へ、変態ですか！！何を見てるんですか！！」

「そうだね、変態だろうね…でもさ…」

男は真人に近付きポンと頭に手を置いて言う。

「ちょっとぐらいおかしくならないとさ、こんな世の中生きていけないわけないでしょ」

「う…」

そうなのだ。実際今の日本は恐ろしいくらいに狂ってきている。犯罪の件数は二十年前の十倍になっているし、現実から逃避するために薬に手を染めるものだって少なくない。そんな狂った世の中で生きていくには自分自身も狂ってしまう方が楽ではあるのだ。

「そりゃこんな世の中に振り回されなくて真面目を貫く人もいていいよ。中途半端な正義感ほど気持ちのいいものはないだろうからね。だいたいそれ自体が現実逃避なんだから。でもそれじゃあ生きていけない。個人じゃないよ、人類がね。だから一人ぐらいが汚れ役を勝手出なくちゃいけないんだよ」

「それがあなたたちだと言うんですか？」

「そう、そして君もね。集団で生活する上で一番必要なのはバランスなんだよ。それを保つためには悪役が必要。わかりやすく言えば反面教師ってやつだね」

「わかりませんよそんなの……」

「わからなくていいよ、僕たちが勝手に進めていくから。ほら、連れていくからしっかり立って」

「……」

なすすべもなくゆっくりと立ち上がる真人。

「待つて！！だめよ！！連れて行かないで！！」

佐花は真島に飛びつく。だがいとも簡単にその手は払いのけられて

しまう。何度も何度も佐花は繰り返す。だが、腰の抜けているような状態ではここまで体格のいい男を止められるわけもなく、やがて動けなくなってしまう。

「ああ、惨めだよ佐花美咲。諦めなよ、別に悪用するんじゃないんだからさ」

「関係ないわ！真人は嫌がっているもの！私が…私が守らないと…」
必死で体制を立て直そうとする佐花。ぷるぷると震えながらも腕の力だけで体を支え、真島に再びしがみつく。

「…なるほどね。佐花美咲の考えていることはわかったよ。要するに何かに縋りついていたいんだね」

「なにをいって…」

「だってそうでしょ？君はずっと一人だった。そして何もかも勝手に進められていく孤独感、に縛られていた。そこで一人の少女に出くわす。自分よりも格下と思える少女に…」

「黙って！…！」

「だってそうだろ？赤の他人を保護者気どりになって匿うなんて正気の沙汰じゃないよ。君はね、この少女に縋りついて自分の劣等感を隠そうとしたんだ」

「黙れ！…！」

「…」

「何も…言わないで…」

佐花は、もう動けなくなっていた。男に自分の汚い所を真人の前でさらされてしまったからだ。本人が本当にそう考えていたかは定かではなかったが、どこにも否定できる要素はなかったのだ。

しがみ付いていた腕には、もう力は残っていなかった。

「行くよ、あ、佐花美咲、検査はきちんと受けてよね」

「佐花…」

「あのね、君は自分の心配をしていたほうがいいよ。なんせ新しい生活が始まるんだから」

「…佐花………さようなら、いままでごめんなさい」

佐花の前からは、もう真人はいなくなってしまった。

「な、なんで…私の大事なものばかり奪っていくの…なんで…」

「佐花さん…大丈夫ですか？」

今まで蚊帳の外だったスーツの男が慰める。

「なんで！あなたたちは止めなかったのよ！！あなただつて真人に興味があつたんでしょ？連れていかれたら意味ないじゃない！」

「無理です。彼らを止めることなんて…それはあなたが一番わかっ

ていたことでしょうか？だから逃げることを選んでいたのではないですか？」

「そんなの……わかってたわよ……でも……もう一人になりたくない……
真人……」

佐花は——流れる涙を止めることができなかった。

EP21 人間を幸せにすること（前書き）

遅ればせながらも更新です。

EP 21 人間を幸せにすること

「ここは…」

真人は目を見張るほどの景色に驚いていた。真人は見下ろす、自らの住んでいた街を。今真人がいるのは高層ビルの最上階だ。

「ここが今日から君の家だよ。そして、彼が君のお目付け役…とでも言っておこうか。なに、言葉の意味は特にないよ。じい、とでも呼んでおけばいい。呼び名が無いのは不便だからね」

神原は一人の中年男性を招き入れる。細身で、いかにも目付け役と呼ぶのがふさわしい出で立ちであった。しかし表情にはどこか疲れのようなものが見られた。

「…名前はなんですか？」

「おや？ずいぶん積極的だね。来る途中はあれだけ騒いでいたのに」

「うるさいです。ただ、じいなんて呼び方は慣れないからですよ」

「慣れればいいじゃないか」

「無理です」

「やれやれ、なら自分で聞けば？本人にさ。んじゃ、僕は仕事があるんで…」

神原は部屋から出て行った。残されたのは、目付け役の男と真人だ

けだ。

真人はため息をつきながらも男に話しかける。

「あの…名前、なんて言うんですか？その、呼び方に困るので」

「…榊御影でございます、お嬢様」

「うわ…すごい名前ですね…ってお嬢様！？」

「はい、神原様にはそう呼ぶようにとおっしゃられていましたので」

真人は神原に軽い殺意を抱きながらも冷静に榊との会話を続ける。

「えっと…榊さんでいいですかね。あのですね、お嬢様はやめてくれませんか？」

「…確かにこのような呼ばれ方は慣れていらっしやらないことかと存じますが、あなたの今の状況を鑑みていただければ必然的に…」

「いや、違うんです。そういう話ではないです。あの、私…いや、俺は男なのでお嬢様はちよっと…」

「…!!？」

真人の発言にさすがに驚く榊。

「そのような愛らしいお姿でお坊ちゃまでいらっしやいましたか。いやはや、これはとんだご無礼を…ワタクシ、確認もせずただお姿だけで判別を…」

「あ、いや、その…身体は女だから間違っではなくて…あの…ああ、もういいや。なんだかめんどくさくなってきたな」

真人は榊に近づく。

「あの…少し話をしませんか？」

「話…ですか？それはもちろん構いません。ワタクシはあなた様の召使でございますから。あなた様の望むことでございましたらなんでも」

「…堅い言い方を直して…って言うのは無理そうだからいいか。…えっと、榊さん。俺の名前は東雲真人って言います」

「ええ、しかと存じ上げております」

「…逆に何を知らないんですか？」

「他のことは何も聞いておりません。ただ、真人様のお世話をするようにとだけ言われておりますので」

「ってことはあの人に雇われてるだけってことですか？」

「いえ、それは違います。もともとから私はこのグループにいますので。彼はまだ新しい人です」

「じゃあ、あの人はリーダーじゃないの？」

「はい、そうです」

「榊さんは俺がここでどういう仕事をするか知ってるんですか？」

「はい。それはもちろんのこと…だったつもりでしたが、あなた様が男となれば少しわかりかねます」

「あ、いや、だから身体は女だって…」

「？」

イマイチ理解しえないのか小首を傾げる榊。

説明不足だったかと真人は少々気を落とすが、なにも知らないとは言ったこの男がまさか仕事内容を知っていることに驚いていた。

そこはさすがにこのグループの一員である所以だったのだろう。さすがに神原よりは長くいるように思えるし、それならば知ってても不思議ではないのかもしれない。

「あ…とにかく身体は女です。でも気持ちは男です。だからお嬢様とかはやめてください」

「…そうでしたか。これは失敬を…」

とくに動揺する様子もなく腰を曲げた榊。女の身体であるならばここにすることが当たり前だとわかっているのだ。ここでは、男が連れてこられる方がおかしい。長年ここで同じことをしているからそう判断したのだ。

だが、いくらそうだったとしても、女の姿で男などという真人に対

し、まったく不思議がらないのは、この男には偏見というものが無いのだろう。だから先ほども性別を間違ったと思いますぐさま謝ったのだ。

「榊さんっていつもこういう仕事をしてるんですか？」

「こういう仕事とは？」

「えっと…ここに連れてこられた人のお世話とかです」

「はい。そうですね。かれこれ20年はやってますでしょうか」

「そんなに？ってことはそのころからこのグループはあったってことですか？」

「はい。私は最初からいるメンバーの一人でしたので。もともとは少し違うことをしていましたが。そのころに出来たものです」

「なるほど…あれ？でもそれっておかしくないですか？」

「なにがでしょうか？」

「このグループが出来たのが20年前なんですよね？でもこれが出来た理由の異状が始まったのも20年前じゃありませんでしたっけ」

真人が言いたかったことはこうだ。20年前に異状の初例が出たと言われているのに、それに対応して組織が作られるには早すぎではないのかと言うことである。いくら今までにない異状だったとしても本の数年で人類を脅かすほどになるとは容易に考えつかないのが普通であろう。

「ああ…そういうことでしたか。簡単な話でございます。それよりも前から嘆かれていたことだったただけなのですから」

「つてことはテレビとかの報道は嘘だつてこと？」

「いや、そういうわけではございません。マスコミがメディアに流せた情報がそれまでだったということです」

「なんでですか？」

「おそらく国家機関の力でしよう。混乱を防ぐために情報操作をしたのではないかと。しかし、我々はその国家機関よりも早く知りえたので対策を練っていくことができたのでございます」

「つてことは、このグループって国が立ち上げたんじゃないんですか？」

「はい、完全に個人的な組織でございます」

そんなわけもわからないところに連れてこられたのかと、真人はようやく自覚し始めた。

——じゃあ俺は完全に誘拐されただけじゃん…

「それよりもおじ…真人様。お腹の方は空いてございませんか？」

「あつ、そつえば…」

真人はしばらく何も食べていなかった。しかしどうだろう、ほとん

ど腹が減るような感覚はないのだ。

どうやら普通の人よりも少しだけ腹は減りにくくなっているようだ。しかし、さすがに何も食べないのも不味い。

「えっと…じゃあなにか用意してくれるんですか？」

「はい、ただちに。少しだけお時間が空きますのでシャワーでも浴びてはいかがでしょうか？」

「じゃあ…そうさせていただきます」

気が付けばもう夜だ。本当はシャワーを浴びてそこまで時間は経っていないが、なにもすることはなかったので言われた通りに従うだけであった。

「準備は整いましたでしょうか？」

「あ、はい。これでいいんですか？」

真人は純白のワンピースに身を包み軽く裾を持ち上げる。髪の色も溶け合って、それはどこからどうみても天使のようであった。

「あの、これから何をしに行くんですか？」

日付は変わり、時刻は午前9時。車の中で揺られ真人はある場所へと連れていかれていた。

「すでにお察しのことかと存じますが、いわゆる真人様のお仕事場へと向かっております」

「それって実験ですか？」

神原はサンプルがどうか言っていた。おそらく自分も何かしらの実験を受けるのだらうと真人は緊張していた。

「確かに実験のようなことかもしれませんが…それは言うならば研究ですね。あくまで血液を採ったりするぐらいのことしかしませんので、そちらの方で真人様が疲れるようなことはございません」

「そうですか…よかった」

「ただ、今から向かっておりますのはそれとは違うお仕事でございます」

「えっ？なんですか？」

少し不安になりつつも真人は問う。だが実験のようなもの以外で恐ろしいものなどはないだろうと楽観視していた。

「…パートナー選びでございます」

「パートナー？」

「…着きました。車からおりました」

二人は車から降りた。そして真人は促されるまま榊についていく。連れてこられたのは大きな建物だ、その関係者専用入り口から入っていく。少しだけ進み、待合室のような場所で真人は待機させられ榊はどこかへと消えていった。

「…パートナーってなんだろう」

真人はここまで連れてこられた理由をすっかり忘れていた。神原が実験だの検査だの言っていた所為で完全にそっちに気が行ってしまったのだ。

考えているうちに榊が戻ってくる。

「面会の準備が整いました。どうぞこちらへ」

言われるがままに廊下を歩いてゆく。その道の中で真人はもう一度榊に聞いた。

「榊さん。これから俺はなにをさせられるんですか？パートナー選びって一体…」

「真人様。あなた様は今人類ただ一人、お子様を産むことのできるお人です。これがどういいうことかわかりますでしょうか」

「…とっても貴重ってことですか？」

「それもそうですが、現時点で我々が危惧すべきことはなんだと思われます？」

「それは…わかりません」

少し考えたがなにもわからない真人に嫌な顔一つせず、柔和な口調で榊は続ける。

「それはですね、真人様がそれを失ってしまうことです。わかりますか？ そうなってしまうえば誰もお子様を産むことが出来なくなってしまうのですから」

「なるほど…それで？」

「まだお分りになれませんか？ ですから真人様が今からしなければいけないことは一つです。…とにかくお子様を産んでいただくことでございます」

「なるほど…ってえっ…！」

「着きました、この先が面会の間となっております。真人様は…これからあなた様とお子様を作る、パートナーをお選びいただきます」

「パートナーってそういう…」

「では、開きます」

面会の間への扉が開く。そこに見えるのは、椅子が一つ。そこは大きく広く開けた空間で、椅子のある周りは部屋全体の中で比較的高めの位置にあるようだ。

「どうぞ」

真人は椅子まで歩いてゆく。そして一步一步進むたびに沸き上がる

声。少しそれにびくつきながらもなんとか椅子に座りようやく周りを見渡す。

見えるのは自分よりも低い位置にいる…おびただしい数の男。

「一万人の日本人男性です。真人様はの中からお選びいただけます。ご安心ください。別に今日で決めていただくわけではございませんので」

男たちの視線はすべて真人へと集まる。それはそうだ、この男たちは真人にしか希望を託すことができないのだから。

「慎重にお選びください。真人様のパートナーになりえる男を。これが、私達人類のためなのでございます。私達人類の希望は…真人様だけが握っておられるのですから」

真人は自らの使命を思い出す。

——これが人間を幸せにするということなのか？

一部完

EP21 人間を幸せにすること（後書き）

ここで一区切り。序章の完結です。ここまででも本当に長かった…
これでおよそ三分の一ぐらいということになるのですかね？
やっとプロローグに繋がることができました。

とりあえずの序章なのですが、いかがでしょうか？稚拙な文章でわかりにくいところばかりでしたかも知れませんが、よろしければここまでの感想なんかをいただければ幸いです。

解説その一（前書き）

自分の考えてることをまとめました。

とりあえずこの話の世界観とかがわかっていただけかと。

中途半端ではありますが、内容を理解していくためのものだと思う
てください。

解説その一

Angelworks

――舞台

全国に広がる異常により、終わりを迎えようとしている日本。

――異常

女性の持つ生殖機能が失われてしまう症状を言う。卵子が作られなくなる、子宮内膜の排出がない。しかし、月経周期に関係のあるホルモン分泌は変わらない。原因がはっきりしないため異常と呼ばれる。

――社会

異常が原因での女性の地位低下。外国からの交流拒絶により、実質上鎖国状態。未来が見えない国民達の暴走。各地で犯罪が多発する。

――犯罪

現段階の日本では二大事件と言われる犯罪がある。一つは連続大量殺人事件。もう一つは連続誘拐事件。双方とも詳細一切不明。

――組織

混乱の渦に巻き込まれた日本を支配しようといくつかの組織、団体が形成されていく。

――最後の一人

日本で最後の生殖機能を持った女性。いなくなってしまったのだがまた新しく誕生した。天使、東雲真人がそれにあたる。

――登場人物

シノノメマコト

東雲真人

罪悪感により自ら命を絶ったのち、天使として蘇る。代わりに天から授けられた三つの銘を守らなければならない。

アカツキレイ

暁零

真人の幼なじみ。真人を死に追いやった張本人でもある。連続殺人事件の容疑者となっている。

サハナミサキ

佐花美咲

路地裏で倒れていた真人を匿った女。過去に絶対生存機構に属していた。

黒スーツの男

謎の多い男。真人を誘拐しようとしていた。常にサングラスをかけているため顔が見えない。

笠原アリサ（カサハラアリサ）黒スーツの男の仲間。男のことをボスと呼び慕っている。医師であるが免許を剥奪された身。

警察の男

連続殺人事件の捜査にあたっている。真人の過去を少なからず知っている。

カンバラサガミ

神原相模

絶対生存機構の一員。技術分野で組織を支える。性格がひねくれている。

サカキミカデ
榊御影

絶対生存機構で真人のサポートをする中年の男。温厚な性格。組織の初期からの一員。

―これから

絶対生存機構の一員となった真人は、自分と子供を作る相手を選ばなければいけないことになる。人間を幸せにするという使命に直結する行為ではあるものの、なかなかそうは出来ない。

元男であつたゆえに、男と交わるということは想像もしたくないことであつた。そんなことも知らない榊は大量の男たちを毎日連れてくる。真人はそれから一人も選ばず、ただ、時間を持て余すことしか出来なかつた。

EP22 小さな戦意（前書き）

二部になります。

とくに大きくは変わりませんが。

EP22 小さな戦意

「ったく、また被害者が出やがった！これで何人目だ？数えるのも億劫になる！」

男は苛立ちを隠せず思いのままを吐き出す。周りの人間も同じことを考えており、部屋の中には不穏な空気がただよっていた。

そんな空気の中、一人の若い男が苛立つ男にそろそろと近寄る。

「蔭山さん、今回で老若男女合わせて659人だそうです」

「659人だ？どういうことだ！被害者は増え続ける一方じゃないか！俺たちは一体なにをしているんだ！？畜生！！」

手に持っていた書類らしきものをだいたんに床に投げ捨てる。バラバラに散った書類をやれやれと見下ろしながらも、誰も何も言いはしなかった。そこにいる全員が男の心境は痛いほどにわかっていたからだ。

「くっ…特別捜査本部を立ち上げたものの、こんなもの形だけにしかならんじゃないか！ヤツはまだ都内に潜伏しているはずなのになぜ捕まらん！」

「やはり餌で釣るしかないんですかね？」

若い男は言った。

「新聞、お前本当にそんなこと思ってるのか？相手は無差別、場所

も選ばん。そんなので何を餌に釣るっていうんだ？金か？釣り竿に札束を吊るしてもう殺人なんて止めてくださいなんて言うのか！！」

「わわ、僕が悪かったす！！っていうか何言ってるか無茶苦茶ですよ！落ち着いてください！」

「ちっ！！」

バンッ。

蔭山と呼ばれていた男は机を人殴りし暫し黙りこむ。

「…わかっている、確かにそうだ。こんなのいつもの私じゃないな。すまん、熱くなりすぎた」

蔭山は部下たちに向かい深く頭を下げた。

「わわ！やめてくださいよ、そんなの！僕たちの捜査が不甲斐ないだけですから！それに蔭山さんは一番頑張ってくれていますから！」

新開はすかさずフォローに入る。大人しい性格なのであまりこういう雰囲気は好まないのだ。

「…それもそうだ。たたく、もう少しずば抜けた人材がいれば…」

「はは…そうすね」

結局自分は詰られるのかと思いつながらもこの場が落ち着いたことに一息ついた新開だった。

「…そういえば、今日は新しいメンバーが捜査本部に加わるとか言っていたな」

思い出したように蔭山は言う。最近の仕事疲れの所為か、すっかり忘れていたようだ。胸ポケットから手帳を取り出しなにやら確認し出す。

「…なんだ、もう時間じゃないか。古坂、お前が連れて来るんじゃないかったのか？」

蔭山は古坂と呼ばれる眼鏡をかけた男に問う。古坂は蔭山を見て軽く肩を竦める。

「蔭山さん、もうすでに連れてきてますよ。あなたの所為で紹介するタイミングを逃してたんですからね？帰ってくるなりイライラしてるんですからまったく…」

「うつ…ま、すまなかったと言ってるだろう。で、新メンバーは？」

蔭山は古坂の周りを見る、が見慣れたメンツ以外にだれもいるようには見えない。だがよく目を凝らせば古坂の後ろに一つ影が見えるではないか。

「古坂、お前の後ろのがそうか？」

「あ、はい。そうですよ。ずっとタイミングを待っていてくれました。では、前に出てもらえますか？」

古坂は優しくエスコートする。そうだ、新メンバーというのは――

「なんだ、女か」

古坂の身長が180なのに対し、その新メンバーはあまりに低く、160もないだろう。前線に立って捜査に加わる一員としては頼りなく見えても仕方ない。制服は着こなせてはいるが、まだ初々しさの抜けない若さが目立っていた。

「もう少しましな奴はいなかったのか？ たく、上は一体何を考えて……」

「蔭山さん!!」

大きく名前を呼びもう一步前に出る女。

「私はこの特別捜査本部に所属させていただくことになりとても光栄です。このチームに恥じないよう精一杯頑張らせてもらう次第であります」

「そうは言ってもねえ、君、かなり若いでしょ？ ここがどんなところかわかって来たのか？」

「はい、もちろんです。あの凶悪な連続殺人犯を牢に閉じ込めるべくここにやって参りました」

「だから、そんなの相手して命落としても知らないって言ってんだ。その覚悟があんのか？」

その言葉にもう一步前へと進む女。

「あります。命など、今さら惜しいなどとは言いません。私は、命

を懸けてでも奴を捕らえて見せます」

意気込んで言っているが、蔭山にとってはそれこそが心配だった。ただ、衝動的に怒りに身を任せて行動してしまうかもしれないからだ。情熱だけで動く人間が一番危ないことを蔭山は知っている。

蔭山としては一人でも犠牲を出したくない、それは仲間からもだ。命を懸けてなどという言葉は軽率極まりないものなのだ。

「…なぜそこまでして奴を捕らえたがる？」

「それは…皆さんと同じです。あんな奴にこの街の平和を奪われたくないからです」

「それはちよつとばかりおかしいな。なぜならこの街はもとと平和なんてものはないからだ。そんな切って貼っただけのセリフが通ると思うなよ」

女は一步たじろぐと直ぐ様もちなおし、背筋をピンと張る。

「あ、兄の…兄の敵を取るためです！」

蔭山はやれやれと首を振る。実は今月に入って身内の敵が取りたいとここに来た人間は何人もいるのだ。ましてや、この女は新人と言ってもプロだ。そんな人間が感情的な理由でここに来られても困る。

「残念ながら新人ちゃん、そんな理由なら帰って…」

「兄は、殺人犯の友人でした」

蔭山は目を見開く。

「兄は…とても真面目な人間だったのに奴の所為で暗い道へと引きずり込まれてしまいました。今も行方不明のままで、ひよっとしたら…」

女は唇を噛みしめ、ぎゅっと手を握り締める。

そんな女を見て蔭山は気が変わったのか質問をする。

「おい、あんた、名前は…」

「東雲…東雲真宙です」

「…ほう」

蔭山は笑う。まさかこんな展開になるとは思ってもいなかったからだ。

「上の連中め…面白いもんを送ってきたじゃあないか。そろそろということか？」

「…あの」

「…よし、いいだろう。お前をこのチームに迎え入れる」

「あ、ありがとうございます…！」

「ただし、これだけは守れ」

「な、なんですか？」

蔭山は自分の席から離れ、真宙の前に立つ。ある程度の威圧を込めながら口を開く。

「俺たちがやってることは、人々を守ることだ。一じゃなくて、全てだ。何が一番優先すべきことなのかを見誤るな」

「…はい」

「よし」

蔭山は元の席へと帰る。だが、実際のところは真宙の返事に納得はしてないのだ。

——まだ、監視が必要だな。こいつは土壇場になれば何をするかわからんタイプだ。

遠くを見つめながら思う蔭山。

「…蔭山さん」

新開がそろりと近づき耳打ちする。

「いいんすか？あんないかにも新米な娘を…」

「…いいかどうかはわからん。だが…あれを使えば確実に何かは変わるはずだ」

「…そうすか。蔭山さんが言うなら何でも従うす」

「…ありがとう」

連続殺人犯特別捜査本部に新たに加わった東雲真宙。その存在だけで確かに場の空気は変わっていた。

もうすでに彼らは戦いはじめたのだ。連続殺人犯逮捕に向けて。

だが、一人だけ、東雲真宙は彼らとは違うことを考えていた。彼女が思っているのは殺人犯のことなどではなく。

——お兄ちゃん…

ただ、一人の家族のことであつた。

EP23 消えた跡（前書き）

別にこっちサイドの話だけってわけではありませんが、回数は増えてきます。

視野というか、展開される範囲をひろげていきたいです。

EP23 消えた跡

「…蔭山さん」

「なんだ」

ひそひそと話しかけてきた真宙に対し、蔭山は無愛想に返す。

「こんなところ歩いてなにがあるっていつんですか？」

「何も無いから歩くんだよ」

「はい？」

真宙は冗談を言われたと思い少し不機嫌になる。

「あの、私真剣に聞いて…」

「いいか、今は真っ昼間だが…これが夜になるとどうなる？」

言葉をさえぎられさらに不機嫌になる。しかも問われた意味すらわからない。

「馬鹿にしてるんですか？そりゃ…物騒になるとか」

「そうだよ、物騒になる。だから今歩くんだ」

「…意味がわかりません」

「ここはな、三年前に奴が十八歳の高校男子を殺害した場所なんだ」

「へえ…と、いうことはここに犯人の手がかりがあるということですか？」

「いや、違う」

あっさりと違うと言われ半ば諦め気味になる。もはや何を言っても否定されそうだ。

「だいたい三年も前にいた場所に犯人の手がかりなんて残ってるわけがないだろう。仮に残ってたとしても奴は移動してるから何の意味もない。それに犯人自体は割れてるんだからそういうことを調べても意味がないんだよ」

「じゃあ、なんでここを通るんですか？」

素直に質問をする真宙。

「そりゃ…安全だからだよ」

「安全？」

「ああ。奴は神出鬼没。それに俺たちの姿を見たら真っ先に飛び込んでくるだろう。だから、今安全だとわかってるここを通るんだ」

「なんで安全だってわかるんですか？それに通りたい理由にはなっていないような気がしますけど？」

当たり前の質問が返ってきた、と蔭山はにやりと笑う。わざとらし

くすぐには答えを言わないのだ。そういう性分なのか、はたまた考えがあつてのことか。

「まあ、安全だつてわかるのは奴がここより遠くで昨日殺人を犯してるからだよ。距離的にここに近いはずはないってことだな」

「だ、だめじゃないですか！むしろ今はそっちに向かって犯人の手がかりを探すほうが先決なんじゃないですか？」

真剣に真宙は言うものの、蔭山は半笑いのような表情で返す。

「だから、犯人の近くにはなるべく行きたくないんだつて。行くのはある程度作戦がある時だけだ。とにかく今は、あんたに見せたいもんがあるからここに来たんだよ。それならなるべく安全な時に来たほうが良いに決まつてるだろう」

「なんだ…それならそうと最初から言つてください」

「ははは…まあ、なんでもいいじゃないか」

真宙は蔭山の態度に呆れ返っていた。しかも犯人からは逃げているといった始末。本当に自分の目的は果たせるのだろうか。

「おつと…ここらだな」

蔭山は歩みを止める。それに伴い真宙も蔭山の少し後ろで静止する。

「…ここで殺人があつたんですか？」

「ああ、そうだ。しかしまあ…殺人があつたこと自体はそんなたい

したことじゃあない」

殺人がたいしたことじゃないなど警察としてはあるまじき発言だが、今の社会においては仕方ないとも思えてしまう。殺人がないなど余程田舎な場所ぐらいだ。

「ここで起きた殺人…まあ、暁が殺しをしたときにだなあ…一人付き添いがいたってことがわかってんだ」

「付き添い？仲間がいるってことですか？そうだったらかなりやつかいな…」

「いや、まあ…確かにいろいろとやつかいではあるが…今あんたに知って欲しいことがひとつだけある」

「なんですか」

蔭山は真宙の方を見ずに答える。

「その付き添いってのが、お前の兄貴…まあ、東雲真人だ」

「…別にそれだからどうしたんですか？今さらそのぐらいでは驚きませんよ」

真宙は鼻を鳴らす。蔭山は視線を少しだけ真宙に向け、哀しみに満ちた表情を見せた。

「…だろうな。だが…当時、現場にはその東雲真人の大量の血痕が残されていた。と、言ったらどうする？」

「えっ…」

真宙はぽかんとして蔭山を見た。

「今は綺麗になっちまってるが…その時ここは殺害された少年の血と、東雲真人の血で満たされてたんだよ」

「そ、そんな…」

このことからわかることはひとつ。兄は良くて重症、悪くて…考えるのが嫌になった真宙は顔を歪める。

「だが、死体は殺害された少年のものだけだった。おそらくは暁が回収したんだろう」

「蔭山さん！その言い方だとまるで兄は殺されたみたいじゃないですか！」

「別に回収したからといって死体をととは言っていないだろう？殺された少年との衝突のなかで怪我を負っただけなのかもしれんからなあ。それを手当てするために暁が回収したってこった」

「それだと、暁の殺人に加担したみたいな言い方ですよ！」

「ああ、そうだ。俺はそう言ってる」

さすがに真宙は顔を真っ赤に染める。自分の兄を実の妹の前で平気で殺人犯扱いをしたからだ。

「蔭山さん！いくらあなたでも言っていていいことと悪いことがありますま

すよ！兄は被害者です！」

「あんなな…自分がどんな仕事をしなくちゃいけないか自覚してるか？」

蔭山は真宙に近づき彼女の頭を右手で掴む。威圧感に震えながらも真宙は目線をそらさない。

「私情を仕事に持ち込むな。俺たちが守るのは人々だ。あんたの兄貴一人じゃない。それに犯人の共犯である可能性が一番高い奴なんだ。今はそいつを守るよりも捕らえるのが俺たちがすべきことだ。いいか、もしもお前の兄貴も犯人だったとしても、しなければいけないことはひとつだ」

「しかし、そんなこと言われても兄は人を殺すのを手伝ったりできるわけありませんし、それに耐えられるはずがありません。だいたい証拠もないのにただ、幼なじみであっただけで兄を犯人だなんて…」

やれやれ、と頭を掴んでいた手をゆっくりとひく。さすがに言い過ぎたか、と少し反省しながら蔭山は口を開く。

「…なににも幼なじみで親しかっただけで犯人だと決め付けてるわけじゃあない」

「えっ？」

真宙は落としていた視線を再び蔭山にむける。

「大量の血痕の原因はわかってるんだよ。完結的に言えば射殺だ」

「射殺…」

「ああ、しかもうちらから奪った銃のな」

当時のことを思い出してか、蔭山は苦い顔をしながら続ける。

「でだ、少年が殺された現場…要するにここにはそれが捨ててあったんだ」

「…」

「東雲真人を重要参考人として保護していたことがあったのは知っているな？そのときに、彼のあらゆるデータはある程度採らせてもらってるんだ」

「…まさか、その銃に兄さんの指紋が残されてた…なんてわけないですよね」

「…まあ、そういうことだ」

落ち崩れる。絶望に満ちた顔に生氣はなかった。

「そんな…兄さんが…なんで…いや、違う…そんなわけ…」

「まあ、それだけで特定は出来ないがな。ただ、暁が握らせただけでも知れんし、俺はただ、そういう事実があったことをこの場所知ってほしかっただけだ」

「…」

蔭山の言葉はほとんど聞こえていなかった。焦点は定まらず、地面を見つめているのか、そうでないのかすらわからない。

見兼ねた蔭山は帰るぞ。と一言放つ。

「こんなところにずっといたら気分悪くなるだろう？日が落ちない内に離れよう。今日は新人祝いでもしてやるから、ちよっと奢ってやる」

「…」

まだ落ち着いてはいないが、それでも手招きをする蔭山にふらふらとついていく真宙。

蔭山自身、ここまで落ち込まれるとは思わなかったため、事実を伝えたのは失敗だったかと若干後悔していた。

「…しかし、気にはなるんだな…まだ…」

――奪われた直後、マガジンに残された弾は二発と確認されている。しかし、見つかった銃には弾は残されていないかった。だが、あの事件があるまで銃殺されたという事件はなかったし、少年に弾痕はひとつしかなかった。あと一発は一体…おそらく弾がなくなつたから放棄したのは間違いないだろう。なら、間違いなく使ってはいるはずなんだ――

蔭山は去りゆく現場を後ろからついてくる新人越しに見る。

「…真人自身が…あの出血からしてその可能性は否定できないな」

一方で虚ろになってしまっている真宙は蔭山の視線などには到底気付かず、ただ見失いかけているなにかをひたすら反芻しているだけであつた。

EP24 知り得ないものが（前書き）

遅れました…かなり。天使の話はもうちょいですかね。

EP24 知り得ないものが

「宗教団体？」

「ええ、どうやらここいらで勝手にやってるみたいっす」

「ほう…」

「そこら中の塀や電柱に変なチラシをはり回るし、それを配ったりしてるっす」

「どんなやつだ？」

「これ…っす」

「…地上に舞い降りた天使…最後の存在…なんだこれは？」

「どうやらその天使とか言われている人…アレがまだ残ってるとか」

「はあ？」

「いや、ですから…ああ…あんまりすつと言えるようなことじゃないですけど…んん…ようするに、その天使さんは子供を産む力がまだあるらしいっす」

目の前にそびえ立つのは天を貫くほどの高層ビル。おそらくこのあたりでこれより高い建造物はない。

「ここに住んでいる…」と」

蔭山が直々に調査に来たのはただの好奇心からのものであった。特別警戒をしているわけではないし、連続殺人事件と関連性があるとも睨んでいない。

ただ、天使という胡散臭い存在をこの目で確かめたいがためなのだ。本当に子供を産むことが出来るかどうかなんてことには興味はなく、人々を引き付ける何かに蔭山は興味を持った。

蔭山の目の前にある建造物は調査によって割れた、天使が住んでいると言われている場所であった。

「確かに、こんなくそ高い場所には天使がお似合いかもな」

一人冗談を吐き捨て、その入り口へと近づく。

特に警備員などがいるわけではなく、ガラス張りの入り口には認証機器があるだけであった。蔭山はその装置の通話ボタンの押す。しばらくして男の声が蔭山を迎える。

「はい、こちら神原製薬です。ご用件は？」

「すみませんが、こちらの新商品の取材に伺いに来たのですが」

即刻正体をバラしたりはしない。無難に怪しまれないであろうマスコミを演じる。しかし、この場所が製薬会社と聞いていなかった蔭山はアドリブに無理があった。

「…アポイントメントは？そのような予定は来客スケジュールに入っていないが」

すぐに怪しまれてしまう。それでもなお侵入に試みる。

「いや、確かにお電話させていただいたはずです。…中で確認させていただけませんか？もしかしたらなんらかのミスなのかも知れませんし」

「いえ、それはありません」

機械から発せられる声ははつきりと言う。

「本社は全てのコールに録音機能を備えています。予定が入ればもう一度再生し、確認するのでミスはありえないです」

「いや、ですが…」

「近くに神山製薬がありましたよね？そこと勘違いされてらっしゃるのではないのでしょうか？とりあえず、こちらでは取材を許可することはできませんので、すみませんが…」

音声は切れた。失敗してしまったのだ。

「…つつ…抜かったな。休みの暇潰しに…と思って来たが…ちょっと」

とは探りを入れとくべきだったか」

頭を掻きながら恨めしそうにガラス扉を見つめる。

「しかし…エントランスにまで入れないってどんな会社だよ、ったく」

踵を返し、本部に戻って事件調査でも再開しようと思ったその時だった。

背後から自動ドアの開く音が聞こえる。

向こう側の気が変わったかと思い振り替える…それと同時に一迅の風が蔭山の横を通り過ぎていった。

それは…真っ黒の布で身体全体を覆い、そこからはみ出した真っ白な髪でコントラストされた、この場からは異様に浮いた存在だった。

「ガキか？」

身長は低く、どう見積もっても大人ではないことは明らかだ。そんな子供がこのビルから出てきたこと自体は怪訝に思ったが、すぐに走り去っていったため、蔭山の記憶にはほとんど残らなかった。

そもそもそれは蔭山としては調査対象物ではなかったため、気にする必要など端から感じられなかったのだ。

「…あれ、カーテンぽかったな」

ただ、覚えたのは、その少女の纏っていたのは光沢のある、シルク

のカーテンのようだったということだけだ。

「…すみません」

「ん？」

ガラス扉の方に振り替える。そこには少しくたびれた感じの男。スーツというよりは執事服のような服装であった。

「なんでしょう」

蔭山はやつと関係者が出てきたことをチャンスと思い、返事する。

「先ほど、こちらから変わったアクセサリーを付けた少女が走り去っていきませんでしたか？」

「アクセサリー？」

「…はい、羽のような…」

さっきの少女だろう、そう思ったが、ほとんど身体は隠されていたため、男の言うようなことにははっきりと答えられない。

どうしようか悩んだ末、とりあえずを伝える。

「少女…確かに入口から出ていきましたが…姿はほとんど覚えていません」

「ど、どちらに向かわれたかお分りになりますでしょうか？」

なぜここまでへり下った喋り方をするのかと、蔭山は多少苛立ちを覚えたが、貴重な人物なためその胸の内を抑える。

「…まっすぐ…この先の大通りの方に走っていったかと」

「そうですか！ありがとうございます！それでは失礼…」

「待ってください」

走り去ろうとする男を呼び止める。

「…」

蔭山は男の言っていたことを思い出し、一つ、質問を投げ掛ける。

「…あなたが追っているのは、ひょっとして…天使ですか？」

馬鹿なことを聞いた。蔭山は少しだけ後悔する。ただの噂に本気になっただけと。

第一これではただの痛々しい奴ではないか。

だが、蔭山の思っていたこととは裏腹に、男の表情は一変し、真剣なものとなる。

「…天使？面白いご冗談を」

男はそれだけ言うと柔らかな表情を見せ、一礼をした後、今度こそ去っていった。それを追うことを蔭山はしなかった。

「…羽のアクセサリ…それだけで天使とは多少安直だが…しかし彼らの内ではそういう呼び方で通しているのかもしれない…だが、あんなに小さな少女が…天使」

蔭山が教えた少女の方向はまったく違うものだ。まさか、これが功を成すとは蔭山自身思わなかった。今ならば、あの男よりも早く…

「…身体を隠すようにして逃げていたからなあ…こりゃ、ちいと話を聞いてみる価値はありそうだ」

蔭山は独り、笑顔を見せた。それは殺人事件の調査などでは絶対に見せなかった表情。今までにないぐらいに興奮しているのだ。

なぜ、そんな心境になるのか蔭山自身わからなかったが、おそらくそれは、少女を捜し出すことで何か面白いことがわかったと、警察官の勘が働いたからなのかもしれない。

「休みの暇潰し…にはちょうどいい」

蔭山は少女の走り去っていった方向へと走りだした。

EP25 天使との会合（前書き）

遅くなりましたが更新です。

ここ数日いろいろありましたが、個人個人の力を出し切り頑張っていきましょう。

EP25 天使との会合

「いた」

目当ては案外すぐに見付かった。3キロ程走ったところの公園。水飲み場でかぶるように水を飲んでいた。

「喉が乾いたんだろうか」

一瞬だけのんきなことを考えたが、すぐに少女に近づく。

気配に気付いたのだろうか、すばやく蔭山に首を向ける少女。しかし、追っ手ではないとわかったからか、興味が失せたかのようにまた水を飲みはじめた。

「お嬢ちゃん、ちょっといいかな？」

話しかける蔭山。

「なに？」

無愛想に返事をする少女。

「いやあ、大したことじゃあないんです。ただ、少しだけ話しがしたいだけなんだ」

「…そういつて誘拐する事件が騒がれてた気がするけど」

「ああ…そういえばそうだったか…あっちは調査対象外だから忘れ

てたなあ… すいませんでした。じゃあ言い方を変えます。あなた、
なんで逃げてたんです？」

「あ…おじさんはさっきすれ違った…」

ようやく興味をもったのか、水飲み場から離れ、蔭山へ向き直る少女。

「…話しをしてくれますか？」

「…あなたの、目的はなんですか？それを言ってくれたら話します」

「目的って…ただの興味ですよ。ほら、あそこのビル…天使が住んでるって話じゃあないですか」

天使という言葉聞いた瞬間、少女は目の色を変え、蔭山を睨む。

「…本当に誘拐する気ですか？」

「天使がいるってのは否定しないんですねえ」

「……」

「興味って言ったじゃあないですか。あなたを誘拐するなんて私は一言も言ってませんよ。…ちょっとそこに座りましょうか」

「……」

「ああ、もう。敬語だと逆に怪しまれる。私の悪い癖だ。…わかった、ちよつとフランクに話そう。……お嬢ちゃん。いや、天使…か？」

「……」

「あんたには本当に興味だけで会いに来た。どうしようつもりはない。ただ…必死で逃げて来たのには理由があるんじゃないのか？」

一歩下がる少女。蔭山は動かない。

「見るだけで本当はよかったんだが…気になることが出来ちゃった。なあ、もう少しぐらい話しちゃあくれないか？」

二人は場所を移すことにした。少女には追っ手が来ているため、なるべく離れる必要があったからだ。蔭山の車の助手席に乗る少女は、未だ警戒心は解いていない。カーテンも羽織ったままだ。

「……あんた何歳だ？」

しばらく沈黙が続いていたため、当たり障りのない会話を始める。

「……たぶん、十八歳」

窓の外を見ながら少女は言う。

「おいおい、たぶんで…それにいくらなんでもそこで嘘をつく必要はないだろう？　ただだけ警戒してんだ」

「…嘘なんてついてないのに…」

「まあいい。で、あんたが本当に天使って呼ばれてることでもいいんだな？」

「……よく考えたら結局誘拐されちゃった…」

「おいおい、無視すんなよ。それに誘拐じゃあないってんだろう？　それともあそこに戻りたいのか？　なんなら連れて行ってやるが…」

ちらつと表情をうかがう蔭山。そのときは本当に嫌がる顔をしていた。

「だったらいいじゃあないか。逃げたいんだったら車の方がいいだろ？　まさか、奴らもそれは予測できないだろう」

「…でも誘拐されるぐらいは考えるんじゃない？　俺、いろんな人に結構知られてるから…誘拐されないようあそこから出されなかったんだし」

「おい、あんた自分のこと俺とか言うタイプか？　なにからなにまで見た目とあってないな」

「そりゃ、本当の自分じゃないからね…」

少女の含みのある言い方が蔭山は気になったが、深くは追及しなかった。だが、少女の口ぶりからは穏やかではないものが確実に漏れていた。

「…そうだよ、誘拐される方がましかもね」

少女は自嘲するかのようにつた。

「あんなところでずっと過ごすよりも…ちょっと乱暴に扱われたとしても外の世界が見れる方が幸せだよね…」

「あんだ、どんだけ戻りたくないんだ？もし何か問題があるなら…」

「問題なんてないよ。あるとしたらそれは生まれてきたことだから」

悲痛に満ちた声に蔭山は心を痛めた。このような少女が若くして世界に絶望するなどあってはいけないことなのだ。いくら終わりかけている世の中だと言っても少女一人に幸せを満足に与えることすらできないのだろうか？

蔭山には正義感がある。しかし、それはとりわけ弱者に対するエゴにもなりえる…今がまさにそのときだ。

「…そんな顔しちゃいけない。もし…天使のうわさが本当なら…あんだ、あいつらに好き勝手利用されているんだろう？誰かに利用されるってのは契約を結んだ大人同士でしかやっちゃいけないことだから…あんだにはまだ早い」

「言っただけなら簡単だよ」

依然として冷めた態度。だが、蔭山は続ける。

「俺は…口先ばかりにはなりたくない。だから…もしあんたが神原製薬に戻りたくないって言うのなら、手伝ってやる」

「…どうなつても知らないよ？最近あそこは宗教めいてる。彼らにとつての偶像である俺がいなくなつたら…きっと全力で探しに来ると思う。それに数が底知れない。おじさんにとってリスクが大きすぎるよ」

「…逆に聞こうか。一番安全な対策とはなんだ？」

「…そんなのわかつてたら逃げてきたりしないよ。必死だつたんだから」

悪い悪い、と蔭山は笑う。

「…頼りに出来る奴らが仲間にいる。それはおそらく、今の日本じや一番頼りになる奴らだ」

「…ふーん。言うね」

「ああ、なんとたつて俺たちは…」

蔭山は胸ポケットから手帳を取り出し、すかさず少女に見せる。

しかし、少女を安心させるためであつた行為にも関わらず、それによる少女の反応は蔭山の予想に大きく反していた。

少女はむしろ警戒を強めたのだ。

「…なんだ？現代の警察じゃ不満ってか？はは…確かに殺人犯一人すらお縄にできねえからな。そりゃ信用も薄れるか…」

「下ろしてください」

「は？おい、待て」

いきなり走行中の車のドアを開けようとする少女。

鍵が掛かっているため絶対に開くことはあり得ないのだが、少女はそんなことは考えず、ただただガラス窓を叩く。

興奮状態に拍車の掛かった少女は今度はハンドルを回し、無理やり路肩に停車させようとした。

「危ない！」

やむ追えなくブレーキを踏み減速する蔭山。

車が止まるや否やドアを開け少女は逃げ出そうとする。

「だから待てっ！」

降りようとする少女の肩を掴む。強引に逃げようとする少女はその手を強く引き剥がした。離れた蔭山の手に残されたのは布切れ一つ。少女の纏っていたカーテンだった。

そして見えるのは車から去りゆく少女の後ろ姿。

「なんだあれば」

少女の体を覆い尽くしていたものが無くなった今、蔭山が目にしたものは…露わになった、背中に生えた真っ白な羽。——だけではなかった。

腕、脚、背中、首筋、体の至る所に見える痛々しい小さな傷跡。それは間違いなく注射痕であった。

あっけに取られる蔭山。その隙に少女はどんどんと遠くへ逃げてしまう。

それに気づき焦りはじめた蔭山は追い掛けようとしたが、結局その心配は無用となる。

少女は100メートルも走らない内に倒れてしまったのだ。

EP26 新しい日が

たった四畳の決して広くはない和室。そこに二人の人間がいた。

一人は少女。布団も敷いていない畳の上に横たえられている。もう一人は警察である蔭山。その傍らであぐらを組み、様子を見ていた。ここに移動してから数時間、倒れてしまっていた少女はやっと目を覚ます。

「……ここは」

見慣れない景色に困惑する少女。しかし、次第に平静を取り戻す。意識を失い、知らない場所に移ることはもう慣れてしまっているからだ。

「気が付いたか」

蔭山は声をかける。また怯えさせてしまわないように柔らかい声色で。

さすがに自分のおかれている状況を把握したのか、少女は蔭山から逃げようとはせず、ただ部屋をぐるりと見渡した。

「ここはどこ」

「俺たちが張り込みに使ってた場所だ」

「張り込み？」

「ああ。ちょいと前にヤミ金融の取引がこの周辺であってだな、そのときの張り込み調査に使ってたんだ。まあ、今は解決済だがな」

「ふーん…」

これといって興味があつたわけでもなく、素っ気ない返事をする。

「なんだ、なにも言わないのか？」

「何って？」

「いや、なぜ連れて帰ったのか、とか」

「警察なら倒れている人間を介抱するくらいの甲斐性があつてあたりまえじゃないですか」

「感謝しないのか？」

「見返りを求めてるんですか？」

「いや、そうじゃない」

「なら、いいじゃないですか、別に」

心底面倒くさそうに話す少女。実際少々体調が芳しくないようだ。

少女は自分からなにも話そうとはせず、起こした身体をもう一度布団の中に埋めた。

無理に話しかけていても仕方ない。どうせしばらくは動く気もないだろう。

蔭山はゆっくりと立ち上がり、台所に向かった。あるのはまな板を置くスペースとカセットコンロだけ。調理をするには十分だがあまりにも粗末であった。

冷蔵庫は無いので、近くのスーパーで買ってきた食材をレジ袋から全て出す。

コンロに火を付け、豚肉を軽く炒めたあと適当な大きさに切った野菜を放り込む。

レンジがあるので、パックご飯を温める。

「出来た」

香ばしい匂いが部屋中に漂う。それにつられ少女も布団から顔を出す。

「…食欲はあるか？」

蔭山は尋ねる。

「そんなもの……わからない」

気まずそうに返す少女。確かに腹が減っているような素振りは見せない。

だが、蔭山は先の倒れたことを考えると、無理にでも食べさそうと

思った。

「いいから食べる。また倒れられたら大変だ」

「あなたには関係ないじゃないですか」

「いや、関係ある。倒れている人間を介抱するくらいの甲斐性を見せなくちゃならんからな」

呆れてものが言えなくなる少女。この男は危険でないと思ったのか、仕方なしに料理に手を付けようと半身を起こす。

しかし、運ばれてきた料理を見て心底残念そうな顔をみせた。

蔭山が作ったものはなんの彩りもない肉野菜炒め。そしてパックご飯である。

いくら食欲がないと言っても、もう少し上等なものを期待した少女にとっては好意も少ししか伝わらない。

「ん？どうした」

「…いや、なんでもない」

「ほら、箸」

渡されたのは割りばし。少女はそれを二つに割り、料理へと近付ける。

だが、箸を握った少女の手は酷くおぼつかないものだった。それは

まるで初めて箸を使うような素振りであったのだ。

「ん？やはり日本人じゃないのか？」

心配そうに聞く蔭山。少し悪いことをしたと思った。箸の扱いに慣れていないと思ったのだ。

少女はそれに首を横に振る。

「いや、違います。その…力がうまく入らなくて…」

確かに箸の持ち方はきちんとしていた。だが、二本の箸がかちかちと音をたてている。手が震えているのだ。

それを見兼ねた蔭山は箸を奪い取った。そしてひとつまみの野菜を箸で挟む。

「ほら、食べ」

少し躊躇したが、少女は文句を言わず口を開けた。

「うつ！——」

だが、口に入れて飲み込んだ早々、少女はそれを吐き出してしまった。

「かつ…は…げぼげぼ…」

「すまん、まずかったか？」

「違う……その……胃が、びっくりしたんだと……思います」

「はあ？あんだ、いつから食べてないんだ」

「……忘れました」

「おいおい、忘れるぐらい食べてないわけ……！！」

蔭山は少女の袖を捲る。そして腕についた注射痕を指差す。

「まさかこれか？ 点滴の痕じゃないだろうな？」

蔭山が言っているのは点滴だ。点滴ならばものを口にしなくても最低限の栄養の補給が出来る。

「……半分そうです。食事は点滴。でも、注射は点滴だけのじゃないです」

「なんとなく何をされていたか読めてきた」

「だからと言って何もしないでください」

少女は拒むように腕を引きもどす。

「俺はもういいんです。諦めたんです。自分にできることなら……何でもやるって。どうせ一度失った命ですから」

「死にかけていたところを神原に拾われたのか？」

「違います。……違いますけど、教えてあげれることなんてありません」

頑なに拒む少女。なぜ少女がそこまでするのか蔭山にはわからなかった。

「じゃあこれはどうなんだ？」

蔭山は少女に生えた羽を指差す。

「あんた、ただ珍しかったから研究に使われてるんじゃないだろうな？　それも人体実験のような……」

「羽は……結果的にばれただけです。あの人たちは、俺が子供を産めるからって目をつけただけです」

「……まあ、いい。全部は聞かないでこつ」

少女にもそれなりの苦勞があり、自分でどうにかしたいのだろう。そう思い蔭山は余計なことを聞くのをやめた。

蔭山には少女が普通ではない、だから奴らに束縛されているのだとわかれば十分であった。

「……で、あんたはどうしたいんだ？」

当面の問題を投げ掛ける。少女にやりたいようにやらせようとしているのは、必要以上に関わるべきではないと思ったからだろう。少女が迷惑だと思ふのなら無理に手出しする意味はない。

「お、俺は……」

少女は何か言おうとしたが、すぐに黙り込んでしまった。

だが、彼女の言わんとしていることを蔭山はわかっていた。少女は蔭山の迷惑になりたくはないのだ。だから、口に出したい言葉はひとつ。ここを離れるということ。

しかし、そう簡単には即答の出来ない心情なのだ。それをわかっていて蔭山はなにも言わない。少女の決意を確かめるために。

「……」

数分経つても何も言わない。結局言葉は途切れてしまった。

埒が明かないと踏んだ蔭山は仕方なく、箸を再び構える。もう一度肉をつまみ少女の口の前へと持っていく。

「難しい話は後にするか。飯食ってからでも遅くはないだろう」

堅苦しくし過ぎたと反省した蔭山は、少女にやんわりと言う。

少女の堅くなっていた表情も幾分か和らいだ。やはり少女にはまだはつきりとした決断は出来なかったのだ。もしここを離れたとしても行くあてがない。いくら見ず知らずの男の家とは言え、ありがたかったのが事実であった。

しかし、のばされた箸を改めて見て苦笑いをする少女。一度吐いてしまったため、そうそう食べようという気にはなれなかったのだ。

「あの……水とかだけでいいです」

「なにを言ってるんだ。どのみちあんなよくわからんところに戻りたくないのなら普通の食事ができなきゃ話にならんだろう。つべこべ言わず食べる。一度吐いたからってなんだ。食べ物を粗末にしちゃいかんだろう」

蔭山は冗談交じりで言ったのだが、あまりの勢いに少女は気圧されそうになっていた。

生唾をぐくりと飲み、覚悟を決めたかのように箸に咥えつく。

「そうだ。よく噛んで食べるよ」

先ほどはあまり噛まずに呑み込んだこともあったため、少女はその忠告を受け入れ、素直にそれを噛みしめた。

その少女の顔には気がつけば涙が浮かんでいた。

「おいおい！ どうした？ そんなに強く言っただつもりはなかったんだが……」

これはまた言い過ぎたのかとあわてる蔭山。

少女はそれを聞いて大きく首を横に振る。そして笑顔を向けていった。

「いえ……久しぶりの……その、食べ物がおいしくて」

蔭山は呆氣にとられた。こんなにきれいに笑うとは思わなかったのだ。少女は自分を諦めたなどと言っていたが、蔭山にはそう思うことができなかった。

「……ダメだ。あんた。自分を捨てるにはまだ早すぎる」

「え？」

「俺が匿ってやる。本当は好きにさせるつもりだったが……気が変わった。あんたにはしばらく身を潜めてもらおう」

勝手なことを言っているとは分かっていた。しかし、自分は正しいことをしている、少女を助けているんだという正義感に酔っていた。少女にとっては喜ばしいことだったが、片手離しには浮かれられない。警察と言う立場の人間には距離を置きたかったからだ。

だが、ここでそれを拒むのも不自然である。少女は暫し考えることをやめた。ここ最近の苦勞からの開放が判断を鈍らせた。

「どうだ？」

「……わかりました。ありがとうございます。しばらくお世話になります」

「そうかそうか。よし、子供はそれでいいんだ。大人に頼って生きる。特に今のご時世女は生きづらいからな」

「はあ……」

もう蔭山は完全に浮かっていた。偽善やおせっかいの判断がうまく出来ないほどに。

「よし、大丈夫そうじゃないか。だんだん慣れてきたな。ああ、あせらず食べゆつくりでいいからな」

「そんなに早く食べれませんよ。もっとゆつくりさせてください」

「そうかそうか。そういや――」

しかし少女もまたそうであった。久々に感じる人の温かさに、その身を大きく委ねようとしていた。もはや蔭山に対する疑いの心は無くなっていた。

「あんた、名前はなんて言うんだ？」

「俺の名前は……東雲真人です」

EP27 敵と味方と（前書き）

久々で少し文章が変かもしれませんがよろしくお願いします。

EP27 敵と味方と

それから、少女、東雲真人は蔭山と暮らすことになった。

しかし、出会った当初の蔭山とは大分印象が変わってきていた。探るような目。それが真人には気になって仕方が無かった。

あれから神原から追手は来ていない。それも真人の不安の種であった。あれだけ真人に依存していた組織がこう簡単に手放すとは思えない。

だが、何かを行動に移すわけにもいかない。目立った行動をすれば、すぐこの容姿ではばれてしまうだろう。

真人は部屋を出ることが出来なくなっていた。

蔭山といえば、朝早くから部屋を出ていく。一応適当な食事を真人に与えてはくれるものの、なかなか顔をあわせる時間は少なくなっていた。

「……外か」

真人は一人つぶやく。そもそも逃げて来た目的の一つはもう一度外の景色を自分の目線で見ることだった。しかし、結果的には外に出てもそれが叶わなくなっている。

だが、負担の大きい血液採取などから免れてきたのだから、それに関しては幾分か満足していた。

ただ、他にも問題はあった。

羽の色がくすみ、大きさ自体も多少小さくなっているのだ。

真人のなかではある一つの仮説が立てられていた。

天使の存在理由についてだ。

真人は神様の命令に従うように言われた。しかし、それが一体具体的に何なのかかわからず日々を過ごしていた。気が付けば羽の色、大きさが変化している。

そのことから推測した結果、天使としての成果の指標ではないのだろうか。

実は、真人が神原の下で従わされていたとき、羽の状態は今よりもかなり良いものだった。それが示すのは神原のもとで働くイコール人々のためになるということではないだろうか。

真人は薄々感じていた。

神は自分を監視しているのではないか？

そもそも無償で生き返らせるようなことを神とも言わなければならない。神がすべてに平等なのだとして……少年一人に構うはずがない。

なぜ自分が、選ばれたのか？　そもそも選ばれたということなのか。はたまた気まぐれか。

自分に与えられた使命にどんな意味があるのか。そんなことを考えるようになっていた。

そして、変わってきた心境の変化。いろいろと感じられるようになって、死ぬことへの恐怖が生まれた。一度失った命であるにも関わらず、佐花とも別れを交わし、一人ぼっちであるにも関わらず、それは再び真人を苦しめた。

痛みを感じることも、過去に比べれば、幸せなことであつたのだ。

もし、天使として働くことが新しい命と引き換えなら、神原には協力せざるを得なかった。

一時的な感情でここまで逃げてしまったが、戻るつもりではあつた。しかし蔭山に言いくるめられた今、天使を休業するしかない。

仮説でしかないが、真人は気が気でなかった。

「……出来ることは他にもあるはず。別にあの人たちに従う必要はないんだ。自分で出来ること……人のためになることを考えればいい——」

真人はあることを思いついた。

「警察の手伝いがしたい？」

「はい」

「あんたはバカか。ダメに決まってるだろう」

蔭山が家に帰ってくるなり真人は相談した。人のために何かがしたいと。

しかし蔭山はそれを一蹴した。

「な、なんでですか？」

「危ないからだ。それに俺たちは特に危険な要事に関わっている」

真人はそれを聞いて一瞬で気づいた。殺人事件のことだと。ならばなおさら引き下がれない。その事件にはかつての親友が関わっているのかも知れないのだから。

「連続殺人事件のことですか」

確かめるように問う。

蔭山は隠す気もなくああそうだと言った。持って帰ってきたビニール袋からおにぎりを取り出し、一つを真人の前に差し出す。もう一つは包装を開き、自分の口元へと運んだ。

真人もそれに一口だけ手を付けると蔭山に言った。

「このまま、ここで迷惑をかけてるわけにはいきませんから」

もちろん建前だ。本当は自分のため。神に従うため。

蔭山はおにぎりを食べおわると立ち上がり台所に向かう。

真人の質問には答えない。

「……無視ですか」

さすがの真人も蔭山の態度にいらついてしまう。しかし蔭山は至って表情を変えない。

このとき蔭山は悩んでいた。なぜなら、この少女が今まで探していた殺人犯の親友かもしれないからだ。プロフィールでは男と書いていたものの、同姓同名であるがゆえ、気がかりでしかたない。いくら今は死んでいるかも知れないとはいえ、軽視できない存在なのだ。もしこの少女が本当にその少年のことならば、安易にこちらの本部に近付けるわけにはいかない。

少なくともこの少女について知る必要がある。蔭山は考えた結果、真人に質問した。

「曉って名前、聞いたことないか」

わかりやすいぐらいに真人は反応を見せた。手に持っていたおにぎりを落とし、あわてて拾う。

「知ってるんだな」

蔭山の中で疑惑が強まった。少なくともなんらか関係があると思っ

た。

「知らない……です」

ごまかせるとは思っていなかったが、真人は嘘をつく。

蔭山はそうか、と言ってそれ以上何も聞かなかった。この反応で十分だったからだ。

「東雲、だったな。あんたの望み、叶えてやれねえよ。手伝わせてやれることは何もないし、そこで何かするってこと自体許可できない。わかるだろう？ 一般人の立ち寄るところじゃないんだ」

「俺、一般人じゃないです。普通じゃないです。それに……人間ですらない、です」

蔭山は真人からそのような言葉が出るとは思わなかった。自らを人間ではないという少女、その表情は少し陰りを見せていた。

蔭山は良心に問い掛けられていた。こんな小さな少女を傷つけてしまったことが心にぐさりと突き刺さる。しかし、冷静な判断をしないことはならない。警戒を解くすべはないのだ。

それに、いくら少女が普通でないとと言っても、人殺しが蔓延る世界に足を踏み込ませるわけにはいかない。選択肢は一つ、拒否しかないはずだ。少女が何者であったとしても関係ないのだ。

先ほどの言葉の綾になっただけ、少女に言いくるめられてはならない。

「……あんたが人間でないのは背中を見りゃわかる。もしかしたら普通の人よりも頑丈だったりするのかもしれない。だが、そんなことは知ったこっちゃねえ。これは俺達だけの仕事。それは変わらないんだ。人のために何かがしたいなら別のことを考えろ」

そう言つて蔭山は話をきつた。

真人は仕方ないと思つた。それが当り前だからだ。自分が特別な存在だから、ひよつとすればくらいに思つていただけだ。

だが、引きさがる気はなかった。確かに蔭山の言つとおり、出来ることは他にもあるかもしれない。しかし、殺人犯を捕まえることぐらしいしか神原の元で働くことに匹敵することが無いと直感的に氣づいていたのだ。

そこまでしないと、自分はどうになるかわからない。そこまでの使命が真人にはあるのだ。

蔭山が拒否するのは当然、ゆえに真人はもう一つ案を考えていた。

自分一人で犯人を捜せばいい、と。

「まだ、いる」

一言つぶやき、音もなくそれは飛び去った。人ごみの中からの飛揚にも関わらず、その羽は何物の妨げを受けることなく風を捕える。

その存在に気づくものは一人もいない。道行く人々は整然と歩き続けるだけであった。

「おかしい。もう、終わったはずなのに」

最寄りのビルの屋上にすんと脚を下ろし、街を見下ろす。行きかう人々を眺めまたつぶやいた。

一人、誰に答えを求めるわけでもなく。

「誰だ？ まだ生きているのは」

それは両手を広げた。街全体を包むかのように。そっと目をつむり何かを感じる。

だが、見つかるものは何もなかった。そこに拾い上げたものはわずかな違和感のみ。

自らと同じ匂いだった。

「作られた、ものがいるのか」

それはあり得ない推測だった。もう、消し去ったはずなのだから。

どちらにせよ、一人として存在を許してはいけない。

それは再び羽を広げた。そして、苦い顔を隠しきれず、荒々しく飛び去った。

EP28 そこにいる影 (前書き)

遅くなりました、更新です

EP28 そこにいる影

いつも通り、蔭山は家を出て行った。それを窓から見送る真人。その背中が見えなくなったこと確認するとクローゼットの中を漁りだす。何か着るものを探すためだ。

しかし、中にあるものは全て大きいサイズしかない。仕方なく、Tシャツを手に取り、ワンピースのように身にまとった。羽がごわごわするかと思っただが、以前よりもかなり小さくなっていたため気にするほどではなかった。

しかし、まだ傍目から見れば目につくぐらいなので、適当なジャケットを見つくり、それを羽織った。結構衣類が揃っていたのは幸いであった。

「よし、行こう」

玄関に向かい、蔭山のサンダルを履き、自分サイズに目一杯絞ると、さっそく玄関を出た。

そこは、一件の廃屋だった。今にもつぶれそうに見えたが、妙に頑丈な作りであることがわかる。

表面はトタンで被われているのだが、その内側はコンクリートなの

だ。それが一階。二階は一見すると木造にしか見えないが、こちら
も木目をあしらった金属メッキで出来ている。

このヘンテコな廃屋の前に、真人は腰掛ける。

なにかを探しているのだ。

まるで、目当てのものがそこにあるとわかっているかのように、地
面を素手で掘りすすめていく。柔らかい土ではあったが、湿ってい
るため作業は難航する。

手を真っ黒にしながらも数分で目的のものを見つけた。それは、
箱なんかに入られていなく、裸のままの鍵だった。これだけ小さ
なものだ、少しでも場所を間違えれば見つけることは出来なかつた
だろう。

埋めてから何年も過ぎていたが、見つけられたことで、一息つく真
人。それを強く握りしめると、廃屋の扉へと向かう。

扉の鍵穴にそれを差し込み、左に回すと、カチツという音になる。
引き戸になっているため、全力を込めて右へと引く真人。扉自体も
いくらか質量のあるものだ。錆付いていることあり開けにくい要因
になっていた。

開け放たれた扉から真人はその中へと入っていく。

電気などつくわけもない廃屋をひたすら進む。いくつも部屋が見受
けられるが、目もくれず行くべき場所へと誘われていく。

そこは、ごく普通の部屋だった。どこやかしこほりを被っていお

り、みすばらしい家具ばかりであるが、配置は整っている。

一つだけある机に真人は近づく。そして、そっと引き出しを開く……。

「……今さら意味あるのかな」

取り出したのは、日記帳だった。

「でも、もしかしたら、なにかわかるかもしれないし。それに……」
さまざまな感情が真人のなかを駆け巡る。それが日記帳を開くことに戸惑いを与えた。だが、迷ってる場合ではないのだ。今、真人がしなければいけないこと、それは真実を確かめることだ。

その日記帳は、真人が暁零にあげたものであった。そしてこの部屋は以前に彼の住んでいた部屋。この建物は彼の家のようなものだった。

真人は、よくこの家に遊びに来ていた。いや、ほとんど自分の家になっただけくらいだ。自分の家には帰らなくなっていたのだ。親友のために。

真人は暁の素行が悪くなっていくことに気がついた。詳しい理由はわからなかったが、それは他人に危害を加えるほどにエスカレートしていたのだ。それを芳しく思わなかった真人は、暁を監視することにし、いつも近くにいることに決めたのだ。それが結果的に真人まで非行に走ったと思われる原因となった。

しかし、それでも構わなかった。自分がだれになんとわれようと

も、親友が少しでも悪い道からそれてくれるのなら構わないと思っただからだ。

そんな生活を続けているうちに、もっと真面目になつてくれないかと考えた結果、誕生日に日記帳を渡すことにしたのだ。自分自身くだらないと思つたが、毎日なにをしたか書くことによつて、いろいろと反省すべき点に気がついてくれるのではないかと思つたのだ。

男らしい暁に本当に意味があるのか、下手したら捨てられるのではないかと思ひながら気休めに渡したものだつたが、以外にも一日一日、分量は少ないものの書いてくれたのだ。

真人自身、彼が何を書いていたかは知らない。だが、日々に関するなにかは間違いなく記されているはずだと思つた。親友が机に向かつてなにかを書いているのをしっかりと見ていたのだから。

いつまで続けてくれたかはわからない。そもそも真人が死んでから彼がどういった生活を送っていたかはわかるはずがないので、ここに日記帳が残っていることすら奇跡と言つてもいいぐらいなのだ。

場合によればここで鉢合わせになることもありえると思つていた真人だが、さすがに警察に追われているだけあつて、住処を変えているのは仕方ないことだつた。

だから、せめて、残されていた日記帳だけでも見て何か手掛かりをつかみたかつたのだ。

心を決めた真人は、ゆっくりとその表紙を開いた。

最初に書いていたことは何ともないことばかりだった。

真人から日記をもらった。面倒だが暇つぶしに書いてみることにした。だれとケンカをした。そんなことだった。

読み進めていくにつれ、徐々に行うことが過激になることも確認できた。それは、真人の記憶しているものとも一致していた。

どこの窓ガラスをわった、どこのものを盗んだ、誰を殴った――。

一ページ一ページ、読み飛ばすことなく進める。自分が止められなかった数々の行為を噛みしめ。

だが、しだいにペースを落としていく。読み進めるのを怖れているためだ。

その日を越えてしまったら、知りたくないことを知ってしまうかもしれないから。

その日以降に、誰かを殺した――などと書いてあれば、連続殺人犯である確率は高くなる。

だが、確認するしかない。親友が何をしていたとしてもそれを認めるしかない。そして……しかるべき行動をするまでなのだ。

ふと手を止める。真人はあることに気がついた。

出来事ばかりに目を通しがちだったが、毎日毎日、暁の心情も少な

くはあるが書かれているのだ。

それが、日を追うごとに不気味に変化している。そして、それは全部出来事とは直接関係のないことに思えた。

——この世界は腐っている。

——生きていく意味なんてどこにあるんだ。

——もう人類に未来なんてないのに。

——何をしたって構わないだろ。

——俺の意志は誰が継いでくれるっていうんだ。

——死ぬが怖い。でも、命がつかないことのほうが、怖い。

真人は暁のことを思い出す。よく、難しいことを一人考えていたことを。

昔は思春期によくあるものだと考えていたが、そんなふわふわしたものではなかったのだ。常になにかに追い詰められているようで、悩みを抱えているようであった。

——自分が死んでも、子供が入れば、魂は其中で生き続けるんじゃないのか。

神様について二人で話してから、暁は宗教じみたことを口にするようになっていた。

そのなかでもよく言っていたのがそれだった。

「ひよつとして、子供が産まれることがなくなったから……暁は――」

日記は、真人の命日まで続けられてはいなかった。飽きっぽい性格ではあったため、不思議とは思わない真人だったが、気味悪さだけが残った。

今までと同じ流れで突然途切れたならまだよかったが、最後の最後には意味深な文章が記されていた。

『神様は、善行にだけ目を留めるのか。神様は、俺を見てはくれないのか』

暁は、救いを求めていたのだ。人間にはどうしようもない、世界の終わりに。

死を、誰より怖れていたために――。

真人は日記を閉じた。

結局事件について直接関わるようなことはなかった。

ただ、親友の心の闇を覗いてしまったただけであった。

そして、再び自分の無力さを悔いた。なんの助けも出来ていなかったのだから。

鍵を閉め、廃屋を後にする。なんの手掛かりも得られなかった真人

だが、仕方なく蔭山の元へと帰るのであった。

廃屋が見えなくなるくらい歩いたそのときだった。真人の身体は何者かに残るから引き寄せられてしまい、人の目に入らない路地の方へ連れ去られてしまった。

なにが起こったのか理解できない真人であったが、それでも自分を押さえている人物の顔を確認しようと首を捻ったが、時すでに遅く、頭から麻袋のようなものを被せられてしまった。

胸の当たりで器用にそれをきつく締められると、今度は両腕も後ろにはビニールテープで固定されてしまった。

身動きが取れなくなってしまった真人は、そのまま担ぎ上げられると、どこへかと連れ去られてしまうのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8346k/>

Angelworks

2011年10月11日03時09分発行